
空飛ぶクジラはやさしく唄う

野鶴善明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空飛ぶクジラはやさしく唄う

【Nコード】

N0481J

【作者名】

野鶴善明

【あらすじ】

ある冬の日、初恋の人だった遙と別れた佑弥は思い出がつかなくなった駅前通りへ散歩に出かける。純粹に愛そうとすればするほど、自分を見失ってしまった遙。そんな遙を支えてあげられず、彼女を悲しませてしまったと悔やむ佑弥。佑弥は、やさしさゆえに別れるよりほかなかったふたりの愛を振り返る。ほんものの恋愛とはなんだろうと。愛することの意味はなんだろうと。

どうでなにをしているの？

木枯らしがアスファルトに落ちた枯葉をさらってゆく。風に巻かれた木の葉たちはコンクリート造りの小さな橋を渡りそこね、狭苦しい住宅街を縫いながら流れる川へはらはら落ちる。肩をすぼめた僕は、遥が編んでくれたマフラーを巻きなおした。いつそのこと、川に氷が張るくらいに、息も凍るくらいに冷たくなってくれたら、遥のことを思い出さなくてもすむのに。

信号が青に変わる。僕は立ち止まるうとしていたのだけど、見えない力に引つ張られるようにして、また歩き始めた。自分が自分ではないような、うつろな気分。心が抜け殻になってしまったようで、ふわふわして地に足がつかない。ランドセルを背負った小学生たちが、はしやぎながら僕を追い越す。

ふたりの思い出がつまった駅前を通りは、もうクリスマスの支度が始まっていた。コンビニも、ハンバーガーショップも、ドラッグストアも、ブティックも、店の前にクリスマスツリーを置いたり、金と銀のモールを飾り付けたり、ガラス窓に白いスプレーでサンタクロースやトナカイの絵を書いたりして華やかだけど、僕の心まで賑やかにはしてくれない。去年の今頃は、世界中のすべてが僕たちを祝福してくれているように感じたのに。

「わたしは自分のことなんてなんにも知らない。だから、ゆうちゃんのことともよくわからないの。自分のことを知らない人は、ほんとうに誰かを愛することなんてできないのよ。だから」

あの日、遥はつらそうな顔をして切り出した。言葉につつかえる彼女が痛々しい。綺麗に切りそろえたショートカットの黒髪が垂れ、化粧もなにもしていない素顔のままの白い顔が隠れる。あれほどなんでも話してくれたのに、もう自分の心は見せたくないと僕から逃れるように。

どんなふうに愛し合えばいいのかということとは、ふたりでなんと

も話し合ったことだった。僕は、ゆっくりいろんなことがわかるようにならばいいと、繰り返し彼女に言い聞かせた。僕自身にしろ、愛の意味なんて、なんにも知らないのだから。でも、僕の言葉も想いも、遥の支えにはならなかった。彼女にあんな別れの言葉を言わせたのは、たぶん、僕なのだろう。心がうつむく。グラスが傾くようにして、心のはしから氷水がこぼれそうになる。

遥のことなら、神さまよりもずっと理解していたつもりだったのに。

僕は、いったい遥のなにをわかっていたのだろうか？

一週間前、別れることに決めて、駅の改札口まで遥を送った。気だるくてさびしい昼下がりであった。

「気が変わったら、いつでも帰っておいでよ」

彼女の荷物をつめた紙袋を渡した。意外に重かったから、彼女一人で持ちきれぬだろうかと心配だった。ふと触れ合った指先が、今になっては妙に気恥ずかしい。

「わたしは、ゆうちゃんを傷つけたのよ」

遥はうつむく。遥の声は、泣いているようにも、怒っているようにも聞こえた。自分の感情をもてあました時のいつもの癖だった。

「いいんだよ」

僕は、さらりと手を振って背中を向けた。

遥の強い視線を背中に感じたけど、僕は振り返らなかった。振り返ることなんて、できなかった。駅前のロータリーへ出た僕は、一瞬のうちに、これまでの六年半あまりのことを思い出していた。初めての恋人との初めての別れ。いろんな感情を押し寄せすぎて、僕の心は、ただ腫れたように痺れるだけ。かけがえのない人を失った直後は、こんなものなのだろうか。きつと、明日あたりには心が落ち着いて、さよならを実感するのだろうか。そんなことをぼんやり思いながら、あてずっぽうに都営バスに乗った。僕は外の景色も、自分の心も見なかった。早く遥から離れてあげなくっちゃ。そのことばかり、ずっと自分に言い聞かせていた。

初めて遙に出会ったのは、中学三年生の時だった。新しいクラスでたまたま隣同士に坐ったのが、彼女だった。遙は友達を作ろうともせず、ただ静かに自分の世界を守るようにして、休み時間は必ず独りで文学書や聖書やキリスト教関係の本を読んでいた。おとなしそうな外見とはうらはらに、本を見つめる彼女のまなざしは勁つよかつたから、僕は無口だけど意思の強い女の子なんだろうなと感じた。遙のそばに坐ると、いつも透明な香りがした。その香りは、どこか神秘的で、誇り高くて、涼やかな月の光のようだった。かぐや姫がもし実在したのなら、きつと遙のような少女だったに違いない。わけもなくそんな気がしてならなかった、というよりも、中学生らしい身勝手さで僕はそう決めつけてしまった。彼女の清明な香りが、すりきれた家族とともに暮らしていた僕の心を明るくしてくれた。

僕は、必要なこと以外は口を開こうとしない彼女へなにくれとなく話しかけた。話しかけずにはいられなかった。やや開き気味の大きな瞳が愛らしいし、人形のように小作りな顔も、雪肌のすらっとしたうなじも素敵だし、なにより、細いあごの片隅についた小さなほくろがあどけなかった。遙は初めのほうこそ僕にとまどっていたけど、そのうち自分から僕へ話しかけてくれるようになり、時折、飛びきりの笑顔を僕だけに見せてくれるようにもなった。

ずっと好きだった。

初恋の人だった。

彼女以外の女の子のことは考えられなかったし、考えたこともなかった。別々の高校へ進んだ後も、友達以上恋人未満の付き合いは続いた。

遙は現役で東京の大学へ進み、浪人した僕は一年遅れで地元を離れて東京へやってきた。御茶ノ水の聖橋で再会した時、僕たちはぎこちなかった。僕よりも一足先に大都会の暮らしに馴染んだ彼女は、別世界の人のように大人びていたから。でも、一緒に時を過ごすうちに、中高校生の頃のようにまた打ち解けることができた。学校の

ことも、友達のことも、家族のことも、人には言えない悩み事も、なんでも話せる友達へ戻った。僕の遙を取り戻せてうれしかった。

去年のクリスマス前、僕の買い物に付き合ってもらって街を歩きながら、そつと遙の手を握ってみた。振りほどかれたらどうしよう、友達でさえいられなくなったらどうしよう、と冷やひやしたけど、遙は思ったよりも確かに僕の掌を握り返してくれた。

「わたしを受け容れてくれるのは、ゆうちゃんだけよ」

遙の声はあたたかだった。彼女の声はいつも木琴を叩いたように高く透明な音を響かせていたけど、あの時は、ひときわ澄んでいた。僕の二の腕が柔らかく熟れた彼女の乳房に押し当たる。愛が息吹き始めた彼女の鼓動が波打つようだった。

冷たく澄んだ水溜りがきらりと光る。

ふと足をとめ、空を見上げた。

今頃、どこで、なにをしているのだろうか？

泣いたりしていないといいんだけど。

雨上がりのさっぱりとした青空に、クジラのような形をした雲がぼっかり浮かんでいる。大きな雲の下に小さな雲がへばりついていて、お母さんクジラに寄り添う赤ちゃんクジラのように。お母さんクジラはやさしい子守唄を唄っているみたいと、遙ならきつとそう言うだろう。彼女は雲を眺めるのが好きだった。地元にいた頃は河川敷まで自転車を走らせて、ふたりで土手に坐りながら雲の形を動物に見立ててよく遊んだ。冬の午後のやわらかい陽射しが僕をぬぐう。心がしんみりして、目の縁がほんのり熱くなる。

ほんとうに恋するよりも、恋をしたふりをしているほうがずっとうまくいく。そんな意地悪なことを言った恋の達人がいるけど、僕たちにはそんな器用な真似はできなかつたし、したくもなかつた。ほんとうの気持ちだけをお互いだけに伝えたかった。でも、恋の達人の言葉はある意味で事実を言い当てているのかもしれない。ほんとうに愛そうとすればするほど、相手のことを思おうとすればする

ほど、僕たちは迷宮をさまようようになってしまったから。ずっと抱きしめていたかったのに、結局、遙を手放すことになってしまったから。

愛って、いったい何なんだろう？

君の涙はふたりのものはず

遙の異変に気づいたのは、仲秋の名月の日だった。

ふたりに夕飯の買い物へ出かけた時、和菓子屋の店先にパック詰め
の月見団子が並んでいるのを見かけた。

「そういえば、今日はお月見だったね。 買おうか」

僕が一つ手に取ると、

「わたしが自分で作るわ。 実はね、もう準備してあるの
と、遙ははしゃぐ。

「それで小豆を水につけてたのか」

下宿の流し台の脇に水を張ったボールが置いてあって、なかには
小豆が入っていた。

「あれさ、けっこう量があったよね。 赤飯も炊くの？」

仲秋の名月だから赤飯も炊くのかな、とそんな疑問が頭に浮かん
だ。

「お団子だけよ。 たくさん作りたいの」

「そんなに食べられないよ」

「だって、お月さまにお供えするんでしょ。 たくさんあったほうが、
お月さまもきつと悦「いそがんでくれるわよ。 残ったら、明日の晩、十六夜「いそが
のお月さまにもう一度お供えして、それから食べればいいんだから」

「遙がそういうのなら」

「そうしましょ」

遙はちいさくスキップした。

僕たちは和菓子屋を通り過ぎ、スーパーで夕飯の材料と団子の粉
を買った。 遙は月見団子を作ることがそんなに嬉しいのか、帰り道
は僕の腕にしがみついたままだった。 遙は、朝から妙に機嫌がよか
った。

ふたりの「家」へ帰り、遙はさっそく小豆を煮始めた。 僕も手伝
おうとしたのだけど、わたしの領分だからと言って僕に触らせない。

遥はままごとをして遊ぶ女の子のように目をきらきら輝かせ、鼻歌を歌いながら団子を丸める。できあがった餡を板状にしてから、へらで雲の形に整え、団子に巻きつけた。叢雲むらくも月見団子ができあがった。

窓辺に折り畳み式のテーブルを置いて大皿に並べた月見団子を供え、その脇に花屋で買った薄を飾った。

夜空に低く満月が浮かんでいる。

薄い雲が夜空をかすめ、月をぼんやりさせる。

「お月さま、眠そうね。うたたねしているみたい」

遥はふつと微笑んだ。

僕が借りたワンルームマンションで同棲を始めてから、半年ほど経っていた。遥との暮らしは、夢の中にいるようで、生まれて初めて、さびしくないと心から感じる事ができた。冷え切った家庭に育ち、こんなところにおいては自分が駄目になつてしまふといつも焦っていた僕は、ようやく自分の落ち着く先を見つけることができたのだ。遥だけが、僕の居場所だった。

このままでいられますように。

胸のうちにそう願いながら、お月さまに手を合わせた。ずっと、この暮らしが変わらないでほしい。ふと薄目を開けると、僕の隣で跪いた遥は月に向かつて十字を切っている。

「お月さまにお祈りしてるの？」僕は訊いた。

「そうよ」

「いくらなんでも、それはおかしいんじゃない？」

「そうね」

遥はふつと吹き出す。

「でも、いいじゃない。わたしはなんにだって祈りたい気分なのよ。すべてに感謝したい気持ちでいっぱいなのよ」

遥はちよっぴり真顔になった。僕と一緒に暮らして、彼女も幸せな気分できてくれているんだ。そう思うと、心あたたくくなれた。

「天にまします神さまに見つかからないように、こっそりお祈りしな

よ

「やっぱり怒られるかなあ」

「そうだったら、僕がかばってあげる。なんなら、神さまと戦ってもいいよ」

「ゆうちゃんと神さまだったら、ゆうちゃんに勝ち目はないわよ。ゆうちゃんこそ、どうかしてるわよ」

僕たちは笑い転げた。

お月さまを拝んでから、夕飯を食べた。

遙は、僕のリクエストに応じてチーズハンバーグを作ってくれた。チーズがいい感じだとろけておいしい。この頃、遙の料理の腕はめきめき上達していた。遙自身も炊事が楽しみになってきたようだ。遙がテストで忙しい時やバイトで遅くなる時は僕も料理したけど、それ以外の時は僕には作らせてくれない。遙は食事の支度だけではなく、自分が家事を取り仕切ること生きがいに似たものを見い出したようだった。僕が家事をするとどうしても雑になるから、自分の手できっちり仕上げたいのだろうか。それとも、母性がそうさせるのだろうか。ともあれ、ここがふたりの家だと思ってくれていることだけは確かだった。

デザートにおさがりの月見団子を食べた。

「もうちょっとお砂糖を入れたほうがよかったかしら」

遙は、舌のなかであんこを転がして吟味する。

「そうだね。甘味が足りないかな。でも、初めて作ったにしていはいできだし、まずまずの味だと思うよ」

「お砂糖を入れる時に、ちょっと迷ってしまったの。あんまり甘すぎて太ったらどうしよって。だから、すくなめに入れちゃったのよ」

「遙は華奢だから、そんなに気にしなくても平気だよ。むしろ、すこしくらい太ったほうがいいんじゃない」

「でも、やっぱり太りたくないわ。太りすぎちゃって、遙なんかいりませんって、ゆうちゃんに言われたらどうしよって考えてしま

うもの」

「今より十キロ太つても、そんなことは言わないよ」

「ほんと？」

「そうなつたら、いつしよにジヨギングしてダイエットしようよ」

「うれしいわ。約束よ。わたしは、まだまだ修行が足りないの

ね。太りたくないって自分の欲を出したから、餡を上手に仕上げられなかった。食べ物を作る時は、どうやったらおいしくなるのかって、それだけを考えなくちゃいけないのよね。つまらない我を張つたらいけないのよ」

「次はうまくいくよ」

「今度、おはぎを作るわね」

お茶を飲んで一服した。

満月は空高くのぼっている。

東京で見る月は地元の月ほど美しくないけれど、それでも僕をのんびりとした気分になんてさせてくれた。遥は僕の肩にもたれかかり、

「ねえ、ゆうちゃん、さきにシャワーを浴びてよ」

と言って、愛おしくてたまらなさそうに僕の首を抱いた。

今日の遥は、いつになく積極的だった。遥が年上の女になったようだ。

遥が何度も僕の名前を呼ぶ。

その声は、たいせつなものが欲しいと求めている。遠い潮騒を聞くように、僕はずっと昔からそれを知っていた気がする。その声に導かれて、今まで生きてきたようにさえ感じる。遥は、僕の心からたいせつなものをたぐりよせようとしていた。もちろん、僕は遥の望むものなら、すべて贈りたかった。すべてを与えたかった。

遥の心が僕の心に触れ、心の表面がとろける。水銀のようになった心の粒がたがいに交わる。ふたつの心が溶けてひとつになる。なにも考えることはない。なにも想うことはない。ただ、ひとつになればいい。それだけでいい。

ふと、心の奥で星が弾けた。

まぶしい光が心をおおい、百メートル走を全力で駆け抜けた時の

よくなさわやかさと喜びが心を駆け抜けた。ひとつになった心は、またもとのふたつへ戻った。たがいの心の粒子をすこしずつ持ち帰って。

僕は満ち足りて、とても幸せだった。愛し合っている間中、白い遥の裸体を照らしていた満月のように、どこも欠けたところはない。足りないものはなにもない。だけど、遥はぐすんと鼻を鳴らしたかと思うと、哀しそうに体を打ち震わせ、かすかにむせぶ。

「どうしたの？」

遥も幸せな気分になってくれたものだとはかり思っていた僕は、とまどった。遥の泣く理由が思い当たらない。だけど、今日の遥はどこか変だった。朝から妙にご機嫌だったのもそうだし、自分から僕の体を求めるなんて、今まで一度もなかった。遥が主導権を握って交わったのも初めてだった。

遥はすすり泣いている。まださめやらない薄桃色の頬を滴が伝う。「僕が遥を悲しませてしまった？」

せつなかった。細い鎖骨をそつとなで、火照った体を抱きしめた。遥は、僕の胸に顔をうずめる。

「そんなことないわ。ごめんね。わたしばかり気持ちよくなって遥は、言いたいことのはしっこを言っている。」

「僕も気持ちよかったよ。ねえ、泣いているわけを教えてよ。なにが悲しいの？」

「ごめんなさい」

「謝ってほしいって言うてるわけじゃないんだ。心配なんだよ」「ティッシュを取って遥の涙を拭いた。」

「さっき、わたしはゆうちゃんをいいように利用してしまったわ」「どういうこと？」

「だから、わたしばかり気持ちよくなったでしょ。ゆうちゃんを思い通りにしてしまっただわ」

遥は、申し訳なさそうに眉をひっそりさせる。

「遥はそんなことしてないよ。気持ちよくしてくれたいし、いかせて

くれたんだよ。遙は僕にやさしくしてくれたんだよ」

「それは、わたしが気持ちよくなるためなのよ。わたし自身を満足させるために、ゆうちゃんの心と体をいいようにしたのよ」

「そんなこと言ったら、僕だって、自分が快感になるために遙を利用したことになるよ」

「ゆうちゃんはそれでいいのよ。だって、こんなわたしを受け容れてくれるんだもの。ゆうちゃんのためだったら、なんでもするわ。

でも、わたしがゆうちゃんを利用するのは、わたしが許せないの」

「そんなに思いつめて考えなくても、ただふたりで幸せな気持ちになれたら、それでいいんじゃないかな」

「最近、わたし自身、わたしが怖くなることがあるの。大好きよ。世界中でいちばん好きよ。でも、大好きなゆうちゃんを利用してしまおうわたしがいるの。もっとももっと、求めてしまおうの」

「もっとって、なにを」

「ゆうちゃんの心よ。ゆうちゃんのすべてよ。このあいだ、居酒屋で飲み会をやったでしょ」

「うん」

近所の弁当屋のおじさんが飲み会を開いて、店の常連が十数人集まった。僕たちは、惣菜コーナーの隅においてある焼き鳥が好きで夜になるとよくその店へ買いに行き、焼き鳥が仕上がるまでの間、店の主人やほかの常連客と世間話をした。人見知りの激しい遙はおじさんともほかの人たちともほとんど話したことがなかったけど、気さくな弁当屋のおじさんは遙のこと誘ってくれたのだった。

「あの時、ゆうちゃんはほかの女の子と楽しそうに話していたでしょ」

「ああ、あの子のことか。話したけど、べつに好きとかそんなんじゃないよ。にぎやかな子だったから、話が弾んだだけだよ。お酒も入っていたし」

「わかってるわ。でもね、わたしはすごく妬いてしまったの。楽しそうなゆうちゃんの笑い声が心に突き刺さるようだったわ。わたし

の彼氏になんて話しかけるのよって、あの子にいらいらしちゃった。愉快になってるゆうちゃんもゆうちゃんだって。わたし、もうすこしのところで、ゆうちゃんの手をひいて帰るところだった。早く家へ連れて帰って、誰もいないところでゆうちゃんを独り占めにしたかったの」

「誰にでもあることだと思つよ。僕だって、遥と初めて出会った頃は、遥が誰かと話していると気が気じゃなかったもの。遥が僕の目の届くところにいないと落ち着かなかつたし。今でも、時々そうなるよ」

「誰にでもあることだから、気をつけなくちゃいけないのよ。わたしはそんな自分が許せないの。嫉妬心、独占欲、そんなものが心でうごめいているのに、それで愛してるなんて言えるのかしら」

遥は顔をあげ、まっすぐ僕を見つめる。ひたむきな瞳だった。

「そんな完璧にしくなくてもいいんだよ」

「みんなそう思つて、自分をだめにしちゃうのよ。いろんな人が欲望の誘惑に負けてだめになってしまったのを見てきたわ。そんな人はまわりも巻き添えにしてしまうの。自分の欲望のために人を利用したいから。自分のルールを人に押しつけようとするから。人を自分の思うようにしたいから。人を自分の世界に住まわせようとするから。わたしのおかあさんも、おとうさんも、おばあちゃんもそうだった。自分の欲望を振り回して、人を損なってしまうのよ。でも、わたしはそんなふうになりたくない。これ以上、もっともっとして求めたら、ゆうちゃんも息苦しくなってしまうわ。ゆうちゃんの命も心も粗末にしてしまうわ。このままだと、ゆうちゃんを求めるばかりに、大切なゆうちゃんをだめにしてしまうわ」

「愛しているから、いろんな感情がわくんだよ。いい感情も、悪い感情もね。それを乗り越えるのも愛だし、勇気なんじゃないかな」

遥がどうしてそんなに思いつめるのか、僕にはいまひとつうまくのみこめなかつた。だけど、遥が大切なものを追い求めていることだけは十分すぎるくらい理解できた。僕は、そんな遥が好きだ。

「僕が恋の達人だったらいろんなことを言っただげられるのかも
れないけど、初めての恋だから手探りなんだ」

「わたしもそうよ。なにかもが初めてだもの」

「だからさ、いろんなことがゆっくりわかるようになればいいんじ
やないのかな。僕たちは、知らないことがまだまだ多すぎるんだよ」

「でも」

「だって、わからないことだらけだろ」

「そうね」

遥は自分の心をしずめるようにゆっくりまぶたを閉じ、

「ゆうちゃんの言うとおりかもしれない」

とうなずいた。

「悲しませてごめんね」

僕は白い額に口づけた。

「遥を悲しませてしまうのが、いちばんつらい。とりかえしのつか
ないことをしてしまったみたいで、どうしていいのかわからなくな
ってしまっただ」

「ゆうちゃんは何にも悪くないわ。わたしがいけないのよ。わたし
の問題なのよ」

「遥の問題は、僕の問題なんだよ。遥の涙はふたりのものだよ。忘
れないで」

「ごめんなさい。こんなにやさしくしてくれるのに、いいようにし
ようとしてごめんなさい」

話はまた初めのほうへ戻ろうとしていた。いけない兆候だった。

遥はかたくななところがあって、一度思いつめてしまつとずっと堂
々巡りを繰り返すことがある。

「じゃあさ、こうしようよ。さっきは遥の思い通りにしたから、今
度は僕が思い通りにするね。これでおあいこ。それでいいだろ」

僕は遥の肩を吸った。小さな花が白い肌に咲く。これで遥の抱え
ている問題が解決するとは思わなかったけど、すこしでも遥の気が
軽くなればと願った。

「ゆづちゃんの体が冷えてしまったわ」

遙は、僕の背中を抱きながら言う。

「ふたりであたたまるう」

僕は、遙のやわらかなショートヘアをなでた。遙の香りがする。清らで芳^{かぐわ}しい香りだ。僕は、そっと遙を誘^{いざな}った。

今この瞬間の君を抱きしめてあげられたら

遙のことを考えながら駅前にある小さなヘアサロンの前を通りかかった。遙がいつもカットしてもらっていた店だった。理容師のオカマさんが遙のことをとても気に入ってくれていて、毎回、彼が遙の髪をカットしてくれた。普通は、客が理容師を指名するものだけど、遙はオカマさんに逆指名されてしまった。小熊のような丸い顔をしたオカマさんは、遙の透明な魅力をうまく引き出してくれた。

「ねえ、女同士だからさ、今度、遙ちゃんとお茶を飲みに行ったり、お買い物に出かけたりしてもいいでしょ？」

遙をヘアサロンまで送って行った時、オカマさんに許可を求められたことがあった。彼は丸顔をにこにこさせている。

「い、いいですよ。ぜ、全然、かまわないですけど」

突然の申し出に、僕はとまどい気味に答えてしまった。

「きゃっ、やったあ」

しなを作って嬉しそうに小躍りしたオカマさんは、ちゅっど軽く音を立てて遙の頬にキスする。遙はきよんととして、見るみる間に顔を赤くした。かわいい遙だった。

それから、遙はオカマさんと仲良しになった。

彼は宝塚歌劇団の大ファンで、有楽町の東京宝塚劇場で公演があると必ず足を運び、衛星放送のタカラヅカ専門チャンネルに加入しているほどだった。オカマさんは、トップスターやトップ娘役の地位について脚光を浴びているタカラジェンヌには興味がなく、あまり目立たないけど努力している新人を応援するのが好きなのだそう。新人の頃から応援しているタカラジェンヌががんばってはいあがり、いい役につくようになるたまらなくうれしいのだとか。遙も彼に連れられて『ベルサイユのばら』や『エリザベート』を観劇しに行ったことがある。遙は、芝居やショーの内容よりも劇場をつつむファンの熱気に驚いていた。

タカラヅカのほかに、オカマさんはたびたび遥を遊びに誘った。そんな時、彼は必ず僕に電話して「遙ちゃんを借りるから」と断りを入れてくれたので、僕としても安心だった。なにより、遥は友達を作りにくい性格だから、遥をかわいがってくれる友人ができてよかった。たまに僕も誘われて、三人でいっしょに映画を観たり、飲みに行ったりもした。

一度、オカマさんが遥の手相を観てくれたことがある。

「あなたは最愛の人と一緒に死ぬわ。これ以上なくらいに愛されて最後を迎えるのよ。あら、変な意味じゃないわよ。愛につつまれるの。わかるかしら？ それがあなたの運命よ」

そう言って微笑んだ彼は、遥を愛せるあなたは倖せねと言いた気に僕へ目配せした。

残念ながら、彼の予想はずれてしまった。でも、遥が最愛の人に愛されるという予言だけは、当たっていてほしい。それが僕だったら最高だったのだけど、別れるのは運命だとあきらめるよりほかにしかたない。遥が素敵な人を見つけて幸せになってくれたら、それでいいことなのだから。彼女を幸せにするのがほかの男なのなら、僕はそれを受け容れるしかないのだから。

僕は空を見上げた。

クジラのような雲はまだ浮かんでいる。

漂う雲は、僕を見守っていてくれているようだ。

僕なら大丈夫。

今は遥のことをずっと待ち続けていたい気持ち強いけど、遥のいない暮らしにもそのうちすこしずつ慣れるのだろう。そうなれば、僕なりの幸せを探すから。

今日も元気に働いているオカマさんの姿をガラス窓越しに見て、ヘアサロンの角を曲がった。

駅前通りからはずれたビルの裏手を歩き、文房具屋や花屋や居酒屋がならんだ商店街へ入った。商店街の片隅にログハウス風の喫茶店がある。ドアを開けると、バッハの無伴奏チェロ組曲がかかって

いた。僕は窓辺の席に腰かけた。

たまにふたりで入った店だった。

丸太造りの内装に素朴なあたたかみがあって、高い天井が広々と
していて気持ちいい。バイト代が入ると名物の焼きプリンを一つ頼
み、ふたりでわけて食べた。この店の焼きプリンは、オーブンで焼
きたてのあつあつが白い陶器のカップに入って出てきた。やわらか
いプリンにタピオカが混ざっていて、ぷちぷちした食感を楽しめる。
カップの底には僕の大好きな練りサトイモが入っていた。ひつこく
ない甘さでちょうどいいし、とろりとした舌触りもいい。月に一回
の僕たちの贅沢だった。

この店でふたりで向かい合った時、僕は遥を笑わせることばかり
考えていた。遥の笑顔を見るのがたまらなく好きだった。遥の笑い
のつぼは心得ていたから、どう話せばいいかは、お茶の子さいさ
い。遥を笑顔にするのは、僕だけに与えられた特権のように思っ
ていた。まるで、錬金術師アルケミストが手に入れた秘法のように。

メニューを見ながら焼きプリンを食べようかと迷ったけど、一人
では味気ないから、やめにした。もうあっさりした上品な味わいの
焼きプリンを注文することもないのだろう。こうして一人でぼつね
んと坐ってみると、今まで僕の生活は遥を中心にまわっていたんだ
なとつくづく感じる。僕はブレンドコーヒーだけを頼んだ。

ふと、壁の写真に目がとまる。

むき出しの丸太の壁には、手の届く範囲一面に写真がピンでとめ
てあった。この店は、客が自由に壁に写真を貼ってよかった。どれ
も楽しそうな写真ばかり。大勢の人たちの色とりどりの思い出のな
かに、僕たちの思い出も混じっていた。

今年の夏、ふたりで花火大会へ出かけた。

中三の時も、高校生の三年間も、去年の夏も、いっしょに花火を
見に行ったけど、今年は特別だった。遥が布地を買ってきておそろ
いの浴衣を縫ってくれたから、僕はうれしくてしょうがなかった。
それだけの手間隙てまひまをかけてくれた遥に感謝の気持ちでいっぱいだった。

た。写真のなかの僕たちは、紺地に琉球ガラス風鈴の柄をあしらった手製の浴衣を着て微笑んでいる。夏の夜空に、しだれ柳の花火が遠く咲いている。

電車が会場の最寄り駅へ着くと、ホームは浴衣姿の人々であふれた。誰もが浮かれ気味で、祭りの華やかな雰囲気がもう漂っている。僕はほとんどの人が既製の浴衣を買って着ているんだろう、手作りの浴衣を着ている人なんてほとんどいないんだろうなと思うと、すこしばかり誇らしい気分になった。遥のことも、そんな遥を恋人にした僕自身のことも。「押さないでください」と繰り返す駅員の放送を聞きながらゆっくり階段をのぼり、ようやく改札口へたどり着いた。

駅を出た僕たちは人ごみと屋台をすり抜けて川べりへ降り、遊歩道の手すりによりかかって花火を見物した。遥は黒捌くろはききの赤い鼻緒の下駄を履いて、帯に団扇を差している。普段はしないピンク色のガラス玉の髪留めがよく似合っている。僕は、遥が両国で買ってきてくれた相撲取り用の桐下駄を履いていた。白い鼻緒が足元を引き締めて見せてくれるから、僕は気に入っていた。コンクリートの上を歩くと、乾いた音が心地良く鳴る。熱帯夜の蒸し暑い夜だったけど、僕はずっと遥の手を握っていた。浴衣の遥はほっそりとしたかげろつのように、手を離せば迷子になってしまいそうだったから。

次々と花火が打ち上がる。
赤い牡丹。

黄色い嵯峨菊。

薄桃色した八重桜。

紫のあじさい。

白いダリア。

橙色のひまわり。

緑の椰子の木。

青い蝶々。

水色の麦藁帽子。

さまざまな色をしたさまざまな光の模様が暗い空に描かれ、遥の澄んだ頬をぱつと明るく染める。細い首をかしげた遥は、僕の肩にもたれかかり穏やかに微笑む。花火が消えようとする頃、川べりの僕たちに爆音が届いた。

「花火の音は、何秒か前に生まれた音なんだね」

僕はぽつりと言った。

「中三の時、理科の授業で先生が言ってたわね。人間はみんな過去の音を聞いているって。あの時、ゆうちゃんはものすごい発見を聞いたみたいに興奮してたわね」

「だって不思議だよ。今聞いている音が、全部昔の音だなんて。音のスピードは秒速三百数十メートルだったよね。あの花火からどれくらい離れているか知らないけど、花火が爆発してからここへ届くまでに数秒かかっているわけだろ。僕たちの耳に聞こえるこの音は、過去からのメッセージなんだよ」

「それじゃ、わたしたちが見ている花火の光も同じね」

「そうだね。光も生まれてから自分の目に届くまでに時間がかかっているからね。たしか、太陽の光が地球に届くまで約八分だったっけ。花火と僕たちの距離だとまばたきもできないくらいほんの瞬間だけど、あの花火は過去の模様なんだね」

「人はみんな過去を見て生きているのね」

川風が遥の髪を揺らした。

「過ぎ去ったものしか、人は見ることができないんだね」

僕は遥の顔を見つめ、今僕の目に映っている遥の姿も過去のものなのだろうか、とそんなことをぼんやり思った。間近に見ている遥はたしかに今この瞬間のもののような気がするし、今握り締めている掌のあたたかさも、たしかに今この瞬間のものはずなのに。

なにげない会話だったけど、今になって振り返ると僕たちの限界を言い当てていた言葉だったのかもかもしれない。

人は、今この瞬間を見ることができない。

今この瞬間を聴くこともできない。

僕は今見ている風景も人の姿もこの瞬間のものだと思っ
ているけど、実は錯覚で、すべては一瞬前の過去にすぎず、今この瞬間をと
らえることができない。刻々と移り変わってゆく過去を眺めるより
ほかに、術がない。だからこそ、今この瞬間の遥の心を抱きしめて
あげたかった。それができていれば、ほんとうの意味で、遥がなに
を思っているのかを理解してあげられたのだろうし、支えにもなっ
てあげられたのだろう。あんなに悲しませることもなかったはずだ。
でも、それは目に見えない壁だった。乗り越えることのできない壁
だった。

僕は、刻々と移り変わってゆく遥の心がつけた轍の跡を後から追
いかけることしかできなかった。遥につらい思いをさせてしまった。
悔やんでも悔やみきれない。

僕は写真の遥を見つめた。幸せそうだ。

もし、遥の心にも楽しい思い出を残せたのだとしたら、それがせ
めてものなくさめだと思っしかないのだろうか。

あの頃、君の背中が僕の支えだった

いつの間にか、コーヒーが運ばれていた。

ミルクをすこし入れて一口飲むと、とりとめもなく中三の頃のこととが脳裡に甦った。

一学期の半ばに席替えがあつて、ふたりの席は離ればなれになつてしまった。授業中に一緒にプリントを見たり、消しゴムのやりとりをしたり、遥の透明な香りにつつまれることもなくなつてさびしかったけど、それでも通路をはさんで二つ斜め後ろの位置だったから、黒板を見れば自然と遥の後ろ姿が目に入った。

白いブラウスにブラジャーの線がくつきり浮かびあがつた遥の細い背中。脆いクリスタルのように輝いて、僕の目にはまぶしかった。ブラウスのしたに着こんだ体操服のゼッケンが見えたこともあれば、体操服姿に濃紺のスクール水着が透けていたこともあつた。遥は板書をノートへ写し終わると軽く首を振つて頬にかかった髪を払う癖があつただけで、振り払った髪に光がこぼれるのを見ては胸になんともいえない想いがこみあげ、僕は誰にもさとられないようこっそりため息をついた。

あの頃、そんな遥の背中が僕の心の支えになつてくれた。

中学三年生になつてから、僕の生れ落ちた家庭は壊れ続けた。

二つ年下の弟が不登校になり、どうすればよいのかわからなくなつた母親は一日中ヒステリーを起こし、会社で左遷された父親は父親で酒びたりになつて家にいる時はいつもアルコールの臭いをまき散らしていた。

僕は食事以外は勉強部屋に閉じこもつたまま、なるべく家族とかわからないようにしていた。とりわけ、母親が僕へ向けてくるヒステリーがたまらなかつた。母親はなんでもないことで理不尽な怒りを爆発させ、ひどく当たり散らした。心を金槌で叩かれるようであつたけど、いくらそれを訴えてみたところで、いくら反抗して

みたところで、僕の話にはいつさい耳を傾けようとはしてくれなかった。母親はみみず腫れにはれあがったエゴがずきずき痛むようで、僕の胸のうちなど歯牙にもかけず、むしろ自分の怒りをたぎらせるだけだった。弟よりも母のほうが荒れていたのかもしれない。父親は家へは寝に帰ってくればよいという態度を変えず、自分の家庭をホテルくらいにしか思っていなかったようだ。そんな家族がよい方向へ向かうわけもない。僕にとって、家庭は出口の見えない地獄へと変わり果てていた。

家が火事になる夢を見てよくうなされた。誰もいない家で煙にまかれる場面から目覚めると、僕はかならず金縛りにあっていた。息苦しさで身動きのとれない体に耐えながらまっくらな天井を見つめ、歴史の教科書に載っている平安朝や鎌倉時代の地獄絵図にはどうして一つ屋根の下に暮らす人間がたがい苦しめあう「家族地獄」が描かれていないのだろうと、ぼんやり不思議に思った。幼い頃は、父も母もほがらかで楽しかったのだけど。

でも、家でどんな嫌なことがあっても、心が割れそうになっても、翌朝登校して遥の背中を一目見れば、僕の心は洗われた。彼女と言葉を交わせば、「おはよう」の一言だけでも、たわいもない話題でも心がなごみ、心にのしかかった重圧をすべて忘れることができた。

「遥がいたから、ここまでやってこられたんだよな」

僕はひとりごちた。

自分のつらさから逃れるために、僕は遥を利用していたことになるのだろうか。自分が生き延びるために遥をいいようにしていたことになるのだろうか。

たしかに、僕には遥が必要だった。

必要ということは、相手を利用して自分のために役立てたり、自分の欲望を満たしたいということなのだろう。だけど、誰かが支えになってくれなければ、吹きさらしの荒野でしかないこの世を生きていられない。自分の家族さえも信頼できない酷薄な人間関係のな

かで、すっかりすりきれてしまう。

中三の夏休みも終わりがけの頃、模擬試験の会場ではったり遙と出会った。試験が終わってから、僕は遙を誘って河川敷の公園へ行った。

堤防の芝生に自転車を横倒しにして置いて、遙と並んで坐った。学校の外で二人きりになって話をするのは初めてだったから、僕はどうしていいのかわからず、これもデートのうちに入るのかな、なんて考えながらやたらと芝をむしった。心があふれそうで、心が溶けてしまいそうだった。

ポスターカラーで塗ったような青空に入道雲がどこまでもそびえる。誰かが練習しているサックスの音が流れ、野球用のグラウンドでは子供たちがフリスビーを追いかけていた。二両編成の電車ががたごとと音を立てて赤錆色の鉄橋をゆっくり渡る。

横目で遙の姿を盗み見ると、遙は気持ちよさそうに目を細めて雲を眺めている。素敵な二重まぶた。すつと筆をおろして描いたような小さな鼻の稜線。真綿のような純白のやわらかい頬にうっすらとりんご色がさしている。遙のなにもかもが透き通っていた。胸がきゅんとした。

ふと、彼女の肩に赤蜻蛉あかとんぼが無邪気にとまる。

「天草、じつとしてて」

「なに？」

遙は、手でかかえた膝をすくめる。

「赤とんぼ」

僕はとんぼの目の前で指回しをした。じつとしたまま動かないとんぼの後ろからすつと左手をまわし、人差し指と中指で尾を挟んだ。とんぼは赤い体を折り曲げて逃げ出そうとしたけど、もう遅い。

「トンボ葉巻」

僕はとんぼの尾を自分の唇に当て、煙を吐くまねをした。とんぼの体が葉巻のようで、広げた羽が煙のように見えるから、僕の田舎ではそう呼んでいた。

「瀬戸君、上手ね」

遙は静かに微笑み、頬にかかった髪を人差し指で耳の後ろへくるつとたたんだ。

「翅はねを持ってごらんよ」

「怖いわ」

「怖くなんかないよ」

「だって、折ったらかわいそうじゃない」

「卵を掴むように上からそっと持てば、大丈夫だよ」

「上手にできそうもないわ」

「それじゃ、尾っぽを掴んでごらん。いちばん後ろを持ったたら、翅に触らなくてすむから」

遙は赤とんぼの顔を覗きこみ、

「ちよつとの間だけ、許してね」

と、とんぼに断つて尾を掴んだ。

囚われの身になっていても、とんぼは翅はねを奮ふるわせる。

「生きているのね。だから、羽ばたこうとするのね」

澄んだ声を響かせた遙は、やさしい瞳になった。

「自由にしてあげようか」僕は言った。

「そうしましょ。あんまり人間に捕まっているとトラウマになっちゃうわ」

「天草はやさしいんだね」

「誰かを傷つけたくないだけよ。 さあ、飛んで」

遙は手を離れた。

赤とんぼは風に舞い上がる。僕たちはいつしよに空を見上げた。

とんぼの姿が青い風へ溶けると、遙は飛び切りの笑顔になった。

もっと遙と仲良くなりたい。

遙が見つめている先になにかあるのかを知りたい。

僕は、芝生の上を駆けまわって叫びたくなった。

それから、僕はその一心で一生懸命しゃべった。

僕がほとんど話していたけど、遙はくすくす笑いながら楽しそう

に僕の話聞いてくれた。ふと気がつく、川辺に密生した葦が夕焼け色へ変わっていた。すこしばかり人をさみしくさせる色だった。「そろそろ帰ろうか」

そう言った僕は、思わず暗いため息をついてしまった。

「瀬戸君、どうしたの？」

遙が心配そうな顔をする。

「ちょっとね。家へ帰るのが、気が重くてさ」

家のドアを開ける時ほど、憂鬱なことはなかった。僕が家のことをかいつまんで話すと、

「そうなの。瀬戸君のお家も大変なのね。じつは、わたしも家へ帰りたくないのよ」

と、遙はやるせなさそうに暮れなずむ川面を見つめ、自分の家庭のことを話した。

彼女の両親は、小学校三年生の時に離婚した。

物心のついた頃から家のなかでは争いが絶えず、遙は身のすくむ思いで、罵り合い、時には掴み合いまでする両親を見ていたそうだが、遙によれば、父親は傲慢な性格でいつも遙の母親を罵倒して虐め抜いたのだとか。三つ年上の姉は父の家へ行き、遙は母親に引き取られたのだが、ほどなくして遙の母が鬱病にかかってしまい、仕事も辞めて入院しなければならなくなったので、遙はカトリック教会が運営する孤児院へ預けられた。それを知った父が遙を迎えにきて父の実家で住むことになったが、母方の祖母がすぐに父の家まで遙を取り戻しにきた。落ち着く先のない境遇が遙を無口にした。大人同士の醜い争いばかり見せられた遙は、神さま以外はなにも信じないと誓うようになった。

「それで、今はどうしているの？」

僕は訊いてしまった。遙は大きな瞳を翳らせた。

「ごめん。話さなくていいんだよ」

「いいのよ。一時期は、お父さんの家とお母さんの家を行ったりきたりしていたんだけど、今はお母さんとおばあちゃんと三人で

暮らしているの。お母さんはしょっちゅう入院しちゃうけど」

「鬱病が治らないの？」

「ぜんぜん」遙は首を振った。「家の事情をよく知らない人は本人のせいだっけ言うんだけど、病気が長引くのは、おばあちゃんも悪いのよ」

「どうして？」

「おばあちゃんがお母さんのことを責めるの。あなたが鬱病なんかになってしまつて、わたしは立つ瀬がないとか言つてね。心の病なんだから、本人にストレスがかかるようなことを言つたりしたら、だめなのにな」

「厳しいんだ」

「違うわ。病気になつた娘より、自分のことのほうがかわいいのよ」
「どういうこと？」

「おばあちゃんは、いつでも自分がいちばんでいたい人なのよ。プライドが高いつていうか、見栄つ張りなのね。自分が相手よりうえに立っているつていつでも思いたい人なの。そのためにだつたら、平気で嘘をつくし。相手が百円もっているつて言つたら、わたしは二百円もっているわつていうような、どうでもいい嘘よ。ほんとはもつてなんかいないのに、嘘でもなんでもいいから、負けたくないのよ。自分を低く見られたくないのよ。お弁当の工場でパツク詰めなんかして働いていたごく平凡なおばあさんのはずなのに、自分がかわいく思ひすぎて、思ひ上がった嘘つきになつちやつたんだわ。」

そんなおばあちゃんにとってみれば、病気になつたわたしのお母さんは面汚しでしかないの。娘をそんな病気にした自分だめな人間だつて証明しているようなものだもの。天草さん家のお母さんは鬱病だつて後ろ指を指されたら、いくら見栄を張りたくても、張りようがないわよね。だから、まるで他人みたいにお母さんにきつく当たるの。自分の役に立たないから」

遙は、恨めしそうに眉をひそめる。

「天草は、おばあちゃんのことを好きじゃないんだ」

「うん。おばあちゃんも孤独な人なんだなって思うけど、やっぱり、自分のことしか考えていない人を好きにはなれないわ。おばあちゃんが、お母さんを怒鳴りつけたり、出て行けって言ったりするから、お母さんはせつかく退院しても、いつでも病院へ逆戻りよ。おばあちゃんの家を出て、わたしとお母さんと二人で暮らしたいんだけど、ほかに行けるところもないからしょうがないわね」

「家族つて、憎みあうために一緒にいるのかな」

僕がつぶやくと、

「そうかもしれない」

と、遥はうなだれた。

僕たちは駅前のお好み焼き屋で晩御飯を食べ、それから図書館へ行って夜九時の閉館になるまで本を読んだ。帰り道、虫のすだく県道を自転車で走った。家が近くなればなるほど、僕たちは言葉少なくなった。

遥が僕と友達になってくれたのも、恋人になってくれたのも、きっと、さびしかったからだと思う。思い上がった言い分かもしれないけど、遥も僕を必要としてくれていたのだと思う。お互いに必要だったから、僕たちは見えない糸に導かれるようにして出会い、いつしよに暮らしたのだと、そんな気さえする。もし、遥の信じている神さまがほんとうにいるのなら、その神さまがふたりを引き合わせてくれたように思う。

ほがらかな笑い声が窓の外から響いた。手をつないで歩くカップルが目の前を横切る。僕は、幸せそうに肩を寄せた後ろ姿をなんとなく目で追った。

やさしさを交換しなければ、人は生きていられない

お月見の日からしばらくの間、遙は平穩に過ごしていたけど、十日ほどたったある日、またひどく落ちこんでしまった。

真夜中にふと目覚めた。

カーテンの隙間から射しこむさやかな月の光が遙の白い顔を照らしている。冴えた大理石のように光る遙の頬が僕の遠い記憶を呼び覚ます。生まれる前から結ばれていたような、懐かしくてたまらないような、そんな気分が僕をつつんだ。遙には月の光がよく似合う。遙の髪をなでようと手を伸ばした瞬間、

「ゆうちゃん」

と、遙は寢言をつぶやきながらぐすと泣いて体を震わせる。夢の中で僕にしがみつこうとした遙の手を取り、首に抱きつかせてあげた。

「どうしたの？」

そう問いかけても、遙は目を閉じたままはらはらと涙を流すだけだ。

「遙」

僕は肩を揺さぶった。それでも目を覚まさないから、軽く頬をたたいた。遙ははっと目を開ける。涙で濡れた瞳に、僕の顔が映っている。苦しげに息をあえがせ、胸を大きく上下させていた。

「悪い夢を見たの？」

遙はなにも答えず、僕の体をせつなく抱きすくめる。

「どんな夢？」

「ゆうちゃんはきつと怒るわ」

「怒らないから」

僕は遙の額にくちづけた。

「ゆうちゃんが、もう付き合っていられないから別れようって言ったの。僕は疲れたって」

遥はかすれた声でささやく。

「ただの夢だよ。僕はそんなことを言わないよ。なにがあっても、遥を見捨てたりしないから。遥は僕のすべてだよ」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

わかっているはずのことを確かめてしまう遥に、僕は危うさを感じた。

「思ってることを言っごらんよ」

「ゆうちゃんを利用しちゃいけないって思うと、苦しくなってしまうの。それで、わたしはよけいにわがままなことを言ってしまうのよ。わがままを言った後で、そんな自分が嫌になっってしまうわ」

「利用したっていいんだよ。たまには、わがままを言ったっていいんだよ」

やっぱりあの日からずっと悩んでいたんだ。

僕はそう思いながら言った。遥が抱えているはかなさは、僕の手が届かないところにあるのだろうか。

「きつと、ゆうちゃんは疲れてしまうわ」

「そんなことないよ。利用するって言う悪いことをしているみただけで、それはやさしさのとりかえっこなんだよ。人は独りじゃ生きていられないだろ。だから、僕たちはこうしていっしょに暮らしているんだよ」

「そうかもしれない」

「僕も遥も、壊れた家庭に育ったから、家庭的な情愛のぬくもりを知らないんだ。僕はまだ幼かった頃の楽しかった雰囲気を覚えているからいいけど、たぶん、遥はそんな記憶もないだろうし、僕よりもずっとつらいことをいろいろくり抜けたから、遥のほうがきついだろうね」

「わたしは家庭のぬくもりなんて知らないわ。ただ怖かった。いつも、両親とお姉ちゃんとおばあちゃんの顔色ばかりうかがっていたもの。今は、時々、ゆうちゃんの顔をうかがってしまうわ」

「そんなことしないでいいんだよ。　遙はとまどっているんだと思う。きつい状態しか知らなかったから、落ち着いた気分になったら逆にどうしていいのかわからなくなつて、怖くなつてしまったんじゃないのかな」

「そうかな？　わからない。　許されている以上にしあわせなんだっていうのはわかるけど」

「幸せになることが許されない人なんて誰もいないよ。　お茶でも淹れようか」

僕は起き上がった。

「ごめんなさい。ゆうちゃんは、明日ロシア語のテストなのに」

「いいんだよ。第二外国語より遙のほうがずっと大切なんだから」

遙が電気ポットのお湯を再沸騰させ、玄米茶を淹れてくれた。遙は力なく肩をすぼめ、折り畳み式のちゃぶ台の向こう側に申し訳なさそうに坐る。

「こつちへおいでよ」

僕は隣に坐るよう招きよせ、遙の手を握った。遙は幼い妹がお化け屋敷のなかで兄の手を握り締めるように、かたく僕の手を握る。

ふたりで熱いお茶をすすった。遙は、すこしばかり気持ちが落ち着いてきたようだった。

「人は独りでは生きていられないから、やさしさをとりかえっこする必要があるって、さっき言ったよね」僕は言った。

「うん」

「やさしさは誰でも持っている。僕も持っているし、遙も持っている。でも、やさしさは自分ひとりで持っているだけじゃ、ほんとの意味でやさしさにならないんだ。意味がないんだよ」

「どうということなの？」

「やさしさは、誰かと交換する必要があるんだよ。信頼できる誰かと。この人なら、絶対にひどいことを言ったり、自分を裏切ったり、自分の心を踏みにじったりしないっていう誰かとね。それが、僕の場合は遥なんだ。やさしさは誰かとわかちあつて、はじめてぬくも

りが生まれるんだ。そして、そのぬくもりのおかげで生きていかれるようになるんだよ。完璧な人間なんていないから、人の善意に頼ったり、誰かに自分の弱さをおぎなってもらわないと生きていけない。やさしさをわけてもらって、お互いに温めあわないと生きていられないんだよ。それを裏返してみれば、遥が言うように人を利用するっていうことになるのかもしれないけど、僕は遥にやさしくしたいんだ。遥とやさしさを交換したいんだよ。それは、間違ったことじゃないと思う」

僕は、諭すように言ってお茶を飲み干した。僕の湯呑みに注ぎ足した遥は、じつとちゃぶ台を見つめながら考えこんでいる。僕は、なにも言わず遥の答えを待った。やがて、遥は口を開いた。

「わたしも、これからずっとゆうちゃんとやさしさをとりかえっことしたいわ。わたしたちは、中学生の時からずっとそうしてきたのよね。そうやって、ふたりで温めあって、支えあって生きてきたのよね」

「わかってるんだったら、悩むことなんてないじゃない」

「でも、やっぱりどうしても考えてしまうの。わたしは家庭のあたたかさなんて知らずに育ったし、大人同士が勝手な言い分で奪い合う姿ばかり見すぎたから、悪く考えてしまうかもしれない。でもね、どう言い訳したって、求めることは奪うことだわ。そんなことに慣れてしまう自分が嫌なの。求めることになれすぎてしまったら、そのうち大好きなゆうちゃんを損なってしまっわ。ゆうちゃんを苦しめても、それに気づかなくなるかもしれない。どうして、わたしのいうことを聞いてくれないのって、そんなふうにしかならないようになるかもしれない。まわりの女の子たちを見ると、よくそう思うのよ。帰り道に送ってくれなかったとか、誕生日のプレゼントが自分の欲しい物じゃなかったとか、そんなつまらない欲求でみんな自分の愛を穢しているのよ。そんなことでたいせつな愛情を損なっていることに、気づいていないのよ。いつか、わたしもそうなるかもしれない。ゆうちゃんのことをたいせつにしたいのに、こんな

ふうだったら、ほんとうの愛情にたどりつけなくなってしまうわ」

遙は、悲しそうに顔を伏せた。

遙は、なにがあっても変わらないたいせつなものを見つめようとしている。だけど、たいせつなものを見つめるのと同じだけ、心の暗闇を見つめている。幼い頃から家族が憎みあう姿を見て育った遙には、その暗闇はなじみのものなのだろう。もしかしたら、遙は虚無の前に立ちすくんでいるのかもしれない。ふとそんな気がした。

「それじゃ、今の愛情は贗物にせものなの？」僕は訊いた。

「そんなことないわ」

「責めてるわけじゃないよ」

「わかつてるわ」

「遙が純粹なものを求めているのはわかるんだけど、たぶん、それはずっと先にあるものなんだよ。今の愛情だって、本物だろ？」

「わたしの気持ちはほんとうよ」

「僕もそうだよ。今だって、十分すぎるくらい幸せだし、僕の人生のなかでいちばん幸せな時なんだよ。これがずっと続いてほしいと思う」

「わたしもそうなの。わたしだって、ずっとゆうちゃんとなかよくしていたいわ」

「ふたりがそう思ってるなら、僕たちの愛情は本物だよ。まだまだ未熟かもしれないけど、たいせつな気持ちをおたがいに持っているんだよ。それがいちばんだいじなことなんじゃないかな。今はそれだけで十分なんだよ。あせらなくてもいいんだよ。かならず、もつと幸せになれるから」

僕は、励ますつもりで遙の肩を握った。だけど、遙は首を振り、よくわからないというふうには髪を揺らす。

「そうならいいんだけど、わたしはいつも後ろからなかに追いかけられているような気がしてしょうがないの。 ゆうちゃん、『最善の墮落は最悪』っていう言葉を知ってる？」

「いいや、初めて聞いたよ」

「昔、教会の施設に預けられていたでしょ。その時に神父さんがよく聞いてたの。ラテン語の諺だそうよ。Corruptio op
timi quae est pessima」

遙は呪文のように唱えた。

「コッルプティオ・オプティミ・クアエ・エスト・ペッシマ？」

「そうよ。いちばん美しいものが墮落すると、いちばん醜いものになってしまふんですって。シェイクスピアのソネットにも似たような表現があるの。」

いちばん甘美なものがその行ないによっていちばん醜^すえたものになる。

腐った百合の花の放つ悪臭は、雑草よりもひどい。

「こういう詩よ」

「わかるような気がする」

僕は、ゴミ捨て場に捨てられた腐った百合を思い浮かべた。

「お父さんも、お母さんも、おばあちゃんも、わたしが生まれた時、どんなにうれしかったかってよく聞いてたわ。嘘じゃないと思う。でもね、家族がばらばらになって、誰がわたしを引き取るかって話になった時、わたしのことなんて考えないでみんな勝手なことばかりいうのよ。お父さんもお母さんも、わたしがかわいいから自分が引き取るっていうんだけど、わたしを道具にして奪い合いをしていたんだわ。取られたら悔しいからって、自分の沽券にかかわるからってね。わたしは、わたしがいうことを聞けば丸くおさまるんだって思ってたから、いわれるままにあっちへ行ったりこっちへ行ったりしてたけど、たまたまなかった。みんな、愛情がまったくないわけじゃないの。だから、性質が悪いのよ。愛情に嘘が混じっているから、愛情に自分の欲得が混じっているから、わたしを苦しめても、誰もなんとも思わなかったのよ。わたしは、絶対、こんな人たちみたいにならないって誓ったわ。愛情っていう最善のものが墮落

して最悪のものになってしまったのよ。美しかったはずのものが、心のなかで腐ってしまったのよ。心を腐らせてしまったのよ」

遥は、涙を一筋こぼした。

「つらかったらうね」

僕は、いたわるように遥の背中をさすった。

「でも、遥はそんなふうにならないよ。そんな女の子じゃないもん」

「わからないわ」

「わかるよ。僕たちは、中三の時からずっと一緒だったんだよ。もし遥の愛情が墮落するようなものだったら、もうとっくに別れてるよ」

「ゆうちゃん、中学校や高校の頃とは違うのよ」

「わかってるよ。僕たちも大人になってきたからね」

「普通に付き合うのと、一緒に生活することは別だわ」

「僕もそう思う。好きって言っていればそれでいいわけじゃないからね」

「勉強にしたって、アルバイトにしたって、家事にしたって、いろんなことをこなさなくちゃいけないわ。中学生や高校生の頃に比べたらいろいろ自由になったぶん、いろんなことを満たさなくちゃいけないわ。やらなくちゃいけないことが増えただけ、欲望にさらされることも多くなるの。自分の責任でいるんなことができるようになったぶんだけ、つまらない欲望やわがままも増えてしまうの。そんな欲望と向かい合っていると、感化されちゃいそうで怖いよ。求めることしか考えられなくなりそうで、怖いわ」

「怖がることなんてないよ。僕たちは与えあって生きているんだから、与えて欲しいって求める気持ちも、当然湧いてくるものなんだよ。現に、僕だっているんなことを遥に求めているよ。いっぱい与えてもらってもいいし」

「ほんとうにそうならいいんだけど」

「遥は、もうちょっと自分に自信を持っていいんだよ。そうするべきだと思っ」

「時々思うの。わたしなんかといっしょに暮らさずに、ほかの誰かと付き合ったほうが、ゆうちゃんにとっていいことなんじゃないかって」

「どうして？」

「だって、わたしの心はどこかゆがんでいるもの」

「ゆがんでいる女の子がさつきみたいなことを言ったりしないよ。

遙は、考えすぎなだけだよ。誰だって、欲望はあるし、醜いところだってあるものなんだよ。そんな自分と綱引きしながら、どう

やって自分に負けないようにするのが人生なんじゃないかな」

「そうかもしれないけど」

「遙、自転車の運転と同じだよ。初めて自転車の練習をした時、最初は怖かっただろ」

「うん」

「でも、慣ればなんてことないよね。すいすい自転車を漕げるようになって、怖がらずにどこへでも行けるようになるよね。欲望に慣れるのも同じことだと思う」

「わたしは慣れたくないのよ」

「わかってるよ。でも、慣れるしかないんだよ。残念だけど、この世はユートピアじゃないし、人間から欲望を消し去ることはできないから、自分の欲望と付き合っていくしかないんだよ。大切なことだけ忘れなかったら、それでいいんじゃないかな。怖がってばかりいたら、きりがないよ。ゆっくりでいいんだよ。僕たちは、やっ

と自分たちの手で人生を作れるようになったばかりなんだから」

「ゆうちゃんのいう通りかもしれないわね。ゆっくり考えてみる」

遙は心細そうにうなづく。どうしても自信を持ってないようだ。

「ふたりでいればなんとかなるものだよ。ふたりでいることが、いちばん大切なことなんだよ。だからさ、自分なんかいないほうがいいんじゃないかって、そんなことは考えないで。言って欲しくないよ、そんなこと。遙は、ひとりで生きているんじゃないんだよ。僕

たちふたりで生きているんだよ。やさしさをとりかえっこしながらふたりで生きようよ」

僕は遥を抱きしめた。

「ごめんなさい。こんな鬱陶しい話ばかりして」

遥は、僕の腕にぼろぼろ涙をこぼした。

「謝らなくなつていいんだよ」

僕が考えていた以上に、遥はつらい思いをして生きてきたのだろう。そう思うと、僕も泣きたくなった。幸せというものは、めったに得られるものでもないし、どこかに落ちているものでもない。だからこそ、遥を幸せにしてあげたいと心から願った。

まっさらな心を思い出して

「ゆうちゃん、生理がこないの」

遥は蒼ざめた顔をしていた。夕飯の洗い物を終えたばかりの濡れた手をエプロンでぬぐう。

「どれくらい遅れてるの？」

「十日くらいかな。もうとっくにきてもいいはずなのに」

「ちよつと調べてみようか」

僕は、薬箱から妊娠検査薬キットを出した。

遥の生理が遅れたことは、前にも何度かあった。さすがに初めての時はあせったけど、もう慣れてしまった。安全日以外はきちんとコンドームをつけていたから、それほど心配することでもないと思っていた。女の子の体はデリケートだから、いつも周期ごとにくるとは限らない。遥は、キットを手にしたまましょんぼりとちゃぶ台の前に坐った。つけっぱなしのテレビのニュースは、失業率がまた上がったと伝えていた。

「三分経ったね。貸してごらん」

僕は検査薬キットを遥の手から取った。妊娠を示すラインは浮かんでいない。

「陰性だよ」

「ほんとうかしら？」

遥は眉の端をひっそりさせ、不安げに首を傾げる。

「説明書には念のために病院で検査してくださいって書いてあるけど、キットは九十九パーセントの確率で正確らしいから、大丈夫だよと思うよ。もし何日かしてまだ始まらなかつたら、いっしょに病院へ行こうよ」

早くくるものがきて、遥が安心してくれないかと願ったけど、三日経っても遥の生理はこなかった。僕たちは、近所の産婦人科の開業医へ行った。

古ぼけた診療所の待合室は満員だった。壁沿いに四つ並んだ黒いビニール張りの長椅子がすべて埋まっている。臨月間近の大きなお腹をした妊婦もいれば、ひどくやつれた顔をした中年の女性もいた。産婦人科へ足を踏み入れたのは初めてだったけど、薬の臭いに混じってむせるような生温かい匂いがする。鼓動し始めたばかりの命の匂いなのだろうか。明治や大正の頃からあるようなアンティークな柱時計が壁際に据えてあって、時間になると鐘を鳴らし、愛らしい鳩が飛び出してさえずった。

「どうしてくれるのよ。あんたのせいじゃん」

突然、若い女の甲高い声が静かな待合室に響く。向かいの長椅子に坐っていた僕たちと同じ年くらいのカップルは、二人ともひどく不機嫌そうだ。彼氏をなじった女の子は唇を尖らせている。怒っているせいかもしれないけど、整った顔立ちがかえって擦り切れた冷たさを感じさせる。

「知るかよ。ほかの男の子供じゃねえのか」

肩まで髪を伸ばした男はぶっきら棒にそっぽを向き、腕を組んで貧乏ゆすりした。

「浮気してるのはあんたでしょ」

女は声を押し殺した。

「よく言うよ。だったら訊くけどさ、ブログに書いてたことはなんなんだよ」

「だから、あれはあんたが温泉へ連れてってくれてるって言ったのに、ほかの女と行っっちゃうから腹いせに書いただけだよ」

「女とふたりで行ったんじゃないよ。キー坊とキー坊の彼女と、彼女の後輩と四人で行ったんだよ」

「彼女の後輩って女でしょ。それってダブルデートじゃん。布団のなかでなにをしたのさ。まさか四人でつてことはないでしょうね」

「だからちげーよ。ただのお友達。指一本触れてません」

「大嘘つき。なんであたしを連れてつてくれなかったんだよ」

「お前は、あそこは嫌だ、ここは嫌だって、こだわりすぎなんだよ。」

うるさいじゃん。めんどくさいから、キー坊とさつさと行くことにしただけだよ。お前の言うことを聞いてたら、どこへも行けないもん

「お金出すんだから、ちゃんとしたところを選ぶのは当たり前でしょ」

「当たり前だけどさ、お前は文句が多すぎるんだよ」

男は投げやりだ。

「手術代はあんたが出すんだからね」

女は彼氏を肘でつついた。

「なんで俺が出さなきゃいけないんだよ。お前がぼけっとしてるから、こんなことになったんだろ」

「楽しんだのはあんたじゃん。エッチさせてあげたぶんだってお金を払ってほしいくらいだよ。今までのぶん、まとめて全部ね」

「よがってたのは誰なんだよ。お前が人のことも考えないでしめつけすぎるから、こんなことになったんだろ」

二人の声はだんだん大きくなる。診察室から飛び出してきた看護婦が注意して、いったんは喧嘩もやんだのだけど、またしばらくして始まった。要するに、お金の問題だった。自分は損したくないと言いつつ押し問答を繰り返している。耳障りだから、遙といつしよに庭へ出た。

外は小春日和のいい天気で、風もあたたかい。ふたりは枯れかけた藤棚のしたのベンチに腰をおろした。雀が舞い降りて、つつじの植え込みの陰で地面をつつきながら餌をあさっている。

若い母親が自転車を押しながら入ってきた。前の子供椅子に幼稚園の帽子を被った小さな男の子が乗っていて、楽しそうに腕を振り回して独りで遊んでいる。大人には見えないアニメのキャラクターと戦っているようだ。庭の片隅の自転車置場にママチャリをとめた若い母親は楽しげな子供を睨み、きつと目をすえた。

「早く降りなさい。なにしてんのよ。ぐずぐずして」

いきり立った彼女は怒鳴りつけ、男の子の頭を手ひどくひっぱた

く。男の子は火がついたように泣き始めた。若い母親は自分の子供にまた罵声を浴びせ、なにがそんなに腹立たしいのか、乱暴に抱えて子供椅子からひきずりおろした。男の子はどうしてよいのかわからず、泣き叫びながら同じところをぐるぐると走っている。

「自転車の子供椅子から、自分ひとりで降りられるはずがないよね。降ろしてあげなかつたらどうしようもないのに」

僕は、診療所のドアを開ける若い母親の姿を目で追った。

「死んだ愛が心のなかで腐っているんだわ」

遙は静かにつぶやく。

「最近、あつちこつちでヒステリックなお母さんを見かけるけど、貯金箱を壊すみたいに子供を叩くから怖いよね。僕が子供の頃だつてみんなひっぱかれていたけど、今のお母さんは怒りかたが違うんだよな。なんていうか、愛情がない怒りかたつて感じがする」

僕は自分の母親を思い出しながら言った。僕の小さい頃は、まだ愛情のある叱りかたをしていた。だけど、中学になってからはただヒステリックなだけになった。どうも世の中全体がどんどんヒステリックになっていくようだ。どうしてこんなことになってしまったのだろう。

「愛情がないのは、そのぶん欲望がふくれてるからなのよ」

「どういうこと？」

「愛情が大きくなつたら、欲望はしぼんじやうの。逆に、欲望がおきくなつたら、愛情はしぼんじやうのよ」

「そうして、しぼんだ愛情が心のなかで死んで、心を蝕んでしまふんだね。最善の墮落は最悪、か。ストレス社会だから、ヒステリックになるっていう人もいるけど」

「ストレスのものは欲望よ」

「たしかにそうだね。欲しいものを手に入れるためにがまんしたり、逆に、欲しいものが手に入らないからいらしたりするわけだからね」

「世の中が世知辛いからってみんな言い訳するけど、わたしはそう

じゃないと思う。欲望に流されるからそうなるのよ。欲望に従うことが当たり前だと思って、大切なことを見ないからそうなるのよ。自分のわがまままでいるんなことをだめにしておいて、それから言い訳するの。わたしのせいじゃない、わがままに生きていただけだって欲得ずくでなにいけいないのって」

遥はそう言つて押し黙り、胸の内の不安と欲望と格闘するように眼を閉じる。

「ねえ、もし赤ちゃんができていたらどうする？」

遥の声はすこしばかり震えていた。

「決まってるだろ。いつしよに育てようよ。僕は仕事を探しに行くよ。最初は大変かもしれないけど、そのうち慣れるよ。遥は学校を続けなよ」

「ゆうちゃんはやめるの」

「そりゃ、稼がないといけないからね」

「だめよ、浪人までして入った大学じゃない。もったいないもの。わたしが学校をやめて働く。わたしひとりで育てるわ。それとも、墮ろそうかしら」

「ばかなことを言うなよ。僕たちの子供じゃないか。殺してどうするんだよ。一生後悔するよ」

僕はそんなことを考えもしなかったら、遥が墮そうかと言つのを聞いてどきりとしてしまった。だけど、絶対にそんなことはさせられない。赤ちゃんがかわいそうというだけじゃない。もし墮胎なんかしたら、遥のことだから一生罪悪感に悩まされるのは目に見えている。不幸になるだけだ。

「もしできていたら、きちんと育てようよ。いいね？」

僕は駄目を押すように強く言つた。

「わたしが子供を産んでもいいのかしら？」

遥は自信なさそうに顔を伏せ、軽く首を振つて頬にかかった髪を払つた。

「どうして？」

「そんな資格があるのかなって思ってしまったの」

「遥なら、きつといいお母さんになれるよ」

「家庭の味も知らないのに？ さっきのお母さんみたいになっ
てしまっかも」

「つらい家に生まれたから、自分の家族を大切にできるんだよ。た
ぶん、なんの問題もなく普通に育った人は、自分が家庭を壊すよう
なことをしても気づかないんだと思う」

「わたしは怖いわ。自分の心のなかにどうしようもないものが
あるのがわかってしているもの。それが動き出したら、とめられないか
もしれない」

「それを知っているから、いいお母さんになれるんじゃないのかな。
誰にでも、得体の知れないものが心の奥にあるんだよ。魔物が棲すん
でいるっつえばいいのかな。それに気づいている人はごくわ
ずかだよ。わかっていたら気をつけることもできるけど、わかっ
ていなかったら、心の闇にいいようにされてしまうだけになるんだ
よ。たぶん、僕の親も、遥の家族もそうだったんだと思う。でも、
大丈夫。遥はそんなふうにはならないよ」

「そうだといんだけど」

「もしそうなりかけたら、ふたりできちんと話をしようよ。僕がと
めてあげる」

「ごめんね。わかっているのよ。いまでもじゅうぶん、わたしはし
あわせなのよね。いつでもゆうちゃんがそばにいてくれるし。ゆう
ちゃんはいつでもわたしを受け容れてくれるんだもの。自分を受け
容れてくれる人に出会える人はさいわいよ」

「遥だって、僕を受け容れてくれているんだよ」

看護婦が遥の名前を呼んだ。僕は遥の手を牽いていっしょに診察
室へ入った。

検査の結果、遥は妊娠していないことがわかった。老医師の見立
てはストレスのせいだろうとのことだった。ストレスを溜めこんで
生理不順になる女性が増え続けているらしい。医師の説明を遥のそ

ばで聞いていて、遙の葛藤は僕が考えている以上にすさまじいものだと思ひ知らされた。

「氣を楽にしなさい」

老医師は微笑みを浮かべ、肩をほぐす仕草をしながら言ってくれたのだけど、遙は浮かぬ顔のままだ。

「お嬢さん、生きることは悩むことですよ。私はこの歳になってもまだ悩み続けている。棺桶に片足をつっこんでいるのだから、もうそろそろ、いつお迎えがきてもいいように心の準備をしておかないといけない歳なのにね。若いあなたがいろいろ悩むのもむりはない」
厳しく優しく澄んだ瞳をした老人は、冗談めかして言った。遙は膝の上でぎゅっと拳を握っている。まぶたが怯えたように打ち震えていた。

「あなたがたもお忙しいかもしれないが、すこしだけ話をさせてください」

老医師は笑顔をやめ、ふっと真顔になった。

「私が高校生だった頃、もう半世紀以上前のことですが、身重の姉が崖から海へ身を投げてしまいました。自殺する二日前、思いつめた顔をした姉が私と話したそうにしていたのですが、受験のことで頭がいっぱいだった私は冷たくあしらってしまいました。そのことが、今でも心の底に重く沈んでいます。あの時、きちんと話を聞いてあげれば、あんなことにはならなかったのではないかと悔やんでも悔やみきれません。姉と姉の子の死がきっかけになって、私はこの道を選びました。」

産婦人科医になってから、これまで数万人の赤ん坊を取り上げました。どの赤子もまつさきにすることは、泣くことです。人は、泣きながらこの世に生をうけます。医学的には泣かなければ呼吸できないわけですが、ひよつとしたら、赤子にとって誕生は死なのではないかとも思わないでもありません。それまで母親の子宮のなかでゆったりと羊水に漂って楽しく過ごしていたのに、抵抗できない力でいきなり見ず知らずの外界へ引きずり出されるわけですから、見

方を変えれば恐ろしい死なのかもしれません。エデンの園を追放されたアダムとイブのようなものかもしれません。

とはいえ、赤ん坊はすぐにこの世界に順応します。それどころか、好奇心に胸を弾ませて毎日わくわく過ごします。ありがたいことに、私の取り上げた赤子を連れて挨拶にこられるお母さんがおられますが、彼女たちの幸せそうな姿を見るのが、いちばん楽しい。生きていてよかったと思える瞬間です。赤ん坊はつぶらな瞳を輝かせながら、笑って、泣いて、はしゃいで、むずかかって、心を全開にして生きています。それは、あなたにもかつてあったことなのですよ。

赤子の時の記憶を思い出すことはできませんが、一度、想像してみてもう一度でしょうか。なんでも不思議がつて、なんでも面白がっていた赤子の時代を。まっさらな心で思いっきり生きていた時のことを。

あなたがなにをそんなに悩んでいるのか、私にはわかりませんが、悩み事はリュックのようなものだと思いなさい。それを担いで歩くのが人生です。肩が痛くなったら、歩くのをやめて、そのリュックをかたわらにおろして休憩なさい。太陽の光を浴びて、草の匂いをかいで、なにもない青空のようなまっさらな心を出したら、またそのリュックを担いで行きなさい。私の言いたいことはこれだけですよ」

老医師は、やさしいまなざしをじっと遥へ注ぐ。

「はい」

遥は小さくうなずいた。遥の瞳にはいくぶん輝きが戻っている。

僕はほっと息をついた。

「大切なのはまっさらな心です。悩むのもほどほどにして、気を楽しみなさい」

老医師は目尻に笑い皺を作り、ゆっくり両肩を回す。僕たちはお礼を言つて診察室を出た。

駅前まで行つて、スーパーへ寄つた。

「いいお医者さんだったね」

僕は、しいたけのパックを籠に入れながら言った。

「そうね。わたしもまっさらな心で生きていた時があったのよね。それから、誰にでもいろいろあつて、みんなリュックを担いでいるのね」

遙は普段と同じ表情で白葱を見比べている。僕は、張りこんですき焼きの材料を買った。おいしいものを食べて、もっと元気になつて欲しかった。

緊張がほどけたせいか、その晩から遙の月経が始まった。用意周到な遙が珍しく生理用ナプキンを切らしていたから、僕はあわててコンビニへ買いに行った。コンビニ袋に入れたナプキンをぶらさげて走りながら、子供ができたらどうなるのだろうと考えた。今度は、紙おむつを買いにコンビニへ走ることになるのだろうか。それも悪くない。むしろ、待ち遠しい気がする。秋の夜風が快い。

あと二年半で卒業だ。

とにかく、内定だけは取れるようにがんばろう。

仕事さえ決まれば、僕たちの未来は開ける。

ふたりでしっかり生きていこう。

僕たちが欲しくてもどうしても得られなかったもの　幸せな家庭を築こう。

将来のふたりの姿を想い描いて、三人になった家庭を空想して、僕はときどきしなからワンルームマンションの階段を一段飛ばしに駆け上った。

だけど、息を切らせてドアの前に立った僕は、突然、頭のとつぺんからつまさきまで鳥肌が立つのを覚えた。なにかに掴まれたように心臓がぎゅっと締まる。嫌な予感がして、胸騒ぎがどうにもとまらない。僕は急いで鍵を開けた。

冷たい部屋にくぐもったうめき声が響いている。遙の姿は見当たらない。ユニットバスの扉が開いて、明かりがもれていた。

「どうしたの？」

遙は、ユニットバスの便器にかがみこんで吐いていた。プラスチック

ツクの床には血が流れ、なんともいえない臭いがユニットバスにこもっている。僕は換気扇のスイッチを入れ、遥の背中をさすった。

「遥、大丈夫？」

そう呼びかけても、顔をしかめた遥は苦しそうに首を振るのが精一杯だ。

せつかく、すこしは元気を取り戻してくれたものだと思っていたのに。

今晚のすき焼きだって、おいしそうに食べてくれたのに。

遥の顔からすっかり血の気が引いている。遥は、激しい嘔吐を繰り返す。

走りながら想い描いていたふたりの未来図が音を立てて崩れるように、僕は薄暗い不安に駆られた。

命はよみがえるから

遙の状態はよくなるらない。

たまに機嫌がよくなったかなと思っただら、すぐに塞ぎこんでしま
う。

心療内科へ行こうと勧めたけど、

「病院へ行っても気休めにしかならないわ。お母さんが鬱病だった
から、わかるの。心療内科のお医者さんは結局のところ世間一般の
人で世間の価値観にとらわれているから、ほんとうにたいせつなこ
とがわからないのよ。心の奥深くは治せないのよ。だから、自力で
治すしかないの。薬でごまかしたら、あとでもっとつらくなるだけ
わたしのお母さんはお医者さんと薬に頼ってばかりだから、病院と
家を一生行ったりきたりするはめになるのよ」

と、遙は首を振るばかりだった。

遙はやつれた。

僕と暮らし始めてから遙はすこしばかりふくよかになったのだけ
ど、一時期はきつくなっていたブラジャーがゆるくなった。顔全体
が痩せ、大きな目が力なく浮き上がる。そんな遙を見るたびに、胸
が傷む。

僕はどうすればいいのかわからなくなって、ヘアサロンのオカマ
さんに電話をかけた。オカマさんは仕事の後、今坐っている喫茶店
まできてくれた。

「あたしもね、気になってたのよ。すごくしょぼりした顔をした
り、うつむいたまま顔を上げなかったりするから。携帯でメー
ルを送っても、気のない返事ばかり返ってくるのよね」

オカマさんはいつものように顔をにこにこさせながら言った。オ
カマさんの笑顔はふかしたての肉まんのようにほっこりしている。
僕はほっと心がなごみ、救われた気がした。遙からなにか相談を受
けてないかと訊いてみたけど、オカマさんは遙ちゃんは自分のこと

を話さないからと言い、

「まだ、ほんとうの意味であたしに心を開いてくれてないのよね。あたしは自分の妹のように思ってるんだけど」

と、ため息をつくだけだった。

僕は遥の最近の様子や生い立ちをざつと話した。オカマさんの言うとおり、遥は僕以外の人に自分のことを知られるのを極度に避けていたけど、彼にだったら許してくれるだろう。

「やっぱりね。そんな感じがしてたんだけど。子供の頃に大切なものを壊された人は、どうしてもそうやってしまうのよ。自分を守ろうとしすぎて、しゃちほこばつちゃうのよね」

「遥は、話しかけても申し訳なさそうに顔を背けたりするんですよ。ちよつとした言葉を交わすのもつらいみたいで、怯えた顔をしてうつむくこともあるし。もしかしたら遥が自殺しちゃうんじゃないかって、はらはらするんです」

「自分の殻に閉じこもっちゃってるのね。周りの人の力を借りないとどうしようもないのにな。つらさを乗り越えるのは遥ちゃんのように自分の力でやらなくちゃいけないんだけど、誰か杖になってくれる人が必要なのよ。誰かに手伝ってもらわなくちゃ、人生の問題なんて乗り越えられるものじゃないわよ」

「僕がいくらでも杖になってあげるのに」

「純粹に人を愛したいっていう遥ちゃんの気持ちはよくわかるわ。できるんだったら、あたしもそうしたいもの。素晴らしい愛よね。

でも、遥ちゃんは一途すぎるのよ。急ぎすぎるって言えばいいのかしら」

「なにかいい方法はないでしょうか」

「あればいいんだけどねえ。あたしの頭じゃ思いつかないわ。焦らないでとか、もっとリラクセスしていいのよとか、月並みなことした思い浮かばないもの。いちばん大事なことは、大切な人に愛されてるって心の底から実感できることね。それがわかれば、気持ちがいぶん落ち着くものなのよ」

「愛しているつもりなんですけど、わかってくれてないのかな」
弱気になっていた僕は、思わず弱音を吐いてしまった。

「あら、ごめんなさい。そういうつもりで言ったんじゃないのよ。佑弥君が遥ちゃんをほんとうに大切にすることはすっごく感じるわ。はたから見ていると羨ましいもの。あたしだって、遥ちゃんみたいに愛されてみたいし、いつかそんな彼氏に出会いたいって思うわでもね、よくあるじゃない。人が親身になっていいアドバイスをくれてるのに、ぜんぜん耳に入らないことって。落ちこんじゃって、自分を見失ってることって」

「そうなんですよね。遥は自分を見失っているんですよね。どうやったら自分を取り戻してくれるんだろう」

僕はため息をついた。

「佑弥君、ちよつと気分転換でもしてきたら。あなたが煮詰まったら、遥ちゃんはどうなるのよ」

「ほんとうにそうですよね。遥が頼れるのは僕しかいないから。旅行にでもふらりと出かけた方がいいんですけど」

「行ってくればいいじゃない」

「でも、遥が心配だからほっとけないですよ」

「それじゃあ、ふたりで行ってきたら。ふたりでいっしょに気分を入れ替えたらいいいじゃない」

「この間、遥に旅行しようって言ったんだけど、黙って返事もしてくれなかつたんです」

「八方手詰まりなのね」

オカマさんは頬杖をつく。

「そうなんです。こんなことを話してすみません」

「あら、どうしてそんなことを言うのよ。あたしたちは友達じゃない。そうでしょ」

「ありがとうございます」

「他人行儀ね。頭を下げるほどのことじゃないわよ。こんな時のために友達がいるんじゃない」

「女の子って、こんな時どうすれば気分転換できるんですか？ 僕は遙しか知らないから、よくわからないんですよ。甘いものを食べたり、髪を切ったりした時に遙の気分がよくなるのはわかるんですけど」

「そう、それがあるじゃない」

オカマさんは嬉しそうに両手を叩き、

「あのね」

と、思いついたアイデアをこっそり話してくれた。

その週末、オカマさんは遙を呼び出してくれた。遙は気分がすぐれないことを理由にして断ろうとしたのだけど、

「せっかく、言ってくれてるんだからさ」

と、僕は遙を引っ張ってヘアサロンへ行った。夕暮れた駅前の大通りは、金曜とあって賑やかだった。

「遙ちゃん、よく来てくれたわね。待ってたのよ」

オカマさんはいつもの笑顔で遙を迎えてくれた。なかは白いモノトーンの内装で整えていて、清潔感がある。『くるみ割り人形』、『白鳥の湖』、『蝶々夫人』といったバレエやオペラの曲ばかりずつと流れているのがこの店の特徴だった。オカマさんはそれが気に入ってここに勤めることにしたらしい。

「なに？」

遙はきょとんとしている。

「さあ坐つてよ」

オカマさんは美容椅子を足でさっと回転させた。

「わたしは予約を入れてないけど」

「あたしが入れたのよ。プレゼントよ」

「どうして？ 誕生日でもないのに」

「誕生日じゃなくてもいいじゃない。プレゼントしたいから、プレゼントするの。いけないかしら」

「そんなことないけど」

遥はまだとまどっている。

「遥、人の好意は素直に受け取るもんだよ。坐りなよ」

「でも」

「いいから」

僕は遥の背中を押して、遥を椅子に坐らせた。

「遥ちゃん、どんなふうにしようかしら」

慣れた仕草で椅子を鏡へ向けたオカマさんは遥に訊く。

「いつもとおなじでいいわ」

「あら、それだったらプレゼントした甲斐がないじゃない。ちょっとさ、気分が明るくなるような感じにしない」

「うん、いいけど」

「それじゃあね、あたしは前から遥ちゃんに似合うヘアスタイルを考えてたのよ。今日はそれを試してもいいかしら」

「おまかせするわ」

「よかった」

オカマさんと僕は目を合わせてうなずいた。僕はよろしくお願ひしますと言って、待合のソファーに腰かけた。

オカマさんは遥の髪を洗い、さらさらとカットする。僕は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を読みながら、二人の様子をちらちら見た。

初めは暗い面持ちだった遥もカットが進むにつれて、薄皮をはぐように表情が落ち着いた。オカマさんがなにくれとなく遥に話しかける。遥は、鏡に映る自分を見ては二言三言話して気持ちよさそうに目を閉じるようになった。

カットの後でパーマを当てた。

「当てたことがないから、いいわ」

と、遥はしぶったのだけど、

「あたしに任せて。遥ちゃんのパーマデビューを担当させてもらえるなんて光栄だわ」

オカマさんはそう言って無難にことを運んでくれた。

僕のお腹が空いて耐えられそうになくなった頃、新しい遥ができ

あがった。いつものように生真面目そうな感じではなく、活発で楽しそうな髪形に仕上がった。なんとという名前のヘアスタイルかは知らないけど、髪のスそがぴよんと跳ねていてかわいらしい。

「わたしはこんなふうにもなるのね」

遙は手鏡を見ながらつぶやいた。まんざらでもなさそうだった。

「どう?」

オカマさんが遙の肩にやさしく手をかける。

「いいわね。なんだか違う自分になったみたい」

ようやく、遙は明るい笑顔をみせてくれた。

「そうでしょ。女は変わることができるのよ。いつでも新しい自分になれるの」

セットを終えてから、三人近くにある魚料理専門のレストランへ行った。普通の食堂にくらべていささか値は張るけど、品のある味付けで料理はどれもおいしい。遙はハマチの刺身定食、オカマさんはブリの照り焼き定食、僕は日替わり定食を頼んだ。日替わりの中はカレイの煮付けだった。

オカマさんは小熊のような丸顔をにこにこさせて、遙の髪を何度も眺める。オカマさんとしても自信作のようだった。

「話は変わるけど、にわとりちゃんってすごいのよ」

小鉢に入っているかぼちゃの煮物を食べながらオカマさんが言う。

「どうしてですか?」

遙はちょうどハマチの刺身を口に入れたところだったので、僕がかわりに訊いた。

「はいけい 廃鶏はいけいって聞いたことあるかしら」

「ないですけど」

僕は首を振った。

「卵を産むにわとりちゃんが役に立たなくなると廃棄処分になっちゃうんだけど、それが廃鶏はいけいなの。狭い鶏舎のなかで二十四時間、強いライトを当てられてむりやり卵を産まされるでしょ。そうすると体がぼろぼろになって卵を産めなくなっちゃうのよ。もうみてられ

ないの。羽はぱさぱさだし、ぜんぜん艶がないのね。いくらトリートメントしても、毛染めしてもだめかなあって感じなのよ。おまけに、羽が抜け落ちて骨が見えるにわとりちゃんもいるのよ」

「かわいいそうね」

刺身を食べ終えた遙がようやく会話に参加した。新しい髪型がいい影響を与えているのか、今晚の遙はわりあいよく話す。

「ほんとにそうよね。でも、そんなにわとりちゃんたちのおかげであたしたちは安い値段で卵をいっぱい食べられるんだけどね。にわとりちゃんをこきつかってあたしたちは生きてるのよ。それはともかく、うちのお父さんが廃鶏を何羽かもらってきて飼うことにしたの。実家は農家だし、庭に放し飼いにしておけばいいから、手間もかからないのよ。」

去年のお盆に田舎へ帰った時にちょうど飼い始めたんだけど、いつまでもつかしらって不安だったわ。死なせたら申し訳ないじゃない。でも、今年の夏に帰ったら、にわとりちゃんはまた卵を産むようになったの。すごいでしょ。毛も抜けて、おじいさんみたいによたよた歩いて、もうほとんど死にかけてたのに、ちいさな庭で暮らしているうちに元気になったのよ。一度は要らないって言われて捨てられたにわとりちゃんなのにな」

「すごいわね」

遙は箸をとめ、感心したように言った。

「そうよ。命ってすごいなのよ。リラックスして、気ままに庭を走り回って、そんなふうにふつうの暮らしをしてるだけで、ふつうに元気になるの。鶏舎にいた時より、ずっと元気なんじゃないかしら。それでね、にわとりちゃんが産んでくれた卵を食べただけど、それが甘くておいしいのよ。このあたりのスーパーでも地卵なんか売ってるけど、あんなの目じゃないわよ。ずっとずっとおいしいの。卵かけご飯なんかしたら最高よ」

話し終えたオカマさんは、おいしそうにブリの照り焼きをほおばる。僕はなぜ彼がそんな話をしたのかわかった。彼は廃鶏のことを

語りながら、遙を励ましてくれている。僕は感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

オカマさんは、地鶏の話をあれこれとしてくれた。

農家で飼っている食肉用の鶏はむりやり成長させるための合成飼料を使わずに、粟や稗ひえといった自然の雑穀を食べさせるから、味がとても濃いのだそうだ。毎日、庭先で運動をしているから、肉も引き締まって歯ごたえがある。オカマさんが実家へ帰ると、お父さんが必ず地鶏を一羽漬して鶏鍋を作ってくれるので、家族で鶏鍋をつつくのがとても楽しみなのだとか。今度ふたりで遊びにいらっしやいと誘ってくれた。

「腹ごなしに散歩しましょうよ。遙もいいだろ」

店を出た後、僕は二人を散歩に誘った。

街灯がともった住宅街へ入る。しんとして静かだ。遙はなんにも疑わずについてくる。やがて、目的地のタイムパーキングに着いた。

「二人でドライブへ行つてらっしやい」

オカマさんは車のキーを差し出す。彼のシビックを貸してもらったことになっていた。僕はキーを受け取った。キーホルダーにはアイヌ人形のコロポックルがついていた。

「いつしよにいかないの？」

遙がオカマさんに訊くと、

「あたしは明日も仕事だから。早番だし。それじゃ」

と、彼は小さくしなを作り、こまかくかわいらしく手を振る。

「今日はありがとうございました」

僕は頭を下げた。

「楽しんできてね」

にこにこしたオカマさんは振り向き、そのまま住宅街の角を曲がった。

「いいのかしら」

遙は、まだ彼が消えたブロック塀のあたりを眺めている。

「遙を旅行に連れてってあげて言って、貸してくれたんだよ」

「そうなの」

遙はうつむいた。目の縁がにじんでいる。オカマさんの気持ちが通じたようだった。

調布から夜の中央高速に乗った。

「どこへ行くの？」

助手席の遙が言う。カーナビは中央高速の西へ表示を出している。オカマさんがあらかじめセットしておいてくれていた。

「飛騨高山のあたりだよ。紅葉を観に行こう。ネットで調べたんだけど、今が見頃なんだって。明日の晩は温泉の宿を予約してあるんだ」

「わたしはなにも持ってきてないわ」

「荷物はトランクに入っているよ。着替えもちゃんとあるから」

「いつ準備したの？」

「昼のあいだにね」

「知らなかった」

「遙が学校へ行っているうちに、全部用意したんだ」

「そうなの。ありがとう」

「お礼なら、篠山さんに言わなくっちゃ。彼がお膳立てしてくれたんだよ。帰ったら、お礼になにかご馳走しようね」

「わたしの作ったコロツケが好きだっていつてたわ」

「そういえば、いつかそんな話をしてたね」

「あまったコロツケでサンドイッチを作って、いっしょに食べたことがあったの。ささちゃんはずごく喜んでくれて、また食べさせてちょうだいって言ってたんだけど、まだ作ってないのよ。でも、カッタしてパーマまでかけてくれたのに、コロツケじゃ、つりあわないわね」

「コロツケとほかにご馳走を用意して、篠山さんをうちに招待しようよ」

遙はなにも答えない。助手席を見ると、遙はもう眠っていた。

心なしか、いつもより安らかな寝顔だ。愛されているということ

を実感してくれたからだろうか。もしそうなら、ほんとうにいいのだけだ。

相模湖を抜けて、大月ジャンクションをまっすぐ走る。先へ進めば進むほど乗用車が減ってトラックが増える。数珠繋ぎに走るトラックを何回も追い越した。

イグニッションキーについたコロポックルがゆらゆら揺れる。民族衣装を着て細い目を微笑ませた小人だった。妖精とも、アイヌ民族が暮らしている地域の先住民族ともいわれている。コロポックルの笑顔はとてもやさしい。野仏のようにただ微笑んでいた。

黒い山影のうえに月が見えるだけで、星はひとつも見えない。長いトンネルをずっと走っているようだ。FMから静かな音楽が流れる。車の風切音だけが響いている。

遙のことを考えると、せつなくなってしまう。

いつまでたつて晴れない暗い霧のなかで少女時代を過ごした遙は、平凡な幸せを手に入れることすらできない。ありふれた幸せのなかで育ち、そのまま平穏な人生を送る人もいるというのに、純粹すぎるほど純粹な遙には次から次へと不幸が降りかかってしまう。たぶん、遙の心には、まるで時限爆弾のようなにかとんでもないものが埋め込まれていて、それを解除しない限り、幸せになれないのだろう。それは憎しみの種、あるいは恨みの種と呼ぶべきものなのかもしれない。遙が言っていた墮落した愛情が心のなかで腐ったものなのかもしれない。それがわかつているから、心の桎梏になっているものを外そうとして、遙はひたすら純粹な愛情を追い求めてしまっただ。それさえ手に入ればすべてが解決するはずなのだけど、簡単には手に入らないものだから、いつも挫折感にさいなまれてしまう。自分の影に怯えてしまう。

僕は、そんな遙に寄り添ってあげることしかできない。

自分は無力なんだとつくづく思う。

どうしてあげればいいのかはわからないけど、今はただ、ぐっすり眠って欲しかった。オカマさんが話してくれたように、リラックス

スして普通に暮らせば、いつか悲しみの長いトンネルを突き抜けて、コロポックルのように穏やかな笑顔を浮かべながら暮らせる日がくると信じたかった。命を取り戻した鶏のように、元気になってくれると思いたかった。

途中のサービスエリアで車をとめて二時間ばかり仮眠を取った。夜が冷たく白む頃、高速を降りた。

ふたりで生きようね

柿が熟した田舎町を抜け、山道を進む。窓をすかすと、ひんやりした風が車内で渦を巻く。冷水で顔を洗ったようで清々《すがすがしい》。

ヘアピンカーブが連続する厳しい道を想像していたのだけど、比較的なだらかだ。思ったより楽に運転できる。遙は、かくんと首を折り曲げて熟睡したままだった。近頃は寝つきの悪い夜が続いていたけど、今日はよく眠っている。悪い夢にもうなされていないようだ。

ゆるやかな峠を越えて、狭い盆地へ向かっておりる。ところどころ色づいた林の向こうに、冬枯れた田んぼが広がっていた。細い川が盆地の真ん中を流れている。

山を降りたところに道の駅があったので、いささかくたびれた僕は駐車場へ入った。まだ早朝だから車はまばらだった。おばさんが土産物コーナーのシャッターを上げている。

サイドブレーキの音で遙が目を覚ました。

「着いたの？」

うつすらと目を明けた遙は伸びをする。

「ただだよ。すこし休憩しよう。遙は顔を洗ってきなよ」

僕はあごのあたりを指差した。

「えっ？ うん」

遙は気恥ずかしそうにうなずく。よだれの痕あとがついていた。よほどぐっすり眠れたんだなと思って、僕は安心した。トランクを開けてポストンバッグを出した。洗顔セットを手にした遙は、さっそくお手洗いへ行った。

駅の裏手に和風庭園があった。鯉の泳ぐ池を囲むようにして松や梅が植わっている。きれいな芝生が庭全体を覆っていてさわやかだ。庭の片隅には信楽焼きのためぎが「いらっしやい」とでも言いた気

に楽しそうな表情で立っている。名前も知らない小鳥たちが梅の枝にとまっては飛び立つ。

僕たちは、池のほとりのベンチに腰かけた。遙が寒そうにしたから、僕は自分のジャンパーを脱いで、遙に羽織らせた。

「ゆうちゃんは寒くないの」

「平気だよ。お腹は空いた？」

「ちよつと空いているかな」

「朝ごはんにしよう」

僕は弁当箱を開けた。おにぎりにお新香をそえただけのシンプルな弁当だ。昨日、僕が作った。

「梅干とかつおぶしとこんぶがあるよ。どれがいい？」

「かつおぶしがいいな」

「この二つだよ」

僕は真ん中に並んでいるおにぎりをさし、

「お茶はここにあるから」

と、魔法瓶をふたりの間に置いた。

「いただきます」

遙は、海苔を巻いたおにぎりをちいさくかじる。

「おいしいわね。ゆうちゃん、上手ね」

「おにぎりくらい僕だつてにぎれるよ。ほら、中学校の卒業式の次の日もさ、僕がおにぎりを作ってハイキングに行っただろう」

あの日、僕は遙を誘って溪流沿いのハイキングコースを歩き、山の中にある池へ行った。遙は入院したお母さんの看病や家事で忙しかったから、僕が弁当をこしらえることにしたのだった。

「あのスクランブルエッグを作ってくれた時ね」

「卵焼きのできそこないのね」

弁当に卵焼きを入れようと思って挑戦してみたのだけど、うまく作れなかった。卵を折りたたむのがむずかしい。しかたないからかきまぜて、スクランブルエッグにしまった。火加減がわからず、いささか焦がしてしまった。

「ふつうにおいしかったわよ」

「それならよかったんだけど」

「そういえば、あの日、ゆうちゃんは元気がなかったわね」

「そう見えた？」

「うん」

「実はね、遙に告白しようと思って、ラブレターを用意していたんだ。僕たちは別々の高校へ行くことになっていただろ。だから、どうしても僕の気持ちを伝えておきたかったんだよ。それで、緊張していたんだ。どきどきし通しだったよ」

あの日の光景が脳裡によみがえる。遙は紺色のリュックを背負っていた。あの頃のふたりがなつかしい。

「ボートに乗ったとき」

僕たちはふたり同時に言った。

「遙、なに？」

「いいのよ。ゆうちゃん、言ってよ」

「池でボートを漕いだ時、その手紙を遙に渡そうと思ったんだけど、遙は僕を避けているような素振りだったから、とうとう渡せなかったんだ。なんだか怒っているみたいなきがしたし」

「怒ってなんかいなかったわ。とまどっていたのはあったかもしれないけど」

「中三の時、誰かほかに好きな人がいたの？」

「ううん」

遙は首を振る。

「私もね、ゆうちゃんのことを好きだったの。机の引き出しを引いてはゆうちゃんといっしょに撮った写真をなんども眺めたり、一晩中、ゆうちゃんのことを考えて眠れなかったこともあったわ。ゆうちゃんがわたしのことを好きなのはわかっていたから、早く自分の気持ちを打ち明けてくれないかな、なんて思っていたこともあったの」

「ばれてたんだ」

「わかるわよ。だって、ゆうちゃんはいつもわたしのほうを見ていたじゃない。授業中も、掃除の時も、部活で校庭を走っていた時だって」

「なんだ。それだったら、あの時、思い切って渡せばよかったね。あの手紙は一週間くらいかけて何度も書き直したんだよ」

「渡してくれなくてよかったわ。あの時、もしゆうちゃんがわたしに告白したら、いいお友達でいましょうって言うつもりだったの。もしそうしたら、こうしてふたりでいっしょに過ごすこともなかったかもね。ゆうちゃんはもっと素敵な人を見つけていたかもしれないわ」

「どうして断るつもりだったの？」

「怖かったのよ。男の人がみんな怖かったわ。じつはね、高校の合格発表があった後、あの人から電話があったの」

「お父さんから？」

「うん。あの人の家でいっしょに暮らさないかって。高校生になるのを機会に、わたしを取り戻そうとしたのよ。もちろん、わたしは断ったわ。そんなつもりなんてぜんぜんないもの。お母さんをいじめたあの人を憎んでいたわ。今も、これからも、ずっとそうよ。あの人をお父さんなんて呼ぶことはないし、許すことなんてないわ。お母さんが鬱病になったのはあの人のせいだもの。」

それでね、たぶん電話じゃすまないだろうなって思っていたら、案の定、あの人はうちへやってきたの。うわべだけの笑顔でわたしを説得しようとしたわ。いっしょに暮らせば経済的にも安定するし、家事はおばあちゃんが全部やってくれるから自分のことだけに専念すればいい、進学塾でも習い事でも好きなことをやらせてやる、将来のことを考えたらそのほうがぜったい得だとかなんとかいいことばかりいつてね。まるでセールスマンよ。

わたしがどうしても首をたてに振らないものだから、あの人はやつぱりキレて怒鳴り始めたわ。でも、わたしに直接怒らずにお母さんの悪口ばかりいうのよ。お前はお母さんを信用しているかもし

れないけど、とんでもない女なんだって。聞いていらなかった。そばで坐っていたお母さんは泣き出しちゃうし。

あの人は、俺の言うことを聞くまではぜったいに帰らないっていう態度だった。しかたがないから、わたしは警察へ電話をかけて、お巡りさんにきてもらったの。駆けつけてくれたお巡りさんに、お母さんとあの人の離婚協議書のコピーを見せて、困っているから追いかけてほしいってお願いしたら、あの人は急に態度を変えてぺこぺこして、それでようやく退散したわ。警察沙汰になったら困るものね。

そのあとがたいへんだったわ。お母さんはひどく傷ついてしまった、また具合が悪くなってしまったの。結局、入院するよりほかに手立てがなかったわ。あの人がおなげれば、あんなことにならないかっただのに。わたしはわたしで、どうしようもないくらい落ちこんじやった。高校に合格してほっとした矢先だったのにね」

遥は、やりきれなさそうに首を振った。

「そんなことがあったんだ。どうして話してくれなかったの」

「ゆうちゃんにも話せないくらいふさぎこんでいたのよ」

「それにしてもさ、それでどうして僕まで怖くなってしまうの？」

たぶん、僕は遥のお父さんと正反対の性格だよ」

「わかってるわ。わかっていたのよ。でも、もしゆうちゃんがあの人みたいになったらどうしようって思ってしまったの」

「遥をなじったり、いじめたりするってこと？」

「そうよ」

「そんなことしないよ。今まで一度もないだろ」

僕は、ついむっとしてしまった。

「怒らないで。わたしはどうかしていたんだわ。素直にゆうちゃんの愛情を受けとればよかったのね。よけいなことは考えずに、素直に好きだっと思っていればよかったのね。あの日、わたしはゆうちゃんに悲しい思いをさせてしまったのね」

「そんなことないよ。あの後も、遥は僕と会ってくれたんだし。」

むっとしてごめん。遥の気持ちはわかる気がするよ。小さい時にいっぱい怖い思いをしたから、その恐怖感がどうしても抜けないんだよね。でも、遥のお父さんはもうこないから」

家族のもめ事のせいで自分の人生を思うように生きられない遥がかわいそうだ。家族という名の泥濘ぬかるみに足を取られたのでは、たまったものではない。

「そうだといいけど」

遥は自信なさそうにつぶやく。立ち直りかけては悪いことが起きてだめになってしまう、そんなことを繰り返しすぎたからだろう。

「遥のお父さんには僕たちの住所も電話番号も教えていないんだろ」

「うん」

「だったら大丈夫だよ。もう忘れていいんだよ」

「忘れたいわ」

「今までのことはみんな忘れていいんだよ」

僕は遥を抱きしめた。遥の体温だけがあたたかい。

「大切なのはこれからだよ。ふたりで生きていこうね」

そっとくちづけをかわすと、僕の頬に遥の涙がつたう。遥の唇は、

おにぎりの海苔の香りがほのかに漂った。

「ごめんなさい。せつかくの旅行なのに泣いたりして」

「いいんだよ。でもさ、ひとつだけ約束してよ」

「なに？」

「今日はなにも考えないで景色だけを楽しもうよ。ほんとに、なにも考えなくていいんだよ。それから、温泉につかったのんびりしよう。なにも考えちゃだめだよ」

「約束するわ」

遥は白い手で頬をぬぐいながらうなづく。僕は遥の背中をさすり、大丈夫だからと何度も繰り返しささやいた。

紅葉は陽の光に透き通り

シビツクは両側を山に挟まれた川沿いの道を走る。川の水は転げ落ちるように走り、岩にぶつかっては白い波を立てる。透き通る青い川床と涼しげな檜林のコントラストがきれいだ。泣いてすっきりしたのか、遥の表情はすっと落ち着いた。晴れた景色をまぶしそうに眺めている。

幹線道路を右に折れ、橋を渡った。車は再び山道へ入った。

緑のカーテンをすり抜けるようにして坂をのぼる。山へ分け入るごとに秋が深まる。紅あかや黄色のまだら模様が目立つようになった。

さっと視界が開け、目の前に秋の高原が広がった。牧草地や林が続くその向こうに神秘的な雰囲気漂わせた山がどっしりそびえている。両側が優美な稜線を描き、真ん中に雪をいただいた峰がいくも連なっていた。

「あれはなんていう山なの？」遥が訊く。

「御嶽山おんたけさんだね」

僕はカーナビの表示をちらりと見ていった。

「きれいな山ね」

遥は御嶽山に見とれた。

展望台で車をとめた。駐車場には観光バスや乗用車が並んでいて、見物客が大勢いた。手軽な撮影ポイントなのだろう、一眼レフのカメラを手にしたアマチュアカメラマンがそこかしこで山を撮っている。ガードレールの向こうの草地には、イーゼルを立てて油絵を描く人や、坐りながら水彩画の筆を執る人がいた。僕たちは見物客にお願いして、御嶽山をバックにふたりの写真を撮ってもらった。

観光客を引率したバスガイドがハンドマイクを片手に説明を始めた。お転婆そつなお姉さんだ。僕たちもそばへ行つて彼女の話聞いた。

「御嶽山は長野県と岐阜県にまたがる標高三〇六七メートルの火山

でございます。四つの峰がございりますが、あちらから、継子岳、摩利支天山、剣ヶ峰、継母岳の順に並んでおり、最高峰が剣ヶ峰となっております。長い間、死火山と思われていた御岳山ですが、第二次オイルショックのあった昭和五十四年、とつぜん水蒸気爆発を起こしまして、高さ約一千メートルまで噴煙をあげました。その後も小規模な噴気活動が断続的に続いております。

また、御嶽山は豊かな山の森と独特の容姿のために、古くから山岳信仰の対象となってきました。七世紀に開山されて以来、修験道の行場がいくつも開かれ、今日でも行者さんたちが修行にはげんでおられます。急峻な地形の御嶽山は滝の山といわれるほど滝が数多くあるため、かつこの修行の場となっております。このほかに、宗教登山が盛んでして、白装束姿の信者のかたがた、あるいは一般の服装をした信者のかたがたも、毎年、おおぜい登られております。それではこちらに続いてください」

よどみなく解説を終えたバスガイドは、澄ました顔で観光客を連れて行った。

「登れるのね」

遙は、あごに指を当てながら興味深そうに御嶽山を眺める。

「登ってみたい？」

「うん。頂上から景色を眺めたら気持ちよさそうなもの」

「それじゃ、今度の夏にでも登りに行こうか」

「今じゃだめからしら」

「もう寒いよ。山小屋も閉まっているだろうし、この格好で登ったら凍えちゃうよ」

「あ、そうか。それじゃ、夏にしましょ」

「山開きしたら、いっしょに行こうよ」

「指切り」

遙は小指を差し出す。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたら針千本、飲おます、指切った」

遙は、嬉しそうにくすくす笑った。

道は一車線になったり、二車線に戻ったりする。森を走り、田畑が広がる狭い盆地を抜け、また山へ戻る。長いトンネルを抜けておだやかな水をたたえたダム湖に着いた。そこでもしばらく景% E

希望はすぐそばにあるから自分を信じて

溪谷に湯煙があがっている。

シビックは急な坂を登った。谷間の細い山道だけど、シビックは賢くてしつかり者の車だから無難にこなしてくれる。ハンドルを切るたびにイグニッションキーのコロポツクル人形が振り子のように揺れる。傾きかけた陽射しが檜林をやわらかく照らしている。ひなびた温泉街に着いた。

急斜面の狭い峡谷の中腹に木造の温泉宿が五つほど軒を連ねていた。僕は、そのなかの山月館という名の宿に車をとめた。のんびりしたいのならここがいいとオカマさんが勧めてくれた宿だった。黒い木板と白い漆喰が古めかしい。時代劇に出てくる陣屋のような建物だ。

玄関へ入ると湯の花の香りがかすかに鼻をくすぐった。黒光りする柱や床のなかで、すのこだけが真新しい。すのこのそばには泊り客用の白い鼻緒の草履が並び、下駄箱の上にはきれいに色づいた紅葉の盆栽が置いてあった。海老茶色の和服を着た女将おかみさんが迎えてくれる。僕の母と同じ年くらいだろうか。いささか厚化粧だけどしつとりと目の濡れた美人だった。物腰がやわらかい。

記帳を済ませた後、僕たちは二階の川沿いの和室へ通された。

障子を開け、ガラス窓を開けると、すぐ向かいの山の稜線と川の色せらぎが飛びこんでくる。宿の真下は蒼い崖になっていて、その下を小さな川が流れていた。虫取り網を手にした子供たちが石ころだらけの狭い河原で遊んでいる。

宿の浴衣に着替え、下着とタオルを入れたふろしきを持って宿を出た。温泉街を抜け、檜の匂いが漂う坂をぶらぶら歩く。

「やっぱり、空気がおいしいわね。檜の香りもいいわ」

遙は気持ちよさそうだ。

「さっぱりした匂いだね」

そんなたわいもないことを話しているうちにこじんまりとした町営の公衆温泉に着いた。宿にも大浴場があるのだけど、残念なことに露天風呂がなかった。陽のあるうちに町営温泉の露天風呂に入っておきたかった。

さきに体と髪を洗って、誰もいない岩造りの露天風呂につかった。なにもかもがぼかぼか温まる。なんともいえないため息が自然と口からもれる。体中の疲れと毒素が出ていくようだ。山がきれいに見えるから、景色もいい。湯加減もちょうどいい。空が広がってのんびりできる。首を回して、骨をぽきぽき鳴らした。こわばった体がほぐれた。

「ゆうちゃん。聞こえる？」

「遙が仕切りの竹垣越しに僕を呼んだ。」

「聞こえるよ。大丈夫？ ほかに人はいない？」

「わたしだけ」

「いくよ」

僕は、シャンプーのふたがしまっているかを確認してから放り投げた。山なりに飛んだシャンプーが竹垣の向こうの女湯へ消える。

「うわっ、すごい」

「遙がはしゃいでいる。」

「どうしたの？」

「やったー。ちゃんと捕ったわよ」

「ナイスキャッチ」

僕は笑った。

ふと視線を感じて振り返ると、いつのまにか湯につかっていた老人と目が合った。髪の毛のすっかり薄くなった彼は、ひょうきん스러운雰囲気を顔に漂わている。まるで狂言師のようだ。僕は、照れながらどうもと言って湯池に体を沈めた。

「これはこれは」

老人は、ユーモラスな笑顔を浮かべる。目尻に寄ったしわが人懐っこくて、素朴であたたかい人柄を感じさせる。東京ではあまり見

かけないけど、僕の田舎では似たような感じのおじいさんがいたものだった。人を信用するところから、他者との出会いをはじめるタイプのようだ。

「彼女といっしょにきたの？」

老人は両手ですくった湯を顔にかけ、気持ちよさそうに拭う。

「ええまあ」

「若い人はいいねえ。わしもばあさんときてるんだけど。やっぱり若いほうがいいなあ。女房と畳はなんとかってね。お兄さんはどこからきたの？」

「東京からです」

「そう。旅行かい」

「そうなんです。いい温泉ですね」

「ここはいいねえ。わしはこの近所に住んでいるもんだから、毎日きてるんだわ」

「いいですねえ。羨ましいですよ」

「いやまあ、湯治なのよ。ほら、ここに傷があるでしょう」

老人は、自分の右胸に残る手術の痕をなぞった。

「ご病気されたんですか」

「癌なのよ。肝臓にできちゃってね。医者に余命一年って言われたんだわ」

「たいへんですね」

その後をどう言えばいいのかわからない。だけど、老人はさばさばした表情でただ温泉を楽しんでいる。つらそうな様子も、悲しんでいる気配も見受けられない。

「まあね。しょうがないわね。歳をとれば、体がたがくるもんだわ。でもね、医者にそう言われてからもう五年も生きているんだよ。老人は、狂言の翁のように嬉しそうに笑った。

「治ったんですね」

「いやあ、治りはしないけどねえ。癌といっしょに生きてるのよ」
老人は、自分の病気について語り始めた。

「かみさんがうるさいもんだからさ、人間ドックへ入ったのよ。したら、見つかったのよ、癌が。あんなもんに行かなかったら、知らないままですんだのにねえ、まったく。それで総合病院へ行つて精密検査を受けたんだけど、手術して抗癌剤こうがんざいの治療を受ければだいたい余命一年ちよつと、うまくいったら数年生きられるかもしれないけど、なんにもしなかったら半年もつかもたないって言われちゃったのよ。

その検査の結果を聞いた時、もめちゃってねえ。えらいことになったのよ。かみさんのいところが内科の医者をやっていて、それでいっしょについてきてくれたんだけど、そいつが頑固なやつでさ、主治医と大喧嘩をおっぱじめちゃった。あいつは怒ってねえ。『馬鹿言うな。治りもしない手術や治療をやつてなにがあと一年だ。威張るんじゃない』って主治医の先生を怒鳴りつけるんだよ。

あいつに言わせたら、抗癌剤を使つたら死ぬのは当たり前だつてことなんだな。ほら、抗癌剤つて劇薬じゃない。副作用が激しいしねえ。癌細胞をやつつけてくれるかもしれないけど、正常な細胞まで破壊しちゃうわけよ。あいつは『抗癌剤なんて使つたら、逆に体を痛めつけてぼろぼろにして、命を縮めるだけだ。抗癌剤はぼつたくりの人殺しの毒でしかない。あんたは医療行為に名を借りて、患者の体を利用して抗癌剤のデータ収集とぼろ儲けを狙っているだけなんだ。製薬会社にいいように使われているだけなんだ。それがわからないのか。恥ずかしいと思わないのか』って、そこまで言うんだね。先生を犯罪者扱いよ。

先生はむつとしちゃって、患者を見捨てろつて言うのかつて怒り出す始末でさ、わしは立場がなかったねえ、ほんとに。お世話になっている主治医にそんなことを言われたら困るじゃない。参ったよ。とはいっても、あいつだつて悪いやつじゃないんだよ。むしろ、いやつだよな。子供の頃はいじめられた友達をしょつちゆうかばつてたし、今だつて医者のない山村をまわつて往診しているのよ。身寄りのないじいさんばあさんからは治療代も受け取らないしね。

飛驒の赤ひげ先生つてとこよ。

ふたりとも顔を真っ赤にしてさ、もめにもめて大激論。主治医の先生は、世界の医学界で認められたまともな手術と治療をするだけだつて主張するのよ。わしだつて先生の意見のほうか正しいつて思つたもん。ごくオーソドックスだしねえ。ところが、あいつはそれを認めないのよ。『あんたは製薬会社に洗脳されているだけだ。治せもしない高価な抗癌剤を使つていちばん喜ぶのは誰だ？ 製薬会社だろう。儲かつてしようがないから、笑いがとまらないだろうよでもな、そんなものを使われる患者の身にもなつてみる。病気は治らない。苦勞して稼いだお金はぼつたくられる。踏んだり蹴つたりじゃないか。治せもしないのは治療じゃない。あんたは医療の本質がわかつてない』つて譲らないわけさ。先生に言わせたら、あいつはでたらめをいうばかりよ。あいつにしてみれば、先生はペテン師よ。もう、しつちやかめつちやかよ」

老人は子供の頃の喧嘩でも思い出すようになってさかしそうに微笑み眉のあたりまで沈んだ。老人は、湯から顔を出していい湯だとつぶやく。

「それでどうなつたのですか？」

僕は訊いた。

「結局、手術して癌は切り取るけど、抗癌剤や放射線治療はいつさいしないつてことで話がついたのよ。先生は放置したら全身へ転移するつて言うし、わしだつて体のなかに癌のかたまりがあつたんじやあ、気持ち悪いものね」

「それだけで五年も元気にしていらつしやるんですか？」

以前、僕の親戚が癌にかつたのだけど、次から次へと転移して手術と抗癌剤治療を繰り返した。最後は管だらけの生ける屍になつてしまった。かわいそうだった。

「いやいや、手術だけじゃよくはならないわね。酒もたばこもきつぱりやめて、食餌療法しよくじをして漢方薬を飲んでいるのよ。あいつがそうしなさいつて言うからね。でも、正解だつたね。主治医の先生の

言うとおりにしてたら、とっくにお陀仏だもんな。同じ病室にいた癌の人たちは、病状の重い人が集まってたこともあるんだけど、みんな死んじゃった。わしより症状が軽かった人も、あの世へ逝ってしまっただ。みんな抗癌剤を使っていたからねえ。抗癌剤の副作用に耐えられずに死んじゃったのよ。あの人たちを殺したのは癌じゃない。じつは抗癌剤なのよ。生き残ったのは抗癌剤を使わなかったわし一人だけ。

癌細胞ってね、どんな人にもけっこうできちゃうものらしいんだよ。だけど、人間には免疫系ってやつがあつて、そいつが癌細胞をばくばく食べてくれるんだな。だから、おどかさわけじゃないけど、お兄さんの体にも何個かあるかもしれないのよ。心配しなくても大丈夫だよ。免疫系が冪とちり取りで掃除してくれるから。ところが、なんかの拍子で癌細胞が異常に増殖することがあつて、それがぱあつと広がる癌になっちゃうんだね。

それでわしみたになつたらどうしたらいいんだって話なんだけど、あいつは「人間には自然治癒力ってやつが本来備わっている。だからそれを引き出してやればいい。それこそが医療の本質だ」って言うんだ。医療の本質なんて言われても、こっちは素人なんだからちんぷんかんぷんだけどさ、でも、むずかしいことはなんにもないのよ。要するに、規則正しい生活をして、体にいいものを食べて、刺激物はできるだけ控えて体に悪いものは食べない。漢方薬で五臓六腑の調子を整えて、軽く運動して、温泉でリラックス。これだけよ。わけのわからない名前をついた高価な薬なんて、なんも要らないの。ただひたすら全身のバランスを整えるように心がけるだけ。そうしたら、癌が消えるわけじゃないけど、そこそこ大人しくしてくれるもんなのよ。副作用で苦しむこともないし、痛みもまったくないしねえ。だから、わしは癌といつしよに生きているのよ。もうこの歳だから、あと何年生きられるかわからないけど、死ぬまでいつしよ。うちのかみさんみたいなもんだ」

老人は愉快的な笑い声をあげた。それからいろいろ話をした。酒を

飲めないのがつらいところだけど、日常生活にはなんの差し障りもないし、囲碁のサークルへ入って隠居暮らしを楽しんでいるそうだ。老人はお先にと行って湯を出た。

僕は湯池の縁に腰かけ、老人がさつき話してくれたことを考えた。人間の体には自然治癒力が備わっているそうだけど、心にも同じようにそんな大いなる力があるのだろうか。

遥がいつも気にしている欲望は、言ってみれば癌細胞みたいなものだ。人間の心にはかならず欲望が芽生える。だけど、心の健康な人は心の免疫系がそれを摘み取ってくれる。遥がむりに欲望を抑えこもうとしたのは、抗癌剤を使おうとしたようなものなのかもしれない。それで欲望が小さくなったとしても、正常な心の細胞まで傷つけてしまう。それでは心がもつはずもない。

「遥の心の自然治癒力を引き出すようにしてあげればいいんだな。それが僕の仕事なんだ」

僕はひとりごちた。

「ゆうちゃん、いつまでつかってるの？」

遥が女湯から呼びかけてきた。

「ごめん、もう出ようか」

出る時は合図すると言っておいて、忘れていた。

道すがら、遥は道端に生えているすすきの穂を手折って髪に挿した。すすきの穂は楽しそうにゆらゆら揺れる。湯上りの頬は赤味がさして艶やかだった。僕たちは手を繋いで宿へ帰った。

部屋へ運んでもらった川魚のお膳をいただきながら、地酒の熱爛あつかんを飲んだ。塩焼きのヤマメと胡麻豆腐がおいしい。

ふだんの遥はお酒を飲まないし、居酒屋へ行ってもほんの付き合いい程度に口にするだけだけど、今晚は遥にしてはわりあいよく飲むさしつさされつするうち、僕はほろ酔い加減になった。遥の耳たぶが赤くなり、白いうなじまで真っ赤に染まる。

「はい、ゆうちゃん」

徳利を傾ける遥の手つきが妙に色っぽい。

お膳はさげて、お酒だけ残してもらった。仲居が布団を敷いてくれた。

部屋の灯りを消して、ガラス窓を閉めたまま障子だけ開けてみた。向かいの山に白い半月がかかっている。月がきれいに見えるから山月館なんだな、といまさらのことをぼんやり思った。しんと冷えた川のせせらぎが耳に心地良い。僕は遙の膝枕に頭をもたせかけた。

「ゆうちゃん、今日はありがとう」

遙はしんみり微笑む。

「なにが？」

「つかれたでしょ」

遙は僕の頭をなでた。

「ちよつとね」

「寝ちゃっていいのよ」

「眠くはないよ。いい気分なだけだから」

僕は目を瞬いた。月光が遙の顔を半分照らしている。きれいな切り絵のようだ。

「僕のかぐや姫」

「なにそれ？」

「遙のこと」

「中学生の時、なんだか遙は月からきたみたいだなんて思っていたんだ」

「ざんねん。地球生まれの地球育ちよ。お月さま育ちだったらいいんだけど。悲しいことだつて、そんなになかったかもしれないわね。でも、地球に生まれて、ゆうちゃんと出会えてよかった」

「僕もだよ」

「わたしのお母さんは、わたしの物心がついた頃からずっと、自分はまだだめだつて一日になんどもため息をつきながら繰り返していたの。それを聞いたたびに、わたしはいつもしよんぼりしてしまつたわ。悲しかった。そのうち、わたしもだめなんだつて思うようになった。悲しかったの。両親が離婚したとき、わたしの人生にいいこ

とはぜつたい起こらないって、そう思いこんでしまったわ。ほら、やっぱりだめだったじゃないって。もともとだめで、このさきもつとだめになるだけなんだって。神さまにお祈りして、神さまにすがって、そんな気持ちにじつと耐えていたのよ。

でも、中三の時、ゆうちゃんと出会って、すこし変わったわ。希望をもつてもいいのかなって思いはじめたの。聖書に『今泣いている人々は、幸いである。あなたがたは笑うようになる』って書いてあるんだけど、ほんとうかもしれないって信じはじめたわ。いろいろあつたけど、今は希望をもたなくちゃいけないんだってちよつと思ってる。そんなふうに思えるようになったのは、ゆうちゃんのおかげよ」

「自分のことをだめだなんて思ったらいけないよ。希望はいつでもすぐそばにあるんだよ。それに気づくか気づかないかだけなんだよ」
「わかつたわ。今の言葉をこころにきざんでおくわ」
遙はこつくりうなずく。

僕は、露天風呂で出会った老人のことを話した。

「そのおじいさんが言っていたんだよ。人間には知らない力がいっぱい眠っているから、自分の力を信じて生きることが大切なんだって。自然治癒力っていうのは生きようとする力だとも言ってたよ。ただ、知らないうちに自分でそれを邪魔してしまうから、おかしなことになるってしまうんだって。遙のなかにだつて生きようとする力があるんだから、心配しなくても大丈夫だよ。希望をもたなくちゃ」
「そうね。わたしはこんなふうにも思うの。ゆうちゃんがわたしの前に現れたとき、無意識だけど希望に気づいていたのかもしれないって」

「僕もそうなんだと思う。初めて遙と机を並べた時にね」

僕は、制服姿の遙をふと思い出した。あの日から、恋と、夢と、僕の人生そのものが始まったような、そんな気がする。僕の人生は、遙との出会いがすべてだ。

「ゆうちゃん、もう悪いことなんて起こらないわよね」

遥は僕の目をじっと見つめる。祈りを捧げるような、救いを求めるような、せつないまなざしだった。遥はこんなふうに、隣のお兄ちゃんに助けを求めるようにして、神さまにお祈りしていたのだろう。

「起こらないよ」

僕は手を伸ばし、遥の頬をやさしくさすった。

「ぜったい？」

「約束する」

これからどんどんよくなる。僕もそう信じたかった。未来は僕たちのものだ。

「遥、酔いは醒めた？」

「もう平気よ」

「こここの温泉に入ろうか。体を流そうよ」

「そうね」

遥は穏やかに微笑んだ。川のせせらぎがふと高まる。

僕たちは起き上がり、一階の奥にある大浴場へ行った。

影はどこまでも追いかけてくる

誰かが追いかけてくる。

僕は薄暗がり在必死で逃げた。

振り返っても誰も見えない。ただ、誰かの影だけが見える。そいつが執拗に僕を追ってくる。強盗なのか、通り魔なのか、それはわからない。だけど、僕を狙っている。それだけはわかる。

息が苦しい。

足がもつれる。

目の前のドアを開け、部屋へ飛びこんだ。

その部屋は、実家の居間だった。

その光景は、あの日だった。

母親と弟が取っ組み合いをしている。母親は学校へ行きなさいと叱りつけ、弟はなんで行かなくちやいけないだと叫んでいた。酔って赤ら顔になった父親はあぐらをかいたまま嫌そうに顔を背けている。

弟が母の足を蹴る。

母親が悲鳴をあげる。

父親はざまあみると皮肉に嗤った。

彼のゆがんだ表情を見た時、目の前の光景が急に遠ざかるような奇妙な感覚に襲われた。

ここにいたら、自分がだめになる。

風船の空気が抜けるように、心がしぼむ。すべてが擦りガラス越しに映る影絵だった。

居間の空気を満たしていたのは、家族の情愛の温かさでなく、相手を理解しようとする気持ちなどひとかけらもない憎悪と恣意だけだった。

母親は自分の都合の通りに弟を育てようとしていた。いや、世間の都合通りと言ったほうがいいだろうか。幼い頃から集団や規則に

なじめなかつた弟は理解してもらえない絶望感から苦しみを募らせ、自己とも他者とも、誰とも折り合いをつけることができずにいた。父親は父親で、母が苦しむ姿に暗い歓びを覚えていた。父親は、自分の配偶者を受け容れることもできなければ、家族がどういふものなのかすら、わかっていなかったから。彼にとつて、自分がもつた家庭はビールとつまみ付きのカプセルホテルのようなものだった。もしかしたら、自分の家族だという意識すらなかったのかもしれない。一つ屋根の下に暮らす人間がたがい苦しめあう家族地獄だった。

父親は、やはり手酌でビールを飲んでいる。酒に逃げるのが得意技だった。情けない人だと蔑んだ。失望しか覚えない。そんなふうにししか思えない自分もむなし。

僕は黙って背を向けた。

もうなにを言ってもむだなんだ。なににも変わらない。はつきり、そう悟った。

ここにいたら、自分がだめになるだけだ。

「ゆうちゃん」

目が覚めた。遙が僕を揺さぶっている。息が荒い。口が渴く。

「夢か」

僕はまわりを見渡した。ふたりの家だった。

「うなされていたわ」

「ひどい夢だったから」

またあの夢を見てしまった。僕が家を出ようと決めた日の光景だった。遙と暮らし始めてから見たことがなかったのに。

僕はコップの水を一気に飲み干して、ベッドへ戻った。

すぐに眠ろうとしたけど、言いようのないざわめきと重圧感が心でとぐるを巻いていて、寝付けそうになかった。目覚まし時計の針は二時を指していた。

僕は、横向きになって遙の体を抱いた。肌さみしかった。

「眠れないの？」

遥は、首だけ曲げてじつと僕の顔を覗きこむ。

「目が冴えちゃった」

僕は夢のことを話した。僕が浪人生の頃、その夢をしょっちゅう見ていたことは、遥も知っていた。

「ゆうちゃんも苦しいのね。夢はただの夢よ」

遥は体を僕のほうに向け、子供を寝かしつけるように僕の背中を軽くはたく。すこし気分が落ち着く。

「家のことはもういいんだよ。帰るつもりもないし」

あのできごとがあつた翌々日、僕は母の実家へ行き、祖父母といっしょに暮らした。浪人生活を送って東京へ出てくるまではしんどい思いもしたけど、今は遥とふたりで暮らすことだけを考えればいい。自分の明日を切り拓くために家を出たのだから。

飛驒の温泉から帰って二週間ばかりが過ぎていた。

完全に元通りとはいかないけど、遥の具合はかなりよくなった。

遥が思い悩んだ様子を見せたら、僕はすぐに声をかけた。気持ちを軽く持つてと言ってから、抱きしめてキスする。それだけで遥は持ち直してくれた。

すべての悲しみを潜り抜ければ着実で平凡な幸せの人生が見えてくると、今日読んだ本のなかに書いてあつた。すこしずつでいいから、そんなものが見えてくればいい。

「今日ね、ささちゃんからメールがきたの」

遥はささやくように言った。

「なんて？」

東京へ戻つてすぐ、僕たちはオカマさんを招待しようとしたんだけど、彼は仕事を立てこんでいるからそのうち連絡すると言っていたのだった。

「なかなか休みが取れないんだって。だから、遥ちゃんのお家で新年会をしましょうって書いてあつたわ。今月はむりだけど一月は絶対に行くからって」

「忙しいんだ」

「うん、お店の理容師さんが突然二人も辞めちゃったんだって。それで、ささちゃんはてんでこ舞いなよ」

「二人もいっぺんに？」

「そうらしいわ。ひとりは彼氏と大喧嘩して地元へ帰っちゃったんだって。前から暴力を受けていたらしいの。青あざをつくって出勤していたこともあったそうよ。それで、とうとう耐え切れなくなっただって」

「女の子を殴るのはよくないよ」

「彼氏が店まで追いかけてきて、たいへんだったみたい。ささちゃんがんばるとか追い返したんだけど、お客さんからも苦情を言われたりして」

「お店にいられなくなっただ。彼氏もそこまでしなくてもいいのにね」

僕は、オカマさんが必死になって女の子をかばっている姿を想像した。面倒見がよくてやさしい彼のことだから、同僚のために一生懸命、間に入ったのだろう。

いろんな愛の形がある。でも、殴ることが愛情の表現というのは、どうしても理解できない。愛情の裏返しなのだろうか？ それとも、彼女のほうに男を殴らせるなにかがあるのだろうか？

遙とそのことをすこし話してみた。遙は、おたがいの心のなかで死んだ愛情が腐っているのよと言った。それが響きあうと暴力という形をとって現れるのだと。

「それでもうひとりね、腕が動かなくなっただって」

「怪我でもしたの？」

「怪我というか、職業病ね。一日中、はさみをしゃきしゃき動かしているでしょ。それで、腕が麻痺してしまったのよ。手が震えてはさみを持ってないんだって。そんな理容師さんはけっこういるみたい」「きつい仕事なんだね」

「その人はお客さんに人気があつたし、指名もいっぱい取っていた

から、店長さんは腕の具合のいい日だけでも出られないかって引きとめたんだけど、彼はこれを機会にきつぱりへアデザイナーを辞めたいって言ったそうよ。調子が悪いのを隠してかなりむりしていたんだって。ささちゃんも気づいていたみたいだけど」

「麻痺する前に休んで治せばよかったのにね」

「センスがあつて仕事のできる人だから、そうするわけにはいかなかったのよ。お客さんだって待っているし、その人がいないとまわりが困るもの」

「仕事が集まりすぎて、どうにもならなくなつたんだ」

「プレッシャーにつぶされちゃつたのね」

遙の話を聞きながら、人生にはいろんなアクシデントがあるのだと思つた。僕も学校を卒業して世の中へ出れば、思いがけもしないことやままならないことにたくさん出くわすのだろう。暗い闇へ漕ぎ出すようで、ちよつと怖い気もする。でも、遙と暮らしていくためには、うまく泳ぎきらなければならない。希望はすぐそばにあるのだから、勇気を出していかないと。

「篠山さんが落ち着いたら、遊びにきてもらおうよ」

「そうしましょ」

遙はうなずいた。

「あと三週間でクリスマスだね。今年はなにしようか」

僕はふと言つた。

「ふつうでいいわ」

遙は、満ち足りたように瞳を輝かせる。

「ふつうって？」

「教会へ行つてお祈りして、それから家で食事を作つて、買ってきたケーキを食べるの」

「僕もそれでいいよ」

「オーブンが欲しいな。それがあつたら、わたしがケーキを焼くのに」

「バイト代が入ったら、電子レンジといっしょになつてるやつを買

おうか。コンパクトタイプの」

「それじゃ、つまらないわ。どうせなら、ガスオーブンで火力の強い方がいいな」

「それってけっこう大きいだろ」

「そうね。場所をとるわね」

「ここは、そんなオーブンを置くスペースなんてないしなあ。そのうち、ここより広いところへ引っ越したら買おうよ」

「わたしが買おうわ」

「どうして？ 半分ずつ出してふたりで買おうよ」

「使うのはわたしだけよ。ゆうちゃんは使い方がわからないでしょ」

「僕だって、なにかできると思うけど」

「なに？」

「焼き芋でもつくろうかな」

「さつまいもを焼くだけじゃない」

遥はくすくす笑った。

「ねえ遥、去年のクリスマスイブを覚えてる？」

「もちろんよ」

「ふたりで教会へ行ったよね」

「退屈じゃなかった？」

「面白かったよ。ミサってこんなふうにするんだってというのがわかったし、讚美歌もきれいだっし。パイプオルガンの響きっていいね」

「それから、ミサが終わってから、わたしはここへきたのよね」

「そうだったね」

あの日、遥は初めて僕の下宿へやってきた。今ふたりで住んでいるこのワンルームマンションだ。

「なにを料理したんだっけ」

「鶏肉のソテーだよ」

「思い出したわ。そういえば、ゆうちゃんが鶏肉がいいって言ったのよね」

「カニかまぼこ入りのマカロニサラダも」

「今年は何にがいいかしら？」

「やっぱり、鶏肉がいいかな。モモ肉の照り焼きはどう？」

「それを作ろうと思ったらオープンがいるわ。できあいのを買ってくるしかないわね」

「それはつまらないな。ほかのにしようよ」

「手作りがいい？」

「決まってるよ。なにがいいか考えておくね」

遥は答えない。もう軽い寝息を立てていた。僕は掛け布団を引っ張りあげ、遥の肩が隠れるように整えた。

去年のクリスマススイブはふたりともはしゃぎ通しだった。

遥の手料理を食べてから、小さなデコレーションケーキに蝋燭を立てて火を点した。電灯を消すと、二十本の祝福がきれいに浮かんだ。遥は十字を切り、胸の前で手を組んでお祈りの文句を唱える。

僕も教えてもらって、もう一度いっしょに唱えた。灯火は、喜びがそこに宿ったかのようにゆらめく。たしかに、僕たちを祝ってくれていた。ふたりはいっしょに吹き消した。

遥が嬉しそうに手を叩く。

僕は遥を抱きしめ、頬に口づけた。

ふっと、ふたりの体が震える。僕たちは、思わず大きく息を吸いこんだ。あこがれと不安と恥ずかしさがなймаぜになって、照れ笑いしてしまう。もう一度きつく抱きしめた。遥の心臓の鼓動が聞こえるようだった。僕と遥の心がひとつに溶けあうような、そんな気がした。

「今日は、ずっといっしょにいようね」

僕はささやいた。実を言えば、前の日から何回もその台詞を練習した。

「わたしも、ゆうちゃんとずっといたいわ」

遥は、瞳を閉じたまま小声で答えた。

どれくらいそのまま抱きしめあっていただろう。なにもかも忘れ

て、無重力の宇宙を漂うような心地良さがあつた。遙は、すべてを僕にゆだねてくれた。

僕も遙もはじめてだった。

遙の肌の熱とやわらかい吐息が僕をつつむ。

ぎこちないけど、混じりけのない愛だった。

いちばん素敵 な夜だった。

遙は朝早く出かけていった。一時限目の授業があつた。

僕の授業は昼からなので、朝はゆっくり過ごした。

朝食の洗い物を片付けて、録音しておいたNHKラジオ講座の英会話入門を一週間分まとめて聞き返した。スピーカーから流れるフレーズを繰り返しながら、ふとゆうべ見た悪夢を思い出したりしたけど、すぐに頭から追い払った。考えたくもなかったし、過ぎ去ったことをいつまで引きずっていても、ろくなことはないから。

英会話入門の復習が終わったところで、大学の図書館で借りたユング心理学関係の本を開いた。河合隼雄の『影の現象学』だ。人間の心がどうなっているのか、知りたかった。

チャイムが鳴った。

僕は本にしおりを挟んで机を離れ、ドアの覗き穴を見た。

グレーの背広を着たサラリーマン風の中年男が魚眼レンズに映っている。

前に一度、似たような背格好をしたこのマンションの不動産管理会社の社員が現れたことがあつたので、管理会社がなんの用だろうと思いつつ、インターホンを取った。

「天草遙はいる？」

中年男の声はいくぶんうわずっていた。

「どちらさまでしょうか」

「いったい、君は誰なんだ？」

彼は僕をなじる。

「誰はないでしょう。どちらさまか、言っただけませんか」

男の物言いかちんときた僕は、冷たく言い返した。男は一瞬押し黙り、口を開いた。

「天草遙の父親だ」

招かざる来訪者だった。よりによって、こんな時に。崩れかけていた遙の心がようやく持ち直してきたばかりだというのに。とんでもないことになってしまった。暗い底なし沼へ引きずりこまれるような気がして、僕は首を振った。どうしたものかと考えあぐねた。

遙を守りたい

肚を決めた僕は、携帯電話を握り締めながらドアを開けた。ただし、チエーンはつけたまま。相手がどう出るのかを見たかった。もし、足をドアの隙間に入れてくるよう真似をするなら、すぐに警察を呼ぶつもりでいた。

遙の父は、ハイボールの似合いそうな渋い中年男だった。碁盤のようにしっかりとあごの張った四角い顔に小さく整った端正な鼻をしている。鼻筋は遙にそっくりだ。すらりと背が高く、歳相応の貫禄はついているけど肥っているというわけでもない。ポマードでなでつけた髪を七三分け、縁なし眼鏡をかけていた。小さな目の眼光は鋭い。頭の切れそうなインテリ・サラリーマンといった風情だ。

「なんの御用ですか」

僕が素っ気なく訊くと、
「御用って、君」

と、中年男は途惑い気味に咳払いする。

「ここは天草遙の部屋かね」
「そうです」

「遙に会いたい。遙を出してくれ」

「外出しています。いたとしても会わせられません」

「君はいつたいなんなんだ」

「遙の彼氏です。いっしょに暮らしています」

「同棲か」

男は顔を背けたまま苦虫を噛み潰し、横目でぎろりと睨む。

「遙はいつ帰ってくるんだ」

「知りません」

「開けなさい。遙が帰ってくるまでなかで待つ」

「あなたを部屋へ入れるわけにはいきませんよ」

「私は遙の父親なんだがね」

「他人です。残念ですが、親権はないですよ。離婚された時に失った。違いますか？」

僕の問いかけに遥の父親は押し黙った。彼のいらついた仕草がうっとうしい。

「私の意図をきちんと把握してほしいものだな」

男は居直る。僕は許さない。

「意図というより、わがままといったほうがいいんじゃないでしょうか。あなたの言うとおりにしなくちゃいけない義理も道理もありません」

「もちろん君は他人だが」

遥の父親の横顔には困惑と傲岸さが浮かんでいる。それから、弱みを見せまいとする虚勢も。目の色には、自分の意のままにならないことへの憤りと相手をねじ伏せたいという動物そのものの獰猛さが浮かんでいた。嘘喝きよかつで凝り固まった人だった。

「外で話しませんか？ きちんと言っておきたいことがありますから」

僕は男を誘った。

「話？ わかった。そうしよう」

彼はしぶしぶうなずき、また嫌そうに顔を背けた。

国道沿いの喫茶店まで黙ったまま歩いた。遥の父親は根掘り葉掘り尋ねたがっていたけど、僕は着いてから話をしましょうと言っておりあわなかった。

歩きながら何度も拳を握り締めた。

こみあげてくる怒りを何度も抑えた。

僕の大切な遥を不幸にしたのは、ほかならない彼だ。先入観で人を判断するのはやめようと心がけているつもりだけど、彼にだけはどうしてもできない。遥の父親というよりも、遥を傷つけたるくでもない男だと、そんなふうにしか思えない。もし遥の家が普通の家庭だったら、娘の彼氏にいきなり出くわした父親の途惑いを理解しようとしたらうし、彼と仲良くしようとしたのだろうけど。

喫茶店のガラステーブルの挟んで彼と向かい合った。市販のレトルトカレーを電子レンジで温めてそのまま出すような、なんの工夫もない安っぽい店だ。椅子のクッションはすり減って硬い。色あせた無機質な内装のなかで、水着姿のキャンペーンガールを写したビールのポスターだけが新しくかった。

「ところで、どうやって僕たちの住所を知ったのですか？」

僕は彼の目を見据え、切り出した。遥の父はうるんそうに僕を見て目をそらし、

「君は知らなくていい」

と、木で鼻をくくつたように言う。

「それを言っていただけなのなら、僕はなにも話しません」

「それより、君が名乗るのが先だろう」

「では、帰らせていただきます」

僕は腰を浮かした。

「わかった。話せばいいんだろ。遥の通っている大学に伝つてがあつて、それで調べてもらったんだ」

「それって犯罪ですよね。個人情報保護法で他人に明かしてはいけないはずじゃないんですか？」

「だから君は知らなくていいと言った」

「まあ、いいですよ」

僕は椅子に腰かけた。

「瀬戸佑弥と申します。遥とは中三の時から付き合いです。恋人になったのは一年ほど前ですけど。あなたのことは遥からいろいろ聞いています」

「遥、遥って、気安く呼ばれちゃ困るね。よそ様の家の子供にはさんづけで呼ぶのが礼儀だろう、君」

男は貧乏ゆすりを始めた。僕は目障りなその足をじつと見たけど、彼は気づかない。

「もう一度言いますけど、あなたに親権はありません。他人です。遥もあなたを父親だとは思っていません。遥が高校へ上がる時、あ

あなたは遙を取り戻しに行つて拒絶されたそうですね」

僕がそう言うと、男はひりつくように顔をしかめた。プライドを傷つけられたようだ。こんなことを初対面の人間に言われたら、誰でも腹を立てるだろう。けれど、彼の表情にはひとかけらの後悔や娘に対してすまないという気持ちも現れていなかった。自分の体面がすべてなんだ。僕はそう感じた。

「君は知らないかもしれないが、私は約束通り、遙が二十歳になるまで毎月養育費を支払った。ひと月も遅れることなく、きちんのだ」
「お金の問題じゃないですよね」

「そうとも。金の問題じゃない。誠意の問題だ。私は誠意を見せた。だから、遙には帰ってきてほしい」

男は金の問題ではなく誠意の問題だというけど、どうも混同しているようだ。お金を払うのが誠意のすべてだと勘違いしている。まるでお金さえ払えば自分の娘が帰ってくるかのように。僕がお金の問題じゃないと言った時に聞きたかったのはほかの言葉だった。

「離婚協議書で約束したことは反故ほしにして、あくまでも取り戻したいということですか」僕は訊いた。

「遙は私の娘だ」
「他人です。どうしてそんなにこだわるんですか？ 遙は嫌がつているのに」

「血は水よりも濃いと言ってね。親子の絆は簡単に断ち切れるものじゃない」

「遙はあなたを忘れたがつています。あなたが遙のお母さんをいじめたのが、トラウマになっているんですよ」

「あんなやつがなんだ」
男は吐き捨てた。

「私は遙の母親とは性格が合わなかったんだよ」

「合わせようとしたのですか？ 理解しようとしたのですか？」

「君にそんなことを言われる筋合いなどない。夫婦のことなど、君の歳ではわからんさ。惚れたの腫れたのって言うだけなんだ

「からな」

「失礼ですね。そんなことはありません。僕は、遥のことは誰よりも知っているつもりです」

僕は遥の状況を説明した。

遥は自分を責めすぎて悩み苦しんだ状態からようやく立ち直りかけたところなので、あなたに現れてもらっては迷惑だとはつきり告げた。男は、またプライドを傷つけられたような顔をしたけど、僕はかまわなかった。彼の幼稚でゆがんだプライドなど、知ったことじゃない。悲しみを乗り越えて生きようとする遥を守るほうがよっぽど大切だ。

「あんな鬱病の母親といっしょにいたからそうなるんだ。鬱がうつったんだ」

「どうして遥のお母さんのせいにするんですか？ 遥のお母さんを鬱病にしたのは、あなたですよ。あなたが遥のお母さんをいびりまわして人格を破壊するような真似をするから、そうなったのですよ。わかっているんですか」

「君には関係ない」

「遥の問題は、僕の問題です」

「娘のことをそこまで考えてくれるのはうれしいがね。君は遥の代理人というわけか」

男は唇を皮肉に曲げた。

「言っておくが、鬱病になったのはあいつ自身の問題じゃないか。私にはなんにも関係ない。離婚した時、あいつはまだ病気じゃなかった」

「言い逃れですね。遥の幼い頃から、遥のお母さんはいつも死にたいて口走っていたそうですよ」

「記憶がないな」

男の視線が一瞬、宙に浮いた。嘘をついている。

「また言い逃れですね。どうして、ほんとうのことを話してくれないんですか？」

「どうして君はそう喧嘩腰なんだ？」

「あなたが喧嘩腰だからです。あなたは信用できません」

「もともと信用しようなんて気はないじゃないか。誰も私のことをわかってくれようとはしないんだ」

男は声を荒げる。

「それはどうでもいいんですけど」

僕は冷たく受け流した。ほんとうにどうでもよかった。遥のことがだけが心配だった。

「僕はずっと遥を支えてきました」

「面倒くさいなら、ほかの女性を探せばいいだろう。いくらでもいいじゃないか」

「そんなことは一言も言っていないません。これからもずっと遥を支えるつもりです。でも、あなたに邪魔されたんじゃない、遥は元気になれないんです。そつとしておいてあげてくれませんか。そのほうが遥のためなんですよ」

「君ではらちがあかない。遥に会わせろ」

「それはできません。どうしても言うのなら、警察を呼びます。

あなたの会社にも電話します」

「けつこう汚い手を使うんだな。おぼこい顔をしてさ」

遥の父親はいらだたしそうにテーブルをこつこつ叩き、蔑んだ目で僕を睨む。だけど、その目は本心から蔑んでいるのではなかった。自分自身が後ろめたいことをした時に、相手が悪いと言ったための戦術だ。そうしたほうが、相手にダメージを与えられるからという計算でしかない。なにも信じていない人間特有の狡猾な目つきだった。「大学に裏から手をまわして、僕たちの住所を手に入れたのは誰でしょう？ 遥のためだったら、僕はなんでもします」

「私だつてそうだ」

「でしたら、遥には会わないでください。もし遥があなたと会う気になったら、会えるでしょうから」

「それはいつなんだ。私はいつまで待たされるんだ」

「わかりません。遙がその気になるかも知れませんが、一生ないかもしれません」

「離婚してあの子に悲しい思いをさせてしまったのは悪かったと思っ
ている。だが、私はもう十分に償った。どうしてわかってくれな
いんだ」

「あなたを許すかどうかは、遙が決めることでしょう。どうして、
自分のことしか言わないんですか。僕は不思議です。娘がかわい
いって言いながら、結局、いちばんかわいいのはあなた自身なんじや
ないですか」

「誰だつてそうだろう」

「そんな理由で正当化できることはありません。遙は幼い時に心
の痛手を負って、今でもそれと闘っているんです。その姿を間近で
見ていないからご存知ないかもしれませんが、トラウマの元凶が
目の前に現れたらどうなるか、見当がつくでしょう」

「ずいぶん言い方だな」

「何度同じことを言えばいいんですか。あなたが遙のお母さんを罵
倒したからです。幼い頃の遙はそれを見て、いつも怖くて震えてい
たんですよ。あなたが怖くてしかたないんです。あなたは取り返し
のつかないことをしてしまっただけです」

「遙を手放したのは間違いだつた。ばかみたいにお人好しで、世間
知らずで、頭のおかしいあんなやつと一緒に暮して、さぞ苦労した
ことだろう。あいつの母親もいけすかないばあだからな。だから
償った。養育費だつて払った。遙に嫌われるのが耐えられない」

男はどんとテーブルを叩いた。異様なくらいの音が響く。コーヒ
ーが飛び跳ね、焦げ茶色の滴がテーブルに散らばった。

「私は自分の家族を取り戻したい。ただそれだけなんだ」

遙の父は肩を震わせる。

「自分のために遙を利用するだなんて、あんまりですよ。すこしは
遙のことも考えてあげてください」

「どうして遙はそんなに私を嫌うんだ。あの子に母親にいろいろ吹

きこまれたんだろう。自分の母親を信じているのかもしれないが、あいつはなにもわかつちやいないやつなんだ」

遥の父は、僕の話の話を聞かずに激高しだした。このエゴイズムの塊のような性格が遥の母親と遥を追いつめたのだろう。会社のなかではそれで通用するのかもしれないけど、そのやり方を家族に応用したのでは、家庭が壊れるに決まっている。僕は冷ややかに彼を見た。「なんでもする。土下座でもなんでもする。殴って気が済むのなら、殴ってくれて結構だ。遥にそう言ってくれ」

「だから、もう取り返しがつかないんですよ。あとは、あなたがその事実を受け容れるかどうかの問題なんです。覆水盆に返らずって言いますよね。そういうことなんですよ。とりあえず、落ち着いてください」

「あの子の母親と離婚した後、私は会社でずいぶんつらい思いをした。針の筵に坐るようだった。いろいろ陰口を言われたものだよ。そのせいで出世だって遅れた。だが、養育費を支払わなければならぬ。あの子の姉さんだって育てなくちゃいけない。だから、仕事を続けた。私はこれまで努力してきたんだ。どうしてそれを認めてくれないんだ」

「あなたが相手を認めようとしなかったからです。とりわけ、遥のお母さんを。だから、あなたはその報いを受けているだけなんだと思いますよ。いちばんの問題は、さっきも言いましたけど、あなたは自分のことしか言わないことです。はっきり言って、傲慢だと思います」

「たしかに、私はプライドが高いと言われる。だが、そんなことは君には言われたくない。赤の他人なんだからな」

「そうですね。赤の他人ですよ。これからもずっと他人です。遥とあなたとの間柄も」

僕は、自分でも嫌なことを言っていると自覚していた。こんなことを僕に言わせた彼を憎んでもいた。でも、遥を守るためだ。遥のためだったら、なんでも言う。言わなくちゃいけないことは、きち

んと言っ。

「とにかく、遙の前には現れないでください。きっと、遙はパニックになります。またひどく落ちこんでどうしようもならなくなってしまうのは目に見えていますから。この間は、友人が助けてくれたこともあってなんとか持ち直しましたけど、今度そうなたらどうなるかわかりません」

「もういいっ」

遙の父は席を蹴り、

「話をするというから、私のことを聞いてくれるのかと思ったのにと、捨て台詞を吐いてそのまま喫茶店を出て行った。

僕は彼の後ろ姿を見送り、水に濡れた伝票を持ってレジへ立った。「悪いことはもう起きないって遙に約束したんだけどな」

僕はつぶやいた。

喫茶店の店主は不機嫌そうな顔で僕を見る。遙の父が大声を出していたので腹を立てているようだ。

「なんでもないです」

さすがに遙の父親のかわりに謝る気にはなれず、僕は首を振った。二人分のコーヒー代を支払ってさっさと店を出た。

銀色の雨を見つめていた君

帰ってからすぐ、ユニットバスへ入ってシャワーを浴びた。

まるでどす黒い廃油を頭からかぶったようで、どうにも気持ち悪い。肌がぬめる。心までがべとつく。

この感覚はいつたいなんなのだろう。

遥の父親と激しいやりとりをして嫌なことをずいぶん口にしたから、その自己嫌悪もあった。遥を守るために必死だったし、いくらそうするのが遥のためだとわかっていても、家族関係を断ち切ってしまうのは、やはり胸の奥が疼く。だけど、そればかりでもない。

考えあぐねているうちに、遥が時々口にする「死んだ愛情が腐っているのよ」という言葉を想い起こした。穢されたような気がするのは、きつと、あの男の心のなかで腐敗してしまったものが、言葉になって僕の心へ流れこんだからだろう。彼の腐った心に触れて、僕の心までが腐り始めたのだ。ちょうど、木箱のなかの腐ったりんごがほかのりんごもだめにしてしまうように。

強欲と傲慢に心に乗っ取られた人間は始末が悪い。それを自分自身で自覚していなければなおさらだ。心が化膿して、膿だらけになっってしまったようなものだから。

遥が自分の欲望を抑えようとあれほどまでにこだわるのは、きつと自分の父親を反面教師としたからだろう。あの男の驕慢きょうまんがどれだけ家族を損なったのか骨身にしみてわかっているから、自分の強欲さに対しても過敏になってしまったのに違いはない。

僕は全身にせっけんを塗りたくり、体のすみずみまで力をこめて垢すりタオルでこすった。穢れをすべて落としかかった。

バスタブをざっと流して栓をした。シャワーを壁にかけ、バスタブの底で三角坐りしながら熱い湯を浴びた。

シャワーの音が雨のように響く。

バスタブにすこしずつ湯がたまる。

その音が呼び水になって、中三の頃のなんでもない日の光景が脳裡に甦った。

たしか、秋の長雨が続いてきた頃だった。教師たちは、夏休み前までは部活さえしつかりやっていればいいという態度だったけど、いざ引退試合を終えてクラブの運営を後輩たちへ譲り渡すと、今度は掌を返したように成績のことばかり言い始めた。進路相談や受験勉強で忙しい日々を送っていた。

なにかの用事で帰るのが遅くなった。がらんとした放課後の下足室に、遙がぼつんと立っている。外は銀色の雨が降っていた。雨を眺める遙のうなじが白い。

「天草」

僕が呼びかけると、遙はぼんやり振り返る。制服の肩がさびしそうだった。

「どうしたの？ 傘は？」

遙は黙って首を振るだけだ。

「僕の傘に入りなよ。送っていくよ」

僕は遙を元気づけようと思ってわざと明るく言ったのだけど、遙はなにも言わずに瞳を翳かげらせる。

「なにかあったの？」

「なんでもないわ。 いっしょに傘を差したら、瀬戸君はまたかわられるわよ」

「べつにそんなのかまわないよ。言わせておけばいいんだから」

僕は遙を見つめた。遙はずっと雨を見ている。

ひとりぼっちなんだ。

胸が締めつけられるようで、目頭が熱くなった。遙の孤独が痛いほど心にしみた。それが僕の心のなかで魔法の森の調べのように透き通った和音を奏でる。さみしいのは僕も同じだった。

遙の孤独を抱きとめてあげたい。

震えるような想いでそう願った。

あの時、相合傘をしていっしょに帰ったような気がするけど、よ

く覚えていない。ただ、降りしきる雨を見つめる遥の横顔だけが、心のアルバムに焼きついている。

僕はシャワーをとめた。

熱い湯にじっとつかりながら、遥を想った。

昼からふたコマぶんの授業を受けて、サークルの部屋にも寄らずにさっさと帰ってきた。遥の父親がマンションの近くで張りこんでいるのではないかと疑って近所を探してみたけど、彼の姿は見当たらない。僕はほっと息をつき、ワンルームマンションの狭い階段をのぼった。

「おかえりなさい」

遥は、ドアのすぐそばにある流し台に立っていた。ペンギンのエプロンをつけて、にんじんを切っている。換気扇のファンが鈍くうなり、玉葱の匂いがかすかに漂っていた。

「ただいま」

僕は遥の顔色をうかがった。

「どうしたの？」

遥は不思議そうに首を傾げる。

「な、なんでも」

僕は、首を振ってスニーカーを脱いだ。

「今日はカレーにするから」

「わかった」

「ゆうちゃん、なんかへんよ」

「ほんとになんでもないんだよ。手伝おうか？」

「いいわよ」

遥はプラスチックの薄いまな板を持ち上げて、切り終えたにんじんをボールへ移す。僕は遥の後ろを忍び足でそっと通って部屋へ入り、テレビをつけてその前に坐った。

彼女の父親がきたことを話そうかどうか、まだ迷っていた。授業も上の空で、帰り道もそればかり考えていた。

あの男の言い分を突っぱねられるだけ突っぱねてどうにか追い払うことができたけど、あれですんなり引き下がるかどうかはわからない。遙の話で聞いていたとおり、彼はすべて自分の思うようにしないと気の済まない性格だ。背広を着ていたから、出張で東京まで出てきたのだろうか。またやってくるかもしれない。

今日は、遙がいなくて不幸中の幸いだった。彼がきたことを言えば、遙は傷つくに決まっている。ようやく元気になってくれたばかりなのに、負担をかけるようなことは言いたくなかった。でも、もし彼がもう一度現れるのだとしたら、今ほんとうのことを言って、心の準備をしておいたほうがいい。たとえつらくても、いきなり父親が目の前に現れるよりは、ショックもやわらぐはずだから。どちらが、遙のためになるのだろうか。

じゅつとカレー肉が爆ぜる。遙はみじん切りにした玉葱を手際よく鍋へ放りこみ、にんじんとじゃがいもを炒めてから鍋に水を入れてぐつぐつ煮込む。遙は手を休めることなくレタスを洗った。野菜サラダも作るようだ。

炊飯器から湯気があがる。遙はS&Bのルーを割り、おたまで溶かす。僕は、折り畳みのちゃぶ台を広げて布巾で拭いた。

「いただきます」

僕たちは手を合わせて食べ始めた。

やっぱり、ほんとうのことを言っておいたほうがいいんだろ
うな。

スプーンでカレーライスをすくいながら、なんとなく思った。

「ゆうちゃん、たまごは？」

「あ、そうだね。遙は？」

「わたしはいらないわ」

僕は、カレーに生卵をかけるのが好きだった。冷蔵庫から一つ取ってカレーへ落とすと、黄身と白身がカレーライスのうえを滑り落ちて皿の端からこぼれそうになる。僕は慌ててスプーンでかきまぜた。カレーライスの真ん中に穴を掘っておくのを忘れていた。

「ゆづちゃん、ほんとうにどうしたの？ ぼんやりしちゃって、元気がないわよ」

「ちよっとね。いきなり先生にレポートを出せって言われてさ、どうしようかなって考えているんだよ」

僕はとっさに嘘をついた。

「そうなの。急に言われても困るわね」

遥は、なんとなく納得したような面持ちだった。

ふたりとも黙ったまま食べた。僕はいつものように遥の作ったカレーライスをお替りした。

遥が洗い物を終えた後、いつしよにお茶を飲んだ。遥は、今日授業で習ったことや街角で見かけたことをとりとめもなく話す。僕は、遥の話が途切れたら切り出そうとタイミングを計っていた。

突然、チャイムが鳴る。

思わずどきりとする。

遥がインターフォンへ出ようしたのをとめて、僕が受話器を取った。

あの男かと思つて身構えたのだけど、相手は宅配便だった。僕は胸をなでおろした。

僕の祖父が小包を送ってくれた。

ダンボールを開けると、箱一杯にみかんがつまっていた。蓋の裏側に白い封書が貼り付けてあったので封を切った。祖父の直筆の手紙だった。学業に励むように、それから、正月に帰ってくるのを楽しみにしていると万年筆で書いてある。あたたかい励みだった。

「いい香りね」

遥は、みかんを鼻先にあてて匂いをかぐ。

「おいしそうだね。食べきれるかな」

僕は、掴んだみかんをボール遊びでもするように手の甲に乗せ、

「ねえ、遥」

と、遥の父親のことを話そうとした。

「ゆづちゃん、今度の週末に教会のボランティアで施設へ行くんだ

けど、すこし持っていておすそわけしてあげていいかな」

遥は楽しそうに肩を揺らし、少女のようにくすくす笑う。

「いいよ。子供たちも喜んでくれるだろうね」

「ありがとう。いっしょに食べながら絵本でも読んであげようかしら」

遥は、さつそくみかんをむき始めた。遥の嬉しげな姿を見て、切り出せなくなってしまった。

「ちょっと、コンビニで立ち読みしてくるよ」

僕は遥に言って部屋を出た。外の空気を吸って、気持ちを入れ換えたかった。

セブンイレブンで週刊誌やコミック雑誌をばらばらめくってみたけど、あのことが気懸かりで落ち着かない。お菓子の棚をぶらぶら眺めると、新発売になったという油で揚げないポテトチップスが目に留まったので一袋買ってみた。金色のゴージャスなパッケージだ。ノンフライだから太らないと書いてある。目新しいものでも口にすれば、気分転換になるかもしれない。

帰り道、ふと思立ってオカマさんに電話した。彼ならどう考えるのだろう。意見を聞いてみたかった。だけど、オカマさんの携帯電話は話し中で通じない。道端で立ったまま五分ほど待ってかけ直してみたのだけど、やはり話し中だった。メールを打とうかとも考えたけど、あきらめて帰ることにした。

街灯のともった住宅街の道を歩く。なんとなくあやふやで頼りない気分だ。中学校の下足室で銀色の雨を見つめていた遥の姿がまた脳裏に浮かぶ。

これまでずっと、僕は遥の孤独を抱きしめようとしてきた。

遥は僕の想いに応え、幸せになろうとがんばってくれた。現実と向かい合い、自分と向かい合い、神さまと向かい合い、なんとか折り合いをつけようと努力してくれた。もちろん、大切なことは忘れずに。

ほんとうのことを言おう。

ようやく、きちんと決心がついた。

現実を見つめなければ、なにもはじまらない。遥が落ちこんだとしても、僕が支えてあげればいい。遥になにがあっても、僕はそばにいるのだから。遥のことが心配だと言いながら、逃げていたのは、実は僕なのかもしれない。

近道の路地を抜けて、児童公園のそばを通りかかった。ブランコとジャングルジムとシーソーがあるだけの小さな公園だ。横目で公園を見た僕は、ふとなにかがひっかかった。

僕は足をとめ、水銀灯に照らされた公園を見渡した。

コートを羽織った中年男がベンチに坐っている。その背格好は遥の父親によく似ていた。

あなたが変わらなければ、なにも変わらない

僕は公園へ足を踏み入れた。

遠くで犬が吠えている。

ベンチへ近づいて人影を確かめると、やはり遥の父親だった。彼はかがみこむようにして足元の砂を見つめ、いらだたしげに貧乏ゆすりをしている。

「まだいたんですか」

僕は声をかけた。

「また会ったね。瀬戸君だったかな」

男は顔を上げ、作り笑いを浮かべた。まったくなじめない下卑た笑顔だった。相手の大切なものを掠め取って自分の欲求を満足させたいと顔に書いてある。ほかの人間にはそんな愛想笑いが通じるのかもしれないけど、僕には通じない。通じさせない。

「遥のことはあきらめてください」僕は言った。

「さつき君たちのマンションまで行ったら、ちょうど宅配便がいてね、ドアの陰に君の姿が見えたから引き返してきたんだ。君を説得しないことには、遥と話もできないからね」

顔は尻尾を振る犬のように笑っているけど、目は底冷えのする擦り切れたまなざしだった。

「僕たちの家へきてもらっては困ります。それに、説得なんてむだですよ」

「私を切り捨てないでほしいな」

彼は、憐れみを誘うように首をすくめる。どこまでも計算高い男だ。人をなめてかかるにもほどがある。

「あなたが遥のお母さんを切り捨てたことがすべての原因ですよ」

「あの子が母親といっしょに暮したがって、家庭裁判所もそれを認めてしまったんだよ。遥の母親に子供の養育能力がないことをいくら言っても理解してもらえなかった。遥を取られてしまった」

男は都合の悪いところには触れず、自分の言い分だけを言った。

「遙は自分のお母さんを支えてあげたかったんだと思いますよ。遙の話を聞いているとそんな気がします。子供心にかわいそうだと思っ
ていたんですよ」

「なにがかわいそうだ」

男は顔をゆがめて吐き捨た。僕はなにも答えず、冷やかに彼を見下ろした。思わず本性を表に出した男はしくじったという表情を浮かべ、また見え透いた愛想笑いを作った。それが大人の流儀だとも言いたげに。愛想さえ振りまけば、自分の本心を包み隠せると勘違いして。

「君、坐つたらどうだ。立っていられると、どうも話しくくてね」
「このままでいいです」

僕は男の誘いを断った。相手のペースに乗せられるのはごめんだ。僕は僕のペースで話したかった。

「頼む」

突然、男はベンチを降り、

「この通りだ。遙に会わせてくれ」

と、地面に額をこすりつける。

「やめてください」

これも計算のうちだとわかっているから、土下座をされてもなんとも思わなかった。僕は動揺しない。僕がぐらついたら、遙を守れない。

「私と二人つきりで会うのが嫌だと遙が言うのなら、君が立ち会って
てくれてもいい」

「立ってください」

「私は遙を取り戻したい。どうか、力になってくれ」

「そんなことはできません。今朝、お話したとおりです」

「君が遙に引き会わせてくれるというのなら、君たちの同棲は認め
よう」

「なにを言っているのですか。あなたに認めてもらう必要なんてど

「ここにもありませんよ。あなたは他人です」

「他人なら他人でかまわない。君が遥と私の間を取り持ってくれたら、君たちのことは全面的にバックアップさせてもらう」

「なんですか、それ」

「遥に仕送りもする。君たちだって助かるだろう。君たちの面倒は見させてもらう」

「いりません。僕たちはふたりできちんと暮しています。いちばん困るのは、あなたに出でこられることです。遥が傷つきます」

「私も遥のことはずっと心配している。一日だって忘れたことはない。だから、こうして君にお願いしているんだ」

「心配するというのなら、遥をそっとしておいてあげてください」「私はもう一度お父さんと呼んで欲しい。父親として認めて欲しいんだ。遥に拒絶されたのでは、人間として失格したと言われているようでつらい」

「失格したんですよ」

僕ははつきり言った。遥の父親はきつとまなじりをつりあげて僕を睨み、

「これだけ頼んでもわかってくれないのか。人としてどうかと思うがね」

と言いながら立ち上がった。スラックスについた砂を払ってベンチに坐り直す。彼は、憤りをこらえきれないように鼻を鳴らした。

「人としてどうかと思うのは、あなたのほうだと思いますよ。取引をして僕を抱きこもうとしたでしょう」

僕は呆れてしまった。彼の理屈では、自分の言うことを聞いてくれない人間はみんな人でなしということになってしまう。

「そのどどこが悪いんだ」

「問題は、あなたが遥のことをこれっぽちも考えていないことです。だから、遥を理解しようとせずに、目先の取引に走るんですよ。遥は変わるうとしています。つらいことを乗り越えて強く生きようとしています。自分と戦っているんですよ。昔の話を蒸し返されて足

を引つ張られたら、どうにもならないじゃないですか」

「足を引つ張っているのは君のほうだろう」

男は嫌そうに顔を背ける。

「どうしてですか」

「嫁入り前の娘をたぶらしかして、いっしょに暮しているじゃないか」

「たぶらかしてなんかいません」

「しかし、君の歳で同棲するだなんて、どうかしていると思うがね」

「どうかしているのはあなたのほうですよ」

「私はモラルの問題を言っているんだ。規則を守れない人間が社会へ出て通用すると思っっているのかね」

「同棲してはいけないなんてルールはどこにもありません」

「世間の目というものがあるだろう。今は学生だから暢気に構えていられるかもしれないが、君も世間へ出れば厳しい目にさらされるんだ」

遥の父親は作戦を変えて、僕たちの仲を引き裂こうとするつもりのような。僕たちの日々の営みを否定させはしない。

「そうして、あなたみたいに世ずれしてしまうんですね。取引さえすれば、なんでも手に入ると思っ」

「大人をからかうのもいい加減にしろっ」

「僕は大真面目に言っつもりです。あなたは大人ではなくて、小人しょうじんです。ほんとうの大人なら遥のことをきちんと考えてあげられるはずですよ」

「だから同棲なんてやめると言っているんだ。もし妊娠でもしたら、君はいったいどういう責任を取るつもりなんだね」

「その時は働きます。遥と僕たちの子供をきちんとして育てます」

「そんなこと、信用できるか。格好いいことだけを言っおいて、逃げる男なんていくらでもいるからな」

「信用できるかどうかは、遥がいちばんよく知っています。僕たちは遊び半分がいっしょに暮しているではありません。僕の育った

家も冷え切った家庭でした。僕たちは、家庭的なぬくもりに飢えているんです。でも、それを親に言ってもはじまりません。だから、ふたりでやさしさを持ち寄って暮しているんですよ。それが僕たちにとって大切なことだからです。人は独りでは生きていられないから、支えあつて生きています」

「なにが支えあつてだ。乳繰り合っているだけだろ」

「遙も僕も親に家族のぬくもりを与えてもらえませんでしたから、ふたりでそれを作っているんですよ。僕たちはふたりで愛情を育てているんです。あなたには理解できないかもしれませんが」

「わからないね。破廉恥だ」

「破廉恥なのはあなたのほうでしょう。自分の妻をいじめ抜いて、その挙句の果てに離婚してしまうだなんて。会社で白い目で見られたのも当然です」

「私のことには口を挟まないでほしいな」

「だったら、僕たちのことにも口を挟まないでください。赤の他人ですから」

「君は理屈ばかり言って話にならん」

「いい加減にしてください」

僕は声を張り上げた。

「わかりました。一つだけ条件を出しましょう」

「なに、条件？」

遙の父親はするそうに目を動かさず、

「なんだ。はじめからそう言ってくればいいのに」

と、にやつと笑った。心根のいやらしさがにじみ出ている。

「今すぐ、遙のお母さんのところへ行って、さっき僕にしたように土下座をして謝ってください。それから、遙のお母さんの愛情と信頼を取り戻して、一緒に仲良く暮してみてください。そうすれば、僕はあなたに会ったほうがいいと遙に勧めますよ。もしかしたら、僕がなにも言わなくても、遙のわだかまりが自然ととけるかもしれません。どうですか？」

「そんなことをできるわけがないだろ。あいつとはもう終わったんだ。君は、人のことも考えずにむちゃばかり言う」

男は顔を真っ赤にして怒った。

「遙は、あなたとお母さんに仲良くしてほしかったのですよ。それが遙のいちばんの望みだったんです。あなたとお母さんが仲良くすれば、遙も幸せな気持ちになれるんです。むちゃかもしれませんが、間違ったことは言っていないつもりです。あなた自身が変わろうとしなければ、遙に会わせることなんてできません」

「わたしのどこがいけないんだ」

「そこですよ。問題なのはあなたが自分でしたことを反省していないことです。だから、変わることができないんですよ。あなたの傲慢な態度がいちばんの問題なんです。遙に会えるかどうかは、あなた自身が変われるかどうかにかかっているんですよ」

「君みたいな青二才には言われたくないな。君になにがわかるんだ」
「僕はよくわかっています。あなたは自分の都合で遙を振り回そうとしているだけなんですよ」

「振り回してなどいない。あの子のことを思つてのことだ」

「このままのあなたが遙に会えば、遙はまたあなたに傷つけられてしまいます。遙には近づかないでください。僕はこれで失礼します」

僕は踵を返した。

「君、待ちなさい」

遙の父は慌てて叫び、

「あの子は私の娘だ」

と、僕の背中へ言葉を投げつける。

うんざりだった。

僕は、振り返りもせずに公園を出た。

子供は成長するにつれて変わるけど、親は変わらない。子供が変わっても、親が変わらなければ、壊れた親子関係はそのままだ。月日が過ぎて嫌な記憶が薄れ、関係を修復できるような気がすることもあるけど、それは幻想にすぎない。親が変わらなければ、なにも

変わらない。また同じことの繰り返しになってしまう。僕は、自身自身の体験で嫌というほど識^しっていた。

僕も自分の家でさんざんつらい思いをしたからいろいろ考えたのだけど、結局、僕と遥の両親は、自分の家族を運営するための知識もノウハウも、家族をうまくやっていこうという意識さえもないのだと思う。彼らなりに一生懸命やっているつもりなのだろうけど、なにかが決定的に間違っている。それがすべての問題の根っこにある。たぶん、それは自分が満足感を得たり、自分の体面を保つために、子供をその道具として扱うことだろう。そして、それに気づかない限り、問題はなにも解決しない。親が変わろうとしない限り、親とはできるだけ距離を置いたほうがいい。そんな親なんて、いいことにしておくに越したことはない。同じ問題ばかり際限なく蒸し返されるのは、たまらないから。僕の弟が不登校になった時そうだったように、親は自分の子供がとことん追いつめられて身動きがとれなくなるまで過ちを繰り返す。そこで自分の振る舞いに気づけばまだいいほうだけど、なかなかそうはならない。自分が欲しい解答を出せと行って、子供を押しつぶしてしまう。

遥の父親はなにもわかっていない。わかろうともしない。遥にしてみれば、祟り神みたいなものだろう。

ワンルームのドアを開けると豆電球だけがついていた。遥はもう眠っていた。明日の朝、遥は大学の図書館でアルバイトがあった。僕は遥を起こさないよう、そっとパジャマに着替えた。

遥は、安心しきった寝顔で眠っている。明日の晩、きちんと話すことにしよう。

遥の白い額に口づけ、僕はベッドへもぐりこんだ。

負けられない

「たすけて」

携帯電話の液晶パネルに遥からの文字が浮かんでいる。

教室を飛び出した僕は階段へ出て電話をかけた。

ノイズが火花のように散り、コールがつかぬがる。

「遥。なにがあったの？」

電話の向こうでレールの軋みが響いていた。

「あの人がね。学校へ」

遥は途切れとぎれに言う。

「お父さんが遥の学校へきたの？」

「むりやりわたしを」

遥の声をかき消すようにして、次は飯田橋と告げる車掌のアナウンスが流れた。

「もっと大きな声でしゃべって。今、一人なの？」

「そうよ。逃げてきたの」

「新宿へ出てこられる？」

「新宿？ この電車はどこへ行くのかしら」

「さつき飯田橋って聞こえたんだけどさ、何線に乗っているの？」

「お堀が見えるわ。中央線だと思う」

「JRの黄色い電車だね」

「たぶん」

「次の駅で方向を確かめてみて。反対方向だったら乗り換えてよ」

「わかったわ」

「大丈夫だから、心配しないで」

僕は教室へ戻り、かばんを取った。ちょうど第二外国語のロシア語の語学教師が教壇へあがったところだったので、先生に家族が大変だから欠席すると断った。僕があまりにも勢いこんで話したせい、教師は驚いた顔をしていたけど、かまわずにそのまま教室を後

にした。

新宿駅新南口の自動券売機の前に遙が立っている。蒼ざめた顔をした遙はあごを心持ちあげ、迷子になった子供が自分がどこにいるのかわからず怯えるように、焦点の合わない目でどこかを見ていた。

僕は駆け寄り、遙を抱きすくめた。だけど、遙は呆然と突っ立つたまま、僕を抱き返そうとしない。後悔の念が胸を締めつける。昨日、きちんと話しておくべきだった。

遙を連れて近くの喫茶店へ入った。レンガ造りのシックな内装だ。片隅にグランドピアノと小さなアンプが置いてあり、レジの後ろの棚にはレコードのジャケットがずらりと並び、レコードプレーヤーのうえで黒光りするLPレコードが回っていた。スピーカーから村下孝蔵の『とまりぎ』が流れ、店をゆったりつつんでいる。僕が生まれるずっと前に作られたせつない歌だった。

壁際の席に坐り、レモンティーをふたつ注文した。

遙は、息をつめてお冷のコップを見つめる。目の縁が真っ赤だ。ずいぶん泣きはらしたようだった。

「ごめんね、遙」

僕は言った。遙はハンカチで鼻をこすった。

「どうしてゆうちゃんが謝るの？」

「実はさ」

僕は、昨日の朝、遙の父親が僕たちの家へきたことを話した。それから、夕べ、近所の児童公園でまた彼と話をしたことも告げた。遙の瞳から涙がこぼれる。

「今晚、遙に話そうと思っていただけ」

僕はため息をつき、悔し紛れに膝を叩いた。

「ゆうちゃんは悪くないわ。わたしをかばってくれたのね。ありがとう」

遙は、手にしたハンカチを握りしめる。

「そんなの当たり前だよ。ほんとにごめん」

「謝らないで。ゆうちゃんは、わたしのためにがんばってくれたのよ。わたしの気持ちをわかってくれるのは、ゆうちゃんだけだもの」
遥はしんみり言った。遥はどれだけ傷ついただけだろう。僕は悲しかった。ふたりとも黙りこんだところへウエイトレスがきて、レモンティーのカップをさりげなく置いていった。

「いつ遥のお父さんが学校へきたの？」

僕は、ようやくのことで訊いた。

「お昼にバイトをあがって図書館を出たら、出口のところであの人が待ち伏せしていたのよ。どうしてわかったのかしら？」

「大学に伝つてがあるって言うていたから、大学の関係者に聞き出したんだらうね」

「あの人は話があるっていうんだけど、どんな話かはもうわかるから、帰ってくださいって言って無視して歩き出したの。昔のことなんて思い出したくもないし、かわりあいにもなりたくもないから。だけど、あの人は追いかけてきて、話だけでも聞いてほしいってひつこく食い下がるのよ。」

門を出たところで、あの人はわたしの腕をつかんだわ。怖かった。あの人はかんかんになっていて、わたしが小さかった頃、お母さんをなじっていたのとおんなじ表情なの。あれから十何年も経つのに、ぜんぜん変わっていないのね。わたしは振りほどこうとしたんだけど、手首をがっちり握られて逃げられなかった」

遥はレモンティーを飲むうとしてカップを持ったのだけど、手が震えてうまく持てなかった。紅茶が波立ち、こぼれそうになる。

「むりやりタクシーへ押しこめられたわ。どこへ連れて行かれるんだらうって気が動転しちゃった。運転手さんにとめてくださいってなんどもお願いしたんだけど、あの人は娘と話をするだけだからっていつて誤魔化してしまうのよ。運転手さんはあの人の話を信じちゃったみたい。わたしも年頃の娘がいるからお父さんの気持ちはよくわかりますよなんていって、お嬢さんもお父さんの話くらい聞いてあげたらどうですかってわたしを諭すの。お父さんてものは娘が

かわいくてしかたのないものなんだからって。たぶん、ごくふつうの家の、ごくふつうの愛情をもったお父さんのね。壊れた家庭のことなんて、わからないのよ。

あの人は自分のところへおいでってひつこく誘ってきたわ。お母さんのところから籍を抜いて、自分のほうへ籍を移しなさいってね。就職するにしても、結婚するにしても、鬱病の母親といっしょにいるより、自分といたほうがずっと有利だからって。どうしてあんなことを平気でいえるのか、わからないわ。あの人がお母さんを大切にしてくれたら、こんなことにはならなかったのに。わたしだって、あたりまえにしあわせに過ごしたかった。お母さんだってそうよ。わたしは、昔のことは忘れたいからもう目の前に現れないでってなれどもいったの。

あの人と口論しているうちに、運転手さんはちよつとへんだなつて気づいてくれたみたい。運転手さんは、娘さんの話も聞いてあげなくつちや、娘さんももう大人なんだし、いろいろ自分で考えていることもあるんだからって、わたしに助け舟を出してくれたのよ。でも、あの人は逆ギレして運転手さんを叱りつけちゃった。タクシ―代は払うから、君は黙って客のいうことを聞いていればいいんだっていつてね。運転手さんはむつと黙りこんじゃった。

小学生の頃、施設にいたときにあの人が迎えにきたことを思い出したわ。

あのときは、ちよつぴりうれしかった。施設でお友達もできて、それなりになじんで暮っていたんだけど、やっぱりさみしかったもの。

わたしね、施設へ入ってから万引きの癖がついちゃったの。そんなことはそれまで一度もしたことがなかったし、万引きしようなんて考えたこともなかったんだけど、どういうわけかお店にならんでいる物を取りたくなつちやうのよ。それでお店の人に見つかって、施設へ連絡が入って、いつも神父さんに怒られていたの。でもね、わたしは神父さんに怒られるのがうれしくてしょうがなかった。神

父さんはわたしのためを思って、親身になって真剣にお説教してくれたわ。わたしのことをほんとうに考えてくれる人がいるんだって思ったら、泣けてきちゃうもの。神父さんは忙しい人だから、施設でもめつたに見かけないし、話をする機会もあんまりないんだけど、子供が問題を起こしたらいつも自分の仕事は後回しにして、子供とまっすぐ向かい合ってくれたわ。やさしい人だった。ひよつとしたら、わたしは神父さんとお話をして、いっしょに神様に懺悔したかったから、万引きをしていたのかもしれない。

あの人の家ではお姉ちゃんがやさしくしてくれたし、それはよかったんだけど、お母さんに会わせてもらえなかった。毎日、あの人がお母さんの悪口ばかりいうものだから、つらかったわ。なんだか胸がずきずき痛んで、心が引き千切られそうだった。わたしはお母さんを裏切ってしまったって思って、自分を責めていたの。

あの人は、タクシーのなかでお母さんの悪口を言い始めたわ。お母さんだって悪いところがあつたのかもしれないけど、あんまりよー一方的過ぎるもの。わたしは息苦しくなっちゃった。

それでね、運転手さんはバックミラー越しにわたしのことを心配そうにちらちら見ていたんだけど、機転を利かして交番の前でとまってくれたの。クラクションを鳴らしてお巡りさんをお呼びしてくれて、ややこしい事情のようだから自分には手におえないし、もしかしたら誘拐かもしれないからお客さんの話を聞いてみてくださいよって駐在さんにいつてくれたのよ。

あの人は怒って、あたりかまわず怒鳴り散らしたわ。いつもそんなのよ。ちよつとも思い通りにならないことがあつたら、ぜんぶまわりのせい。自分の言い分をおすことしか考えていないのよ。お巡りさんも怒ってしまつて押し問答になつたわ。わたしは、その際にドアを開けて逃げ出してきたの。あんまり走りすぎたから、胸が破れるかと思つた」

話し終えた遙は今走ってきたかのように胸を大きく上下させ、手で押さえた。店に流れていたレコードはいつのまにかとまっていた。

長い髪をした中年の女性がピアノの前に坐り、ショパンの夜想曲を弾き始める。

「とにかく、遥が無事でよかったよ」

僕はほっと息をついた。

「あの運転手さんのおかげだわ」

「男気のある人でよかったよね」

「もし会えたら、お礼を言いたいわ。あの人はまだくるかしら」

「たぶん。今すぐかどうかはわからないけど」

「どうしよう」

遥は消え入りそうな声で言い、心底困ったように眉根を寄せた。

「今日のことを警察へ訴えれば、なんとかなるのかな？」

「わからない」

「家へ帰ったらネットで調べてみようか。アメリカだと、ストーリーに被害者の半径何十メートル以内に近づいてはいけないとかがあっていう判決を出しているらしいけど」

「もしそんな判決が出ても、あの人のことだから無視するにきまっているわ」

「そうかもしれないね。いつでも自分が絶対に正しいって勘違いしているタイプの人間だから。警察沙汰にしたとしても、遥のお

父さんが遥の気持ちを理解しようとしなかったら、ほんとうの解決にはならないよね」

「わたしの話にきちんと耳を傾けてくれるんだったら、話し合うことだってできるかもしれないのに」

「遥のお父さんはごり押しばかりなんだよな。そうでなかったら、餌で人を釣ろうとするし」

僕は首を振った。あの男とのやりとりを思い出すと虫唾が走る。

「ごめんね。ゆうちゃんに迷惑をかけてしまった」

「なにを言っているんだよ。そんなことないよ。遥を守るのが僕の仕事なんだから」

「こんなごたごたに巻きこんで、もうしわけないわ」

「だから、そんなことを言わないでよ。ふたりで解決しよう。いいね」
「うん」

遙は心細そうにうなずく。もしかしたら、遙の父親は一生つきまとい、懸命に生きようとする遙の足を引っ張り続けるのかもしれない。なにか名案があればいいのだけれど。

「でもさ、よくわからないんだけど、自分の娘が嫌がっているのに、どうしてここまで追いかけるんだろう。むりやり誘拐したりしてさ。ひどいよね」

「失ったものはいつまでも心に残るのよ。あの人にとっては、失ったものがいちばん大切なものなのよ。ほんとうに大切なものは、ほかにあるはずなのに」

うつむいた遙は頬をひっそりさせた。

父親と一緒に暮っていた時、遙は大切にしてもらえなかった。その悲しみは僕にもよくわかる。僕は冷えた紅茶を飲み干した。

とりあえず、ふたりの部屋へ帰ることにして喫茶店を出た。僕たちにはほかに行くところなど、どこにもなかった。

電車から眺める東京の風景は、冬枯れた肌寒い色に染まっている。遙が時折、怯えた木の葉のように体を震わせるから、僕は遙の肩を抱き続けた。遙の心の重荷をせめてはんぶんでも背負ってあげられたらと願うけど、これくらいのことくらいしか僕にはしてあげられない。遙はまた、この間のようにどうにもならないくらいに落ちこんでしまうのだろうか？ そう考えると気が気ではなかった。

部屋へ帰ってから、遙はしょんぼりしたままだ。ベッドに腰かけてずっと考えこんでいる。

「遙、引越しようか」
僕もベッドに腰かけた。

「ここは遙が学校へ通うのもちょっと不便だし、台所も狭いしね。それに、遙のお父さんはここを知っているから、またやってくるかもしれない。ちょうどいい機会だから、遙の学校と僕の学校との中

間くらいのところでも部屋を探そうよ」

「そうね」

遥は気のない返事をする。今日の出来事ばかりを考え、心ここに
あらずといった様子だった。一度落ちこむとそのことばかり考え続
ける遥の悪い癖が出ていた。

「考えておいてよ。僕は、遥と一緒にならどこに住んでもかまわない
から。それから、今日のことはあんまり考えないことにしようよ。
考えるなって言ってもむりかもしれないけど、思いつめるはよくな
いよ」

遥はなにも答えず、ぼろぼろ涙を流す。僕はやりきれなかった。

あの男は、こんなふうに遥を苦しめて、いつたいなにを考えている
のだろう。

ゆづべのカレーの残りを温め、ふたりで食べた。今日は全部やる
からといって夕飯の支度も後片付けも僕がすませた。

食事が終わった後も、遥はやはりベッドに腰かけて考えこんでい
る。そっとしておいてほしいようなので、僕は机に向かってロシア
語の勉強をした。

夜の十一時をまわった。

しんと冷えた夜だった。

こんなに遅くなら、遥の父親もさすがにやってこないだろうと思
い、小腹の空いた僕は近所の弁当屋へ焼き鳥を買いに行くことにし
た。いっしょに出かけようかと誘ってみたけど、遥は黙って首を振
るだけだ。明日か明後日あたりにも、遥の気持ちがすこし落ち着
いたところで引越しの話をしよう。いつ父親が現れるのかとびくび
くしながら暮らすのは、遥にとっても僕にとっても決まっていたこと
ではない。新しい場所で新しい気分になれば、元気になってくれる
かもしれない。できるだけ早いほうがいいだろう。

スニーカーを履いてドアを引いた瞬間、黒い影がなだれこんでき
た。僕は突き飛ばされ、壁で頭をしたたか打った。

遥が悲鳴をあげる。

はつとして振り向くと、遙の父親が、

「お父さんといっしょに行こう」

とわめきながら、遙の腕を引っ張っていた。男の目は吊りあがり、凄まじい形相をしている。人攫いの鬼のようだった。

「なにをするんだ」

僕は土足のまま部屋へ駆けこみ、彼へ飛びかかった。

「遙、早くきなさい。お前の将来のことを考えたら、お父さんとい
るのがいちばんなんだ」

遙の父親は遙を放そうとしない。僕は力任せに彼の腕を殴った。

遙の腕が離れ、遙は床へ倒れこむ。遙に襲いかかるうとした男のア
キレス腱をスニーカーで思いきり踏みつけ、うずくまった彼を廊下
へひきずりだした。

「遙、一〇番して」

僕は叫んだ。

「娘を返せ」

怒り狂った遙の父親は僕の首を絞める。

悔しくてしょうがない。せつかく幸せになろうとしているのに、
これではなにもかもぶち壊しだ。このまま負けたのでは、今までな
んのためにがんばってきたのかわからない。

「ぶざけんな」

僕は男の腕を振りほどいた。頭突きを喰らわせ、廊下の端まで押
し出す。僕は、がむしゃらに男を押しまくることしか考えていなか
った。遙には近づけさせない。突然、相手が軽くなる。そのまま階
段を転げ落ちた。

穢れた神話

「ゆうちゃん、コンビニで氷を買ってかえろうね」
遙がぼつりと口を開く。

ふたりは夜中の道を歩いていた。警察署から帰るところだった。階段から転げ落ちた後、僕は遙と巡査に付き添われて救急車で病院へ運ばれた。幸い、背中に青痣ができてしまったものの、打ち身とかすり傷だけの軽傷だった。遙の父親はあばら骨を折り、左腕の骨にひびが入ったそうだ。ざまあみると言いたいところだけど、それだけの怪我ですんでよかった。いくら横暴な父親とはいえ、死なせたりしたら遙を傷つけてしまう。

手当てを受けてからパトカーに乗って警察署へ行き、薄汚れた壁の小部屋で事情聴取を受けた。

取り調べにあたった年嵩の刑事は、お地藏さんを思わせるような人間のできあがった人だった。坊主頭になんともいえない温かい雰囲気漂っている。小柄なお地藏さんが僕に質問し、僕の答えをまとめてノートパソコンへ打ちこむ。調書が一通りできあがったところで、彼は声に出して読みあげた。

調書の文体は一人称で、彼が書いた文章なのに僕が告白した形になっている。自分に起きたできごとや自分の気持ちを他人が代わりに書くというのは、どうも違和感があるし、不安で落ち着かない。それを朗読されればなおさらだ。心配したとおり、あの男が部屋へ侵入してきた時に怖いと感じたなどと、話していないことも書かれていた。

「これで間違いないですかね？」

刑事は、僕の目をのぞきこむ。

「だいたいいいんですけど、僕は怖いとは思いませんでした。彼女を守らなきゃって必死だったので。むしろ、かっとして頭に血がのぼったような感じでした」

僕は、ちぐはぐなかゆさを隠しきれなかった。

「そうかあ、君は彼女思いなんだ。でも、これがお約束というか、パターンなんだよね」

刑事は人の好きそうな照れ笑いを浮かべ、坊主頭の後ろをかく。そんな彼の姿を見ると、自分の真実にこだわり過ぎるのも考え物かなと思ってしまう。

「そのほうが通りがいいということですか？」

「そんなところなんだけど」

「それじゃ、それでいいです」

調書には調書のスタイルがあつて、それにそつたほうが仕事がスムーズに流れるのだらう。真実は僕のなかにある。それでいい。

「ところで、あの男のしたことは不法住居侵入といつくかの罪にあたるんだけどね」

お地蔵さんは、調書を目で読み返しながらむずかしい顔をする。

「なんででしょうか？」

「不法住居侵入は親告罪といって、被害者が被害届を提出しないと事件にはできないんだ。暴行はそのまま事件にできるけどね」

「それだけじゃなくて、昼間、彼女を連れ去ろうとまでしたんですよ」

「あの男が悪いことをしたのはわかるよ。ただ、いくら法律上の親子関係はないとはいえ、やはり身内のことだからねえ」

「事件にならないということですか」

遥の父親はこのまま裁きを受けるものだとしてつきり思いこんでいた僕は、驚いてしまった。

「もちろん、あなたたちが彼女のお父さんを訴えるというなら、警察は正式に事件として処理するよ。ただし、そうなると関係者にいつせいに事情を聞いてまわるから、彼女自身も、彼女のお父さんも、世間から白い目で見られることになるし、根も葉もない噂が飛び交って苦しい思いをすることにもなるんだ。警察沙汰にするのがいちばんいい解決方法なのかどうか、そのあたりのことも含めてよく考

えてみてほしいんだよね」

訴えるのはあまり勧められないという口振りだ。

「ですけど」

「あなたが怒る気持ちはよくわかるよ。あの男がしたことは言語道断だ。私もけしからんことだと思う。でもね、この仕事をしていると時々似たようなケースに出くわすんだけど、身内同士で警察沙汰にしてしまったがために、よけい不幸になってしまったということも得てしてあるものなんだよ。世間の嫌がらせを受けたり、罪悪感にさいなまれたりしてね。後になって、訴えた本人が自分の親を刑務所送りにしたことを苦にして自殺したことも過去にはあったしねえ」

「わかりました。彼女とよく話し合ってみます」

あの男を懲らしめてやりたいのはやまやまだけど、そこまで言われればこう答えるよりしかたない。もし、遙がこれ以上苦しむようなことがあっても困る。

「そうしてくれないかな。複雑な家庭事情だから、むずかしいところではあるんだけどね。さっきも言ったけど、訴えるなどいうことでは決まてないんだよ。それはあなたたちが決めることだから」

刑事は、どうしたものかといった顔をして坊主頭をつるりとなでた。

家に着いたのは、もう午前四時前だった。遙はコンビニで買った氷を氷枕に入れて、僕の背中に当ててくれた。つけたばかりのエアコンが低くうなっている。

「遙のお父さんのことだけど、どうしよう。訴える？」

僕は言った。

「そうね」

遙は眉をひそませ、口をつぐんでしまう。遙も、お地蔵さんから同じ話を聞いていた。

「ゆうちゃんはどう思う？」

「あんなひどいことをしたんだから、ちゃんとお灸をすえておいた

ほうがいいと思うんだけど。遙だって、またあんなことをされたらたまらないだろう。むちゃくちゃしたら罰を受けるんだって、わかってもらわないと」

「わたしもあの人を許せない気持ちでいっぱいよ。訴えたいわ。でも、そうしたら、お姉ちゃんが困るかもしれない」

「刑事さんがそう言ったの？」

「ううん、いつてないけど」

「父親が手錠をかけられたら、お嫁にいけないかもしれないね。お姉さんはどうしているの？ たしか、地元の専門学校へ進学したんだっけ」

「学校はもう卒業しているはずだわ。今はどうしているか知らないの。わたしが東京へ出てくる時にちょっとだけ会って、それっきりなのよ。姉妹きょうだいっていつても、ずっと離ればなれで会うことなんてほとんどなかったし、お姉ちゃんはお姉ちゃんであの家でつらい思いをしていたから、連絡を取りづらいのよ。わたしのせいでお姉ちゃんに迷惑がかかったら、いやだな」

遙は肩を落とした。

「遙のせいじゃないよ。悪いのはお父さんのほうなんだから。遙を誘拐しようとしたり、部屋へ押し入ったり、あんなことはれっきとした犯罪だよ。ごめん、言いすぎたよ。遙のお父さんを悪く言うつもりはなかったんだ」

「いいのよ。だって悪いことをしたんだもの。ごめんね。ゆうちゃんに怪我させちゃって」

「これくらいどうってことないよ。遙、お姉さんに電話してみたら、今日のことを話してみても、もしお姉さんが困るって言うのなら、訴えるのはやめにすればいいじゃない。お姉さんに迷惑をかけたくなっていう遙の気持ちはわかるよ。僕は遙の気の済むようにすればいいと思うし、どっちでもいいから」

「電話してみる」

遙はこくりとうなずいた。

翌朝、僕は駅前の商店街へ出かけた。遥が外へ出て携帯電話をかけたようにしたのだけど、僕のほうが部屋を出ることにした。

ログハウス風の喫茶店でモーニングを注文し、寝ぼけ眼のまま新聞に目を通した。店にはラフマニノフのピアノ協奏曲第二番が流れていた。

中学生が包丁で父親をめった刺しにした事件が社会面に載っている。記事を読むうちに、背中が疼きだす。不幸な中学生は誰だかわからなくなるほど自分の父親の顔を切り刻んだそうだ。血の通わない興味本位の記事の片隅に評論家の無責任なコメントが載っていた。

僕はふと、昨日の取り調べを思い出した。一人称で書かれた父親殺しの中学生の調書に真実は載っているのだろうか。この記事は真実を伝えているのだろうか。おそらく、真実のいちばん肝心なところは載っていないはずだ。警察の調書も新聞記事も、誰かの言葉を聞き書きしたものに過ぎない。そんなものが真実を伝えられるだろうか。僕の調書に怖いと思ったなどと話してもいないことが書かれていたように、聞き手が理解したいように理解した文章しか載っていないはずだ。真実というものは、その人自身が自分の言葉で語ったものでしか表すことはできない。もちろん、人の心はあやふやなものだから、それだっただけでほんとうに真実を述べているのかどうかといえば、あやしいものだけだ。

壊れた家庭に育った子供が親へ抱く気持ちはアンビバレントだ。どんなにひどい親だったとしても、心の底では仲良くしたいという想いが必ずある。それは、まっさらな心で生きていた幼い頃に親から受けた愛情の残像なのかもしれないし、親の存在が心の神話として魂の奥に根を張っているからなのかもしれない。だけど、親への情愛をないがしろにされたり、自分の話を聞いてもらえなかったりすると、汚れた洗濯物がたまるようにわだかまりと諦めが心に積み重なってしまう。わかってほしい期待が強い分だけ、邪険な恨みつらみが心でとぐるを巻いてしまう。

夕べ、遙は姉について話すだけで、自分の父親のことは語らなかつた。たぶん、正反対な気持ちで胸の内を綱引きして、言葉にできなかったのだと思う。僕もあえて尋ねなかつた。遙はお姉さんのことばかりでなく、その矛盾とも闘っているのだろう。

お姉さんとの話が終わったら携帯のメールをくれることになっていたのだけど、まだこない。僕はもう新聞を読む気にもなれず、遙のことをぼんやり考えた。

中高生の頃から、僕たちはいろんなことを話し合った。楽しい話もたくさんしたけど、悩み事も話した。頭痛の種はいつも自分たちの親のことだった。親のわがままや欠点が見える年頃になったということもあるけど、いちばん厄介なことは、やはり親が家庭の問題を自分たちの手で解決できないどころか、それとまともに向かい合おうとすらしないことだった。

家族というものは彼らが考えているほど簡単なものではないし、子供を取り巻く世間も親が想像しているほど単純なものではない。親は子供に勝手な期待を抱いたり、自分の都合のいいように動くように求めるけど、子供は親のわがままや親自身が満たされなかつたことを満足させるための下請けではない。遙の親も、僕の親も、人生にとってほんとうに大切なことはなにかということをおぼれている。それが原因のすべてだ。そして、どうしようもない矛盾が遙のような立場の弱い子供に押しつけられてしまう。自分の娘に親を訴えさせるかどうかで悩ませる遙の父親なんて、最低だ。

僕は、ゆで卵の殻とサンドイッチのパン屑が散らばった皿をぼんやり見つめた。お姉さんとうまく話せているのだろうか。泣いたりしていないだろうか。それだけが気がかりだった。

少年ジャンプを見るともなくぱらぱらめくっていると、ようやくメールがきた。僕は勘定をすませ、足早に部屋へ戻った。

許したくないもの、許したいもの

「どうだった？ ずいぶん時間がかかったようだけど」

部屋へ帰った僕はさっそく訊いた。

「お姉ちゃんは訴えなさいって勧めてくれたわ」

遥は、すこしばかり気の晴れた顔をする。

遥の姉はもう実家を出て、地元 of 県庁所在地の街で暮しているそうだ。勤め先で知り合った彼氏と同棲中で、来年の夏に結婚する予定なのだとか。

「でもね、お姉ちゃんの彼氏も、彼のご両親も複雑な事情はわかっているから、あの人が裁判にかけられたり牢屋へ入ったりしても大丈夫だって、万が一、婚約がご破算になってもかまわないし、自分のことは気にしなくていいから、ひどいことをされたぶんだけぎゃふんといわせてあげなさいって励ましてくれたの」

「そう、よかったね」

僕は遥の頭をなでた。遥は涙ぐむ。

「久しぶりだったからつい話しこんじゃったんだけど、お姉ちゃんもあの人がお母さんをいじめたことは許せないみたい。お母さんの仇を討ついい機会じゃないもいってたわ。お姉ちゃんは、あの人からお母さんを取り上げられたんだもの。うらむわよね。それから、自分が家を出て、あの人の相手をまったくしなくなったから、ゆがんだ愛情のはけ口がわたしにむかったのかもしれない、わたしがあの人に振り回されるようなことになってごめんってあやまるの。お姉ちゃんせいじゃないのにな」

「遥のことを心配してくれているんだよ」

そう言いながら、エゴイストの親を持つと自分のやっていないことまで自分の責任のような気にさせられて苦労させられるなど思わずにはいらなかった。

「お姉ちゃんはおわたくしが東京へ出てくるとき、あなたは好きなこと

をして、自分のしあわせをつかみなさいって送り出してくれたんだけど、さっきもその言葉をいつてくれたわ。わたし、すごくうれしかった」

遙は指で涙をぬぐった。離ればなれの姉でも心は通いあっていた。自分のことを気にかけてくれる家族がいて、遙はさぞ気持ちが悪くなっただろう。僕もほっとした。

ほうじ茶を淹れ、ふたりでいろいろ話し合った。といっても、遙の考えはもう固まっていたから、遙はそれでいいのかどうか僕に確認するだけだ。遙が軽はずみに物事を決めたりする女の子ではないとわかっていて。悩みに悩んだ末に出した結論なのだから、僕にも異論はない。誰かに答えを求めたり、投げ出したりせず、自分自身で答えを出した遙を誇りに思う。

お地蔵さんのような刑事に連絡を入れ、警察署へ向かった。

受付で名前と要件を告げ、制服を着た若い警官に二階へ案内してもらおう。着替え用のロッカーがずらりと並んだ廊下の上には、剣道の防具や柔道着が渡したロープに干してあり、男くさい汗の匂いがかもっている。僕はふと、高校の部室を思い起こした。

換気扇のうなり声が遠く鈍く響く。どこそでひったくりが発生したので付近のパトカーは急行せよだとか、変死体が見つかったなどという警察無線のアナウンスがスピーカーからひっきりなしに流れる。そんな放送を聞いていると、自分の知らないところにいるんな犯罪が起きていることがわかる。日本中の警察の放送を全部合わせれば、一日にどれくらいの数になるのだろう。目には見えないけど、この世は暴力に覆われているようだ。

殺風景な事務所の端を通り、その隅にある小さな取調べ室へ入った。ペンキの剥げた壁にかなり古ぼけた木目調のクーラーが取り付けられ、その下に風量を調整するための手回し式ダイヤルがついている。窓の下に銀色のスチーム暖房が置いてあったけど、まだスチームは通っていないようで、コンクリートの部屋は底冷えがした。

お地蔵顔の刑事と左腕を白布で吊るした遙の父親がスチール机を

前にして坐っている。遙のやつれた頬が一瞬ひきつる。男は遙を横目で睨み、あからさまに不貞腐れる。僕と遙はパイプ椅子に坐った。「それでは、さっそくですが、昨日発生した件につきまして、瀬戸佑弥さんと天草遙さんの考えをお聞かせ願いたいと存じます」

刑事はあらたまつた口調で言う。遙の父親は傲岸そうに腕を組み、「私は仕事があるのでね、こんなところから早く出してもらいたいんだが」

と、ぶつきら棒に吐き捨てた。留置所で一晩過ごしたのだろうか、彼の額には汚れと脂がうつすら浮かんでいた。

「まずは、お二人の話を聞きましょう」

刑事は男を制し、

「どうぞ、ご遠慮なくおっしゃってください。彼が暴れたりすれば、私が押さえますから。私は小柄ですが、これでも柔道五段ですので」と、穏やかだけどどこか凄みのきいた声で言った。

「聞き捨てなりません。それではまるで犯罪者扱いでしょ。それに、あばら骨が折れて左腕にひびが入っているのに暴れられるわけがない。私の骨を折ったやつを捕まえてほしいくらいだ。あべこべじゃないか」

遙の父親は口元を苦味走らせる。

「あべこべってどういうことですか？　あなたは立派な誘拐犯ですよ」

腹が立った僕は思わず立ち上がった。

「君も落ち着いて。怒鳴りあつてもしょうがないから」

刑事は目で坐りなさいと合図する。僕はしぶしぶうなずき、

「遙、話しなよ」

と、遙の肩に手を置きながら坐った。

「きのうは、びっくりしました」

遙は震える声で話し始めた。遙が膝に置いた手を握りしめていたから、僕は彼女の拳にそつと手を重ねた。心の震えなら、僕が受けとめてあげる。

「まさか、むりやりタクシーへ連れこまれたり、あなたが部屋へ押し入ってきたりするとは思いませんでした」

「話をしようと言っただけだ」

遙の父親は怒った。

「聞いてください。そうでなければ、わたしは帰ります」

遙は、勁つよいまなざしで父を見据える。男は一瞬、不安そうな光を目に漂わせ、むっと黙りこんだ。

「とても悲しかったです。わたしの気持ちをほんとうに聞いてくれるのだったら、話をしてもいいかなと思いますけど、あなたは自分の都合を押し通そうとするだけだから、話す気にはとてもなれませんが。」

あなたを訴えるべきかどうか、さんざん悩みました。わたしの考えをいってもあなたは否定するだけでしようし、大切なゆうちゃんにすごい迷惑をかけてしまったので、もう二度とこんなことをしてもらわないためにも、訴えるべきじゃないかと思いました。たぶん、そうしたほうがいいでしょう。そうするべきなのでしょう」

遙は、思いつめた顔でじつとうつむいた。遙の頬が紅潮したかと思うと、波が遠退くようにすつと血の気が引く。リップクリームを塗っただけの唇が紫色に蒼ざめる。遙は垂れた髪を指で耳の裏側にしまい、決心したように顔を上げた。

「ですけど、わたしの信じている神さまは汝の隣人を愛せよとおっしゃいました。あなたもわたしの隣人のひとりです。わたしは神さまを裏切りたくはありません。神さまの前では素直な子でいたいと思います。あなたを許します。ですから、二度とわたしの前に現れないでください。わたしの暮らしを壊さないでください。お願いします」

遙は深々と頭を下げた。長い睫毛から涙がはらはらこぼれ、机の上にせつない水玉模様を描く。遙の父親はほっと息をついて安堵の表情を浮かべたかと思うとたちまち激昂し、

「親に向かってなんて言い草だ。お前の神さまなんか知るもんか」

と言いつつ放った。

「親の心、子知らずとは言いつつけど、親が子供の苦しみを理解してあげないとはねえ」

お地蔵さんはやれやれと掌で額をこすり、

「あなたは情けないと思わないんですか。自分の娘にこんなことを言わせて、恥ずかしいと思わないんですか。私は、刑事である前に一人の人間として、一人の父親として呆れますよ。許せないけど、やっぱり実の父親だから許したい。刑務所送りにして苦しめたくない。彼女はそう思っているんですよ。なぜ、それがわからないんでしょうかねえ。自分の娘の苦衷を察してあげようとは思わないんですかねえ。私にはさっぱりわかりません」

と、ぼやくように叱り飛ばすように言った。

「遙の前に現れないと約束してもらえますね」

僕は男に迫った。きちんと言質を取っておきたかった。

「わかったよ。訴えないでおいてもらえるのなら、そうさせていただきます」

男はそっぽを向き、ばかばかしいとでも言いた鼻を鳴らす。

「いい加減な答えでは困ります」

「はいはい、お約束いたします。身を粉にして働いて、自分の小遣いを削って養育費を送ってもこのざまか。情けない。自分が情けない。娘も情けない」

「いいですか、約束は約束ですからね。あなたが約束を破ったら、すぐにでも訴えることにします」

僕は机を叩いた。男は横を向いたまま答えない。

「私が証人になりました。お二人さんはなにかあったら連絡しなさい。私がきちんと処理しますから。お父さん、妙な真似は許しませんよ」

刑事が助太刀してくれた。

「あなたにお父さんなんて呼ばれる筋合いなんてないんだがね。ま、いいけど」

遙の父親は皮肉に唇をゆがめる。もしかしたら、こんなふうに強がってみせるのが精一杯なのかもしれない。

「遙、行こう。反省の色もないし、これ以上はむただから。刑事さん、お忙しいところをどうもありがとうございます」

僕は遙の手を牽いて立ち上がり、彼に一礼した。遙は、蒼ざめた顔で父親を見つめている。男は、いらだたしそくに貧乏ゆすりをしたまま遙の顔を見ようともしない。自分が不当な扱いを受けているとしか思っていないようだ。

ここへ来る前にたぶんこうなるよと言って心の準備をさせておいたのだけど、いざ目の前でそんな態度を取られると、やはりショックを受けたようだ。今度も、遙は父親に裏切られてしまった。傷つけられてしまった。遙の思いとやさしさは通じない。遙と父親の関係はその繰り返しだった。

「いつか、あなたをお父さんと心から呼べる日がくれればいいなと思います」

遙の瞳が揺れる。卒業式で泣く女学生のようだ。これで遙は父親から卒業したのだと思いたかった。

「親だったら、なにか答えてやりなさい」

お地蔵さんは遙の父親に言った。男は、絶対に口を利くものかときつと唇を結ぶ。僕は遙の背中を軽く叩き、取調べ室を出た。

「ゆうちゃん、あれでよかったのよね」

ふたりは、ひっきりなしに車が流れる国道沿いの歩道を歩いていた。遙はなんでもないアスファルトの道につまづき、ふらりと体を傾ける。僕は腕を持って支えた。

「あれでいいんだよ。間違ったことはしていないから」

「あの人は、いつかわたしのいったことを理解してくれるかしら」

「わかってくれるといいけどね」

僕はため息をついた。これでは遙があまりにも可哀想だ。

「遙、わかってもらえなくてももとだし、いつかわかってもらえらると信じるしかないよ」

「そうね。信じることね。信じたいな」

遙はまたつまづいた。顔色は蒼いままだ。苦しそうな脂汗が額にじんできている。

「タクシーで帰ろうか。疲れただろ」

「歩けるわ。そんなの贅沢よ」

「いいから、タクシー代は僕が出すよ。ちょっと待ってて」

僕は遙の腕を離し、道端へ出て手をあげた。すぐにタクシーがとまり、後部座席の自動ドアが開いた。

「遙、乗るよ」

振り返ると、遙は歩道に体を投げ出して倒れていた。

空飛ぶクジラはやさしく唄う

白い紙飛行機が病室の窓から冷たく晴れた空へ滑り出す。

「つかまえてごらん」

僕は、病棟の下で待ち構えている男の子へ声をかけた。シアトル・マリナーズのスタジアムジャンパーを羽織った男の子ははしゃぎ声をあげ、三階からゆっくり舞い落ちる紙飛行機を追いかける。紙飛行機はやがてかくんと機首を下げ、滑り台をすべるようにして中庭のベンチへ落ちた。紙飛行機を拾った男の子は嬉しそうに僕を見上げ、

「おにいちゃん、ありがとう」

と、無邪気な声を響かせた。

「じゃあね」

僕は手を振った。男の子は手を振り返し、中庭の向こうの建物へ消えていった。

さっとカーテンを引く音が鳴る。パジャマから服へ着替えた遙がベッドの縁に腰かけ、濃紺の靴下を履いた。

過労による貧血という診断が下り、念のために一日だけ入院することになった。点滴を打ったおかげで血色はずいぶんよくなったんだけど、表情は冴えないままだ。遙は心の内を見つめ、ずっと物思いにふけっている。やり場のない怒りをこらえようとしてか、目尻がかすかに吊りあがる。白い肌が冷たく燃え、能面のように透き通った。

「行こうか」

僕は、遙の着替えをつめたポストンバッグを持った。

エレベーターで一階へ降り、中庭へ出た。消毒液の匂いから解き放たれ、やわらかい光がふたりをぬぐう。遙は、ふと立ちくらみをした。

「先生のところへ行こうよ。もう一度診てもらおう」

僕は言った。

「いいのよ。貧血じゃないの。心が石になってしまったみたいだから」

遙は、さまよい疲れたようにつぶやく。

「ベンチで休もう」

僕たちは、さつき紙飛行機が舞い落ちた中庭のベンチに腰をおろした。高くそびえる銀杏いちょうはすっかり木の葉を落とし、丸裸の枝を肌寒い風にさらしている。僕はコートを脱ぎ、遙の肩にかけた。

「お父さんのことを考えているの？」

僕は訊いた。遙は唇を結び、小さく鼻を鳴らす。

「なにを思っているのか、話してよ」

そう言っても、遙は黙ったままだ。

「たぶん、お父さんはもう現れないよ。刑事さんがきちんと念を押しておいてくれたし、今度あんなことをしでかしたら、どうなるかわかって」

「それはいいのよ。わたしが考えているのはそんなことじゃないの」
遙は、珍しくいらだたしそうにさえぎった。

「それじゃ、なにを考えているの？」

「わたしね、ほんとうはあの人を罰したくたしようがなかったの。懲らしめてやりたくて、しかたなかったの。わたしが訴えれば、あ

の人はなにもかも失うわ。復讐したかったのよ」

「そう思っただけだよ。あんなことをされたんだから。僕だってそう思っただけよ」

「あの人を刑務所へ入ったところを想像しただけでも、胸がすつとしたわ。楽しくてしょうがなかった。でもね、罰したいっていう気持ちも、やっぱり欲望なのよ。たぶん、一つ罰したら、もっともつとって求めてしまうと思うの。人を懲らしめたいっていう気持ちに切りなんてないのよ。わたしにだれかを断罪する資格なんてないの」

警察沙汰にしたらお姉ちゃんが困るかもしれないっていったのは、

あきらめる理由がほしかったからなのよ。お姉ちゃんがわたしの気持ちをわかってくれたことはほんとうに嬉しかったんだけど、懲らしめたいっていう気持ちでこりかたまりそうな自分が怖かった。だから、お姉ちゃんと話した後、ずっと聖書を読んでお祈りしていたの。あの人を罰したいなんて、そんなことばかり考えるわたしを救ってくださいって」

「そうだったんだ」

「間違ったことはしたくないもの。なにも考えないで、自分の気持ちのままに動いたほうがよっぽど楽だけど、でも、それじゃいけないのよね。あの人とおんなじになってしまっわ」

「立派だったと思うよ」

「でも、うまくいかなかった。わたしなりに真剣に考えて、精一杯の気持ちで許したかったのに、あの方はわかってくれなかった。ほんのすこしでもいいから、わたしの思いをわかるうとしてくれたら、すこしは救われたかもしれないけど」

遙はうつむいた。大きな瞳が小刻みに震える。深い虚無感と挫折感にとらわれたまなざしだった。

「残念だったけど、しょうがないって割り切るしかないよ。善意が相手に通じるとは限らないしさ。昨日も言ったけど、わかってもらえなくてももとだから」

「頭ではわかっているんだけど、どうしても割り切れないのよ。いつかわかってくれるって信じられたらいいのに」

「あんまり考えすぎるのはよくないよ。遙は間違ったことはしなかったんだから、自分に自信を持っていいと思うよ」

「そんなの、もてないわ。なんだか、わからなくなっちゃった」
遙はやるせなく首を振った。

「疲れているだけだよ」

僕は遙の肩を抱いた。だけど、遙は僕の手をそっとはずしてしまっ。誰にも触れてほしくないのだから。ふたりは無言で家路についた。

それから二日間、遙はひと言も口を利かなかった。

自分の殻に閉じこもってしまい、なにも言おうとしない。僕がなにかの拍子に物音を立てると、遙は頭がずきずき痛むように顔をしかめ、暗い目をして塞ぎこんだ。慰めの言葉をかけようとしても、遙は背中を向けて僕を避けてしまう。僕は、どうすればいいのかわからなかった。遙は学校もアルバイトも休み、買い物以外はずっと部屋にこもりつきりだった。

オカマさんに話を聞いてもらいたくて連絡をとって見たのだけど、彼は忙しそうだった。年末が近づいているのに、勤め先の美容院はまだ人手が足りないままのようだ。いつもは朗らかな彼も元気がなく、喉を痛めたとかで声がしわがれていた。僕は「また連絡します」とだけ言って、電話を切るよりほかなかった。

「ただいま」

いつものように学校から帰り、ふたりの家のドアを開けた。部屋には灯りがついていない。まだ六時前だけど、あたりはもう真っ暗で部屋も暗かった。僕は、近所の弁当屋で買ったかぼちゃコロッケと春雨サラダを手に提げていた。遙は疲れているから、料理を作る手間を省いてあげたかった。

遙は出かけたのだろうか。惣菜を買って帰ると携帯のメールを送っておいたから、スーパーへは行かなくていいはずだ。どこへ行ったのだろうか？僕は不思議に思いながら、壁のスイッチを入れた。

蛍光灯はすぐに灯らない。端っこがオレンジ色に変色しているから、もう寿命なのだろう。からからと乾いた音を立て、咳きこむように何回か明滅した後、ようやく明るくなった。カーペットにぺたりと坐りこんだ遙が、呆けた顔で天井を見上げていた。

「遙、どうしたの？」

僕は肩を揺さぶった。遙の瞳から涙がこぼれる。遙の目はどこかを見ているようで、どこも見ていない。

「なにがあったの？」

「ゆづちゃん」

遙は、放心したままかすかに聞き取れるほどの声で言う。

「黙ってたら、わからないよ。話してよ。また、お父さんがきたの？」

「違うわ」

「いったいどうしたの？」

「わたし、ほんとに、わからなくなったの？ わたしはなにをやっているんだろう？ やっぱり、求めたりしたらいけないのよ。愛してほしいとか、わかってほしいとか、そんなふうに求めたりしたらだめなのよ」

「誰でもそう思うものだよ。すこしずつ慣れようねってこの前に話したたる」

「そうだけど、やっぱりだめなのよ。求めたら、この始末だもの。」

きつと罰ばいが当たったんだわ」

「そんなことないよ」

「心がぐちゃぐちゃになってしまったの。どうしたらいいのかわからない」

遙は頭をかきむしる。

「落ちて着こつよ」

「そんなことできない」

「明日、いっしょに心療内科へ行こう。お医者さんに相談してみようよ」

「いやよ。お母さんといっしょになるのはごめんだわ。心療内科なんかへ行ったら、抗鬱剤を処方されてしまうわ。あれは麻薬なのよ。一度あんなものを飲み始めたら、一生飲み続けられないといけなくなつて、薬漬けにされてしまうわ。麻薬中毒にされるのとおなじだもの。心療内科の先生なんて、白衣を着た麻薬の売人よ。患者の弱みにつけこんで、危ない薬ばかり売りつけるのよ」

「そんなことないよ」

「わたしのお母さんは、十年以上も薬を飲み続けているのにぜんぜ

ん治らないのよ」

「そんなことを言ったって、このままじゃどうしようもないだろ」「どうしようもなくとも、薬だけは飲みたくないわ。お母さんみたいに、入退院を繰り返すことになってしまうもの。薬だけは絶対にいや」

「それじゃ、どうすればいいんだよ」

「わからない。今は、砂の中に埋まっているような感じがする。身動きがとれなくて、息苦しくて、はい上がるうにも、はい上がれないの。このまま窒息してしまいそう。死んだほうが楽なのかもしれない」

「そんなことを言わないでよ。今までなんのためにがんばってきたんだよ」

「がんばらないほうがよかったのかもしれない。なにをやっても、どうせむだなのよ」

「そんなことないってば」

「ゆうちゃんになにがわかるのよ」

遙は顔をおおって泣き始めた。

「僕は遙のことをわかっているつもりだよ」

「つもりでしょ。ほんとうのことはわからないのよ」

「そんな」

僕は返す言葉を失った。

今まで何度か喧嘩をしたこともあるけど、遙がこんなことを口走ったのは初めてだった。中三の時に会ってから、今まで一度も言ったことのない言葉だった。僕たちはいつもわかりあおうとしてきた。それだけが僕たちの命綱だった。

「ゆうちゃんは、わたしのことなんてなんにもわかっていないのよ。やさしそうなふりなんてしないでよ」

「とにかく、落ち着こうよ」

「だから、できないっていつているじゃない。もうなにも話さないで」

遥はヒステリックな叫び声を上げ、床にうずくまる。遥は、これまでにないほど激しく混乱している。すこし冷静になれるまで、時間が必要なだろう。気分さえ鎮まれば、遥もいつものように落ち着いて話すだろうから。父親にまったくわかってもらえなくて、ひどく傷ついてしまったのだ。むりもない。

僕は腫れ物に触るように遥をそっとしておいた。そのうち気分が上向くだろうと待ったのだけど、いつまでたっても塞ぎこんだままだ。死んだ愛が遥の心のなかで腐り始め、そのなかで立ちすくんでいるのかもしれない。遥は泥沼にはまりこみ、なす術もなく沈みゆく人のようだった。

どうすることもできないまま、一週間ばかりが過ぎた。

遥は食事もろくにとらず、見るみる間に痩せこけた。頬がげっそりして、蒼白い顔に目ばかりが痛々しくぎらつく。まるで、追いつめられた手負いの獣のようだ。いらだちを隠さなかったのは、あの時の一回切りだけだけど、遥はよそよそしく僕を避けた。夜は床に布団を敷き、別々に寝た。僕は、遥の他人行儀な態度が悲しかった。なんでもいいから、ぶつかってきてほしかった。そうしてさえくれば、いくらでも抱きとめようがあるのに。

「だいじな話があるの」

遥がぼつりと言った。僕は要らないプリントの裏に（マローズ・酷寒）と書いてた手をとめ、鉛筆を置いた。明日、ロシア語の単語テストがあるので、机に向かって暗記していた。窓の外は木枯らしが吹き、どんより曇っている。廃品回収車の間延びしたテープ音声が風に乗って途切れときれに聞こえてくる。

「なに？」

僕は遥に向き直った。遥はゆうべ、オカマさんにデザインしてもらった髪型を元へ戻した。愛らしくぴょんと跳ねていた髪にストリートパーマを当て直し、前髪もきちんと切りそろえている。昨日、遥が家へ帰ってきた時、僕は髪型のことを言ったのだけど、遥はな

にも言わず、申し訳なさそうに顔を伏せただけだった。

「わたしね、自分のことがよくわからなくなってしまったの」

「ゆっくりいこうよ。あせることなんてないんだから」

「ゆうちゃんわたしのことを一生懸命考えてくれているのに、ひどいことを言ったりして、ごめんなさい」

「いいんだよ。べつに気にしてないから。遥が苦しいのはよくわかっているし」

「考えれば考えるほど、自分のことがわからなくなってしまうたわ。なんのために生きているのか、自分のほんとうの気持ちがあんなのか、さっぱりわからないの。虚しくてやりきれなくて、息がつまりそうで、ただそれだけ。わたしは自分のことなんてなんにも知らない。だから、ゆうちゃんのことともよくわからないの。

自分のことを知らない人は、ほんとうに誰かを愛することなんてできないのよ。だから」

遥は言葉を詰まらせた。

「だから、なに」

僕は、冷たい風が胸に吹き抜けるのを感じた。

「これ以上、迷惑をかけられないわ。だから、別れてほしいの」
遥はつらそうに肩を震わせる。

僕はじつと遥を見つめた。いろんな想いが泡のように浮かんで、言葉にならないまま消える。心のもし火をふっと吹き消されてしまったようだ。僕にとって、遥との愛はオリンピックの聖火のようなものだった。僕たちは約束の地へ向かって走る聖火ランナーのはずだった。たとえつらいことに出くわしたとしても、今まで大切に守ってきたものをかき消してしまうだなんて、一度も考えたことがなかった。指先から、つま先から、力が抜ける。

「本気で言ってるの？」

「わたしは真剣よ。だって、ゆうちゃんに面倒ばかりかけているし、そう思うと心苦しくてしょうがないの。ゆうちゃんはもっと幸せになっただけなのよ。そうなるべきなんだわ。わたしなんかそばにい

たら足手まといだもの」

「足手まといだなんて、僕は遙のことをそんなふうに思っていないよ。遙を幸せにしたいし、遙とじゃなきゃ、幸せになれないんだよ」「どうして？ わたしと付き合っていていいことなんてないでしょ。楽しいことなんてないもの」

「僕は、こうして遙といっしょに暮しているから幸せなんだよ」

「ごめんなさい。自分のことがわからなくなったら、ゆうちゃんへの愛情も消えてしまったの。今は、ゆうちゃんが赤の他人に思えてしょうがないのよ。いっしょにいるのも、なんだか苦痛だし、

窮屈だし」

遙は言いにくそうに話し、目をそらす。

僕は部屋を見渡した。

ふたりで暮してきた狭いワンルームがなぜかざらんとして見える。ファッションケースの上に飾ったトトロとネコバスの人形も、本棚の隅に飾った陶製の回転木馬のオルゴールも息づかいをやめ、この部屋をつつんでいたあたたかい雰囲気はどこかへ消えてしまった。まるで誰も遊びにこない遊園地にいるようで、さびしい。

「暗いね」

僕は立ち上がって蛍光灯のスイッチを入れたのだけど、とうとう切れてしまった。スイッチを入れなおしても、明かりがついてくれない。

「散歩に行ってくる」

僕は、そのまま部屋を飛び出した。

すこしだけ家の近所をぶらついて気持ち落ち着かせるつもりが、いつの間に電車に乗っていた。どこでどう乗り換えたのかもわからないけど、気がつくやうと荒川の堤防に立っていた。万力で締めつけられたような心の痛みを感じたから、無意識のうちになだっ広い場所を求めたのかもしれない。

ゆっくり流れる川は曇り空を映して鈍色に染まっていた。枯れたすすきが土手に揺れ、サッカーのユニフォームを着た少年たちが河川

敷のグラウンドで練習に励んでいる。僕は堤防の上をとぼとぼ歩き、適当なところで土手の斜面に腰かけた。

ひよっとしたらとは考えていたけど、まさかほんとうに遙があんなことを言い出すとは思っても寄らなかつた。今から思えば、遙のよそよそしさと冷たさはそのシグナルだったのだからうけど。

今まで遙とふたりで幸せになろうと思つてがんばつてきたのに、いきなりあんなことを言われても、すぐには納得できない。今までの努力は何だったのだろう。中三の頃から、僕たちは青春のすべてを注いでわかりあおうとしてきたはずなのに。

僕は重たい空を見上げた。

世界の果てまでおおつた厚い雲はじれつたそうに震え、今にも泣き出しそうだ。そういえば、遙とふたりで地元の土手へよく通つていた頃、雨に降られたことがあつた。

ちようど、今と同じ冬の初めだった。休みの日に土手で落ち合つては、お互いに本を貸し借りした。あの日、僕はジツドの『狭き門』を遙へ返して、ドストエフスキーの『貧しき人々』を貸したのだったと思う。話しこんでいるうちに突然土砂降りの雨が降り出したから、僕たちは悲鳴をあげ、あわてて鉄橋の下へ駆けこんだ。ほつと一息ついたと思つたら、今度は電車が通り、大粒の滴をばらばらと振り落として行つた。びっくりした僕たちはなにを思つたのか、雨へ飛び出してしまった。なんだかおかしくて、くすくす笑つた。愉快そうな遙を見ているだけで、僕はなにもかもが満たされた。ほかのものなど、なにも要らなかつた。

むりに引き留めようとするよりも、あっさり別れてあげたほうがいいのだろう。

遙の横顔は苦しげだった。遙は、僕を裏切つてしまつたと自分を責めている。そんな遙は見たくもない。楽にしてあげたい。

遙の気分がすつきりして、それで人生をやり直せるのなら、別れたほうがいいに決まつている。こんがらかつてしまつた糸の結び目は、切つてしまうよりほかにどうしようもない時がある。それが愛

なのかどうかはわからないけど、やさしさなのはわからないけど、今はそうするしかないだろう。

遙はきまぐれでものを言う女の子ではない。遙が別れたいと言ったのはよほどの理由があるからだ。もしかしたら、僕が一所懸命支えようとしたのが、かえって重荷になったのかもしれない。遙の言った通り、僕は遙のことをわかったつもりになっていただけなのかもしれない。

僕は川岸まで駆け、あたりに転がっている石を手当たり次第、川面へ投げこんだ。石は、荒川のごく表面だけを跳ね飛ばしてすぐに沈んでしまう。石を投げつけたところで、川の流れが変わるはずもなければ、堰きとめられるはずもない。だけど、そうせずにはいられなかった。何度もなんども、息が切れても投げ続けた。

大学の女子寮に空き部屋があったので、遙はそちらへ移ることになった。

ふたりで遙の荷物をダンボールにつめ、先に宅配便で送った。遙は薄いカーテンを外し、冬用の厚いカーテンにかけ替えてくれた。

「結局、振り出しに戻ってしまったのね」

パソコンやデジカメといった宅配便で送れない荷物をまとめながら遙はしんみり言った。最後の荷物は、リュックと紙袋に入れて遙が自分で運ぶ。それが僕たちのお別れだった。

「どういうわけか、今は世の中の人々が全部敵に思えてしょうがないの。ゆうちゃんと出会う前もそうだったわ。自分の世界が崩れないように、わたしは必死になって自分の壁を守ろうとしていたの。ゆうちゃんがせつかくその壁を突き崩してくれたのに、また壁を作ることになってしまったわ」

僕はなにも答えず、パソコンのケーブルを紐でくくった。

「怒ってるの？ そうよね。怒って当然よね」

「そんなことないよ」

「それじゃ、どうして黙っているの」

遙はしょんぼりする。

「早く荷物を片付けなきゃね。寮の職員の人が向こうで待っているんだろ」

僕は素っ気なく言った。そうでもしないと、遙を引き留めてしまいたいそうさ。

「そうだけど」

遙は洗濯できなかった汚れ物をビニール袋にまとめ、いつか伊勢丹で買ったリュックの底へ入れた。

「楽しかったわ」

遙は僕を見つめる。僕は遙と目を合わさないようにして束ねたケールやマウスを紙袋につめた。

「さあ、できたよ。駅まで送っていくよ」

「ごめんなさい。勝手に出て行くのに、楽しかったなんてわがままよね」

遙は、部屋の合鍵をちゃぶ台のうえに置き、

「今までありがとう。 ゆうちゃんは幸せになってね」

と言って立ち上がる。僕は、遙が持とうとした紙袋をひったくるようにして自分の手に提げた。これが遙にしてあげられる最後のことだから。

僕たちの物語は終わった。

喫茶店の窓の外は夕暮れだった。買い物客がせわしそうに歩いている。

僕は丸太造りの壁際まで行き、ふたりで花火大会へ行った時の写真を取り去ろうとした。思い出を取っておきたいからというわけではない。思い出なら胸の中にくらでもある。遙と過ごした日々は僕の青春そのものだから、色褪せるはずもない。ただ、この店へくるたびに遙との日々を思い出すのは、せつなかった。

写真に留めた画鋏を外そうとして、ふと迷った。

ふたりの思い出なのに、ふたりで貼った写真なのに、僕一人で勝

手にはがしてしまうのはどうなんだろう？

憎くて別れたわけじゃない。嫌いになったわけでもない。いろんなことがうまくいかなくて、疲れてしまっただけのことだ。悪いのは僕だ。力が足りなくて、遙を幸せにしてあげられなかった。彼女につらい思いをさせてしまった。

僕は画鋏から手を離した。

このままそつとしておこう。

愛の意味なんてまだわからないけど、いつか笑って話せる日がくるかもしれないから。

ログハウス風のドアを開け、外へ出た。

ビルに切り取られた東京の空は茜色に染まっていた。クジラの形をした雲はまだ空に浮かび、夕陽を浴びて黄金色に輝いている。

僕は立ち止まり、ぼんやりその雲を眺めた。お母さんクジラのようなやさしい雲は、唄っているような、笑っているような。

今は虚ろな気分だけど、なにかが僕をどこかへ導いてくれるのだろう。どこかへ連れて行ってくれるのだろう。僕は、遙が編んでくれたマフラーを首に巻いた。マフラーに顔をうずめると、遙の透명한香りがかすかに漂った。

了

空飛ぶクジラはやさしく唄う（後書き）

最後までお付き合い合ってくださいまして、まことにありがとうございました。
ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0481j/>

空飛ぶクジラはやさしく唄う

2011年11月13日22時23分発行